高校受験 古文・漢文 総まとめ（A5）

スマホで見やすいサイズ / 重要は大きく / 内容は付録で全収録

収録（全件）	重要候補（自動抽出）
757件	**175件**

生成日	対象データ
2026-01-06	**classical-japanese**

使い方（おすすめ）

- まず各章の「重要ポイント（大きく）」だけ流し読み（10〜20分）
- 間違えた/曖昧な項目だけ「付録：全データ」で該当カードを確認
- 前日は「重要ポイント」だけもう1周（短時間で復習できる）

※「重要候補」はCSVの関連事項（最重要/最頻出など）や種別から自動抽出。必要なら基準は調整できます。

古文：文法・敬語・助動詞

全80件　/ 重要候補80件　classical-grammar.csv

重要ポイント（大きく）

たまふ (たまう)

最頻出

お与えになる・〜なさる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たまふ」は尊敬語で「お与えになる」「〜なさる」の意。補助動詞として「〜なさる」の意でも使う。「賜ふ」「給ふ」と書く。最頻出の尊敬語。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

尊敬語　お与えになる　なさる　最頻出　時代:平安時代　種別:古文敬語

きこゆ (きこゆ)

申し上げる・お聞こえになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「きこゆ」は謙譲語で「申し上げる」の意。尊敬語で「お聞こえになる」の意もある。「聞こゆ」と書く。謙譲と尊敬の両方の用法がある重要語。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

謙譲語 尊敬語 申し上げる 聞こえる 時代:平安時代 種別:古文敬語

はべり (はべり)

頻出

あります・ございます

平安時代 / 古文敬語

解説

「はべり」は丁寧語で「あります」「ございます」「お仕えする」の意。「侍り」と書く。「あり」の丁寧語。会話文に頻出。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

丁寧語 あります ございます 侍り 時代:平安時代 種別:古文敬語

さぶらふ (さぶらう)

お仕えする・おります

平安時代 / 古文敬語

解説

「さぶらふ」は謙譲語で「お仕えする」「おります」の意。「候ふ」と書く。貴人の近くに控える意味。「はべり」より古風。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

謙譲語 | お仕えする | おります | 候ふ | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

おはす (おわす)

最重要

いらっしゃる・おいでになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはす」は尊敬語で「いらっしゃる」「おいでになる」「おられる」の意。「御座す」と書く。「あり」「をり」「行く」「来」の尊敬語。最重要尊敬語。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

尊敬語 | いらっしゃる | おいでになる | 御座す | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

まかる (まかる)

退出する・参る

平安時代 / 古文敬語

解説

「まかる」は謙譲語で「退出する」「参る」の意。「罷る」と書く。貴人の前から退く意味。「行く」の謙譲語としても使う。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語　退出する　参る　罷る　時代:平安時代　種別:古文敬語

まかづ (まかず)

退出させる・お帰しになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まかづ」は「退出させる」「お帰しになる」の意。「まかる」の使役形。「罷づ」と書く。貴人が人を退出させる意味。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

退出させる　帰す　使役　罷づ　時代:平安時代　種別:古文敬語

まゐる (まいる)

最頻出

参上する・差し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まゐる」は謙譲語で「参上する」「差し上げる」の意。「参る」と書く。「行く」「来」「食ふ」「飲む」などの謙譲語。最頻出謙譲語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 参上する 差し上げる 参る 時代:平安時代 種別:古文敬語

たてまつる (たてまつる)

最重要

差し上げる・申し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たてまつる」は謙譲語で「差し上げる」「申し上げる」の意。「奉る」と書く。「〜してさしあげる」の補助動詞としても頻出。最重要謙譲語。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語 | 差し上げる | 申し上げる | 奉る | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

けり (けり)

最重要

〜た・〜たなあ

平安時代 / 助動詞

解説

「けり」は過去・詠嘆の助動詞。「〜た」「〜たなあ」の意。ラ変型活用。連用形接続。伝聞過去や詠嘆を表す。最重要助動詞の一つ。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 詠嘆 助動詞 伝聞過去 時代:平安時代 種別:助動詞

き (き)

〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「き」は過去の助動詞。「〜た」の意。特殊型活用。連用形接続。直接過去(自分が体験した過去)を表す。「けり」(伝聞過去)と対比される重要助動詞。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 | 直接過去 | 体験 | けりと対 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

つ (つ)

〜てしまった・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「つ」は完了の助動詞。「〜てしまった」「〜た」の意。下二段型活用。連用形接続。強い完了・確述を表す。「ぬ」と対で重要助動詞。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

完了 確述 てしまった 強意 時代:平安時代 種別:助動詞

ぬ (ぬ)

〜てしまった・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「ぬ」は完了の助動詞。「〜てしまった」「〜た」の意。ナ変型活用。連用形接続。完了・確述を表す。「つ」と対。打消の「ず」の連体形とは別。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

完了 確述 てしまった つと対 時代:平安時代 種別:助動詞

たり (たり)

〜ている・〜だ

平安時代 / 助動詞

解説

「たり」は完了・存続の助動詞。「〜ている」「〜だ」の意。ラ変型活用。連用形(音便)接続。状態の継続を表す。「咲きたり」などの形。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

完了 存続 ている 音便接続 時代:平安時代 種別:助動詞

り (り)

〜ている・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「り」は完了・存続の助動詞。「〜ている」「〜た」の意。ラ変型活用。サ変の未然形・四段の已然形に接続。特殊な接続をする助動詞。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

完了 | 存続 | ている | 特殊接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

ず (ず)

最重要

〜ない

平安時代 / 助動詞

解説

「ず」は打消の助動詞。「〜ない」の意。特殊型活用。未然形接続。連体形は「ぬ」、已然形は「ね」。打消表現として最重要。「〜ず」「〜ぬ」「〜ね」の使い分けに注意。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

打消 ない ぬね 未然形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

む (む)

最重要

〜だろう・〜よう

平安時代 / 助動詞

解説

「む」は推量・意志・勧誘・仮定・婉曲の助動詞。「〜だろう」「〜よう」の意。特殊型活用。未然形接続。多義的な最重要助動詞。現代語の「う・よう」の原型。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

推量 | 意志 | 勧誘 | 仮定婉曲 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

むず (むず)

〜にちがいない・きっと〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「むず」は推量の助動詞。「〜にちがいない」「きっと〜だろう」の意。サ変型活用。終止形接続。「む」+「す」の融合。強い推量を表す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 | にちがいない | 強意 | むとす | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

べし (べし)

最重要

〜するべきだ・〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「べし」は推量・当然・義務・命令・可能・意志の助動詞。「〜するべきだ」「〜だろう」の意。特殊型活用。終止形接続(ラ変は連体形)。多義的な最重要助動詞。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 | 当然 | 義務 | 命令可能意志 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

まし (まし)

〜だろうに・〜ただろう

平安時代 / 助動詞

解説

「まし」は反実仮想の助動詞。「〜だろうに」「〜ただろう」の意。特殊型活用。未然形接続。事実に反する仮定や後悔を表す。「ましかば〜まし」の形。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

反実仮想 | だろうに | 仮定 | 後悔 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

まほし (まほし)

〜たい・〜てほしい

平安時代 / 助動詞

解説

「まほし」は希望の助動詞。「〜たい」「〜てほしい」の意。形容詞型活用。未然形接続。話し手の願望を表す。「見まほし」「聞きまほし」の形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

希望 | たい | 願望 | 未然形接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

たし (たし)

〜たい

平安時代 / 助動詞

解説

「たし」は希望の助動詞。「〜たい」の意。形容詞型活用。連用形接続。「まほし」より口語的。「見たし」「聞きたし」などの形で願望を表す。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

希望 | たい | 口語的 | 連用形接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

らし (らし)

〜らしい・〜ようだ

平安時代 / 助動詞

解説

「らし」は推定の助動詞。「〜らしい」「〜ようだ」の意。形容詞型活用の一部のみ。終止形接続。客観的な根拠に基づく推定を表す。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

推定 | らしい | 客観的根拠 | 終止形接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

めり (めり)

〜ようだ・〜らしい

平安時代 / 助動詞

解説

「めり」は推定の助動詞。「〜ようだ」「〜らしい」の意。ラ変型活用。終止形接続。視覚的な根拠に基づく推定。「見+あり」が語源。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推定 ようだ 視覚的 見あり 時代:平安時代 種別:助動詞

なり(伝聞) (なり)

〜そうだ・〜と聞こえる

平安時代 / 助動詞

解説

「なり」は伝聞・推定の助動詞。「〜そうだ」「〜と聞こえる」の意。ラ変型活用。終止形接続。「音+なり」で伝聞。断定の「なり」とは別。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

伝聞 推定 そうだ 音なり 時代:平安時代 種別:助動詞

なり(断定) (なり)

〜だ・〜である

平安時代 / 助動詞

解説

「なり」は断定の助動詞。「〜だ」「〜である」の意。ラ変型活用。体言・連体形に接続。現代語の「だ」「です」に相当。伝聞の「なり」とは別。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

断定 だ 体言接続 である 時代:平安時代 種別:助動詞

たり(断定) (たり)

〜だ・〜である

平安時代 / 助動詞

解説

「たり」は断定の助動詞。「〜だ」「〜である」の意。ラ変型活用。体言に接続。「と+あり」が語源。「なり」より古い断定表現。完了の「たり」とは別。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

断定 だ とあり 体言接続 時代:平安時代 種別:助動詞

る（る）

最重要

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「る」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。多義語として最重要。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

受身　尊敬　自発　可能　時代:平安時代　種別:助動詞

らる (らる)

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「らる」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(上一・上二・下一・下二・サ変)。「る」と同義で接続が異なる。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

受身 尊敬 自発 可能 時代:平安時代 種別:助動詞

す (す)

〜せる・〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「す」は使役・尊敬の助動詞。「〜せる」「〜させる」の意。サ変型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。使役が主で尊敬は稀。「言はす」「泣かす」の形。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

使役 尊敬 せる 四段ナ変ラ変 時代:平安時代 種別:助動詞

さす (さす)

〜せる・〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「さす」は使役・尊敬の助動詞。「〜せる」「〜させる」の意。サ変型活用。未然形接続(上一・上二・下一・下二・サ変)。「す」と同義で接続が異なる。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

使役 尊敬 せる 上下二段サ変 時代:平安時代 種別:助動詞

しむ (しむ)

〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「しむ」は使役の助動詞。「〜させる」の意。下二段型活用。未然形接続。「す・さす」と同じ使役だが接続が異なる。古語では稀。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

使役 | させる | 下二段 | 未然形接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

じ (じ)

〜まい・〜ないつもりだ

平安時代 / 助動詞

解説

「じ」は打消推量・打消意志の助動詞。「〜まい」「〜ないつもりだ」の意。特殊型活用。未然形接続。「む」の打消形として重要。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

打消推量 打消意志 まい む打消 時代:平安時代 種別:助動詞

まじ (まじ)

〜ないだろう・〜べきでない

平安時代 / 助動詞

解説

「まじ」は打消推量・打消当然の助動詞。「〜ないだろう」「〜べきでない」の意。形容詞型活用。終止形接続。「べし」の打消形として重要。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

打消推量 べきでない べし打消 形容詞型 時代:平安時代 種別:助動詞

尊敬語の「れる・られる」 (れる・られる)

尊敬の助動詞

平安時代 / 古文敬語

解説

助動詞「れる・られる」は尊敬・受身・自発・可能の四つの意味を持つ。未然形に接続。文脈で尊敬かどうかを判断。主語が高貴な人物で動作主なら尊敬。「見られる」「言はれる」など。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

尊敬 | 助動詞 | 受身 | 自発 | 可能 | 識別 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

絶対敬語と相対敬語 (絶対敬語・相対敬語)

敬語の分類

平安時代 / 古文敬語

解説

「絶対敬語」は天皇・皇族など特定の高貴な人物に対してのみ使う敬語。「相対敬語」は話し手と聞き手の上下関係で使い分ける敬語。平安時代は絶対敬語中心。鎌倉時代以降は相対敬語も発達。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

絶対敬語 相対敬語 分類 時代 時代:平安時代 種別:古文敬語

二方向の敬語 (二方向敬語)

複数方向への敬意

平安時代 / 古文敬語

解説

一つの文の中で複数の人物に対して敬意を表すこと。例えば動詞に尊敬語を使い、さらに補助動詞で謙譲を表すなど。「申し給ふ」「聞こえ給ふ」などが二方向の敬語の例。主語と対象の両方への敬意。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

二方向 | 複数敬意 | 複合 | 主語と対象 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

敬語の識別（給ふの三用法） (たまうの識別)

頻出

給ふの意味判定

平安時代 / 古文敬語

解説

「給ふ」は本動詞「与える」、尊敬の補助動詞「〜なさる」、謙譲の補助動詞「〜申し上げる」の三つの用法がある。動詞の連用形に付けば補助動詞。主語が高貴なら尊敬、動作の対象が高貴なら謙譲。識別問題の頻出項目。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

識別 三用法 本動詞 尊敬 謙譲 時代:平安時代 種別:古文敬語

最高敬語（おはします） (おわします)

天皇への敬語

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはします」は天皇や皇族など最高位の人物にのみ使う最高敬語。「おはす」に尊敬の助動詞「ます」が付いた二重敬語。一般の貴族には使わない。絶対敬語の典型例。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

最高敬語 | 天皇 | 二重敬語 | 絶対敬語 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

謙譲語II（丁重語） (謙譲語II)

丁重語の概念

平安時代 / 古文敬語

解説

謙譲語II（丁重語）は、動作の向かう先ではなく、話し手が聞き手に対して丁重に述べる表現。「参る」「申す」「存ず」など。動作の対象に敬意を表すのではなく、話し手の謙虚な態度を示す。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

謙譲語II　丁重語　話し手　聞き手　態度　時代:平安時代　種別:古文敬語

付録：全データ（削らない）

たまふ (たまう)

最頻出

お与えになる・〜なさる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たまふ」は尊敬語で「お与えになる」「〜なさる」の意。補助動詞として「〜なさる」の意でも使う。「賜ふ」「給ふ」と書く。最頻出の尊敬語。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

尊敬語 | お与えになる | なさる | 最頻出 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

きこゆ (きこゆ)

申し上げる・お聞こえになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「きこゆ」は謙譲語で「申し上げる」の意。尊敬語で「お聞こえになる」の意もある。「聞こゆ」と書く。謙譲と尊敬の両方の用法がある重要語。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

謙譲語 尊敬語 申し上げる 聞こえる 時代:平安時代 種別:古文敬語

はべり (はべり)

頻出

あります・ございます

平安時代 / 古文敬語

解説

「はべり」は丁寧語で「あります」「ございます」「お仕えする」の意。「侍り」と書く。「あり」の丁寧語。会話文に頻出。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

丁寧語 あります ございます 侍り 時代:平安時代 種別:古文敬語

さぶらふ (さぶらう)

お仕えする・おります

平安時代 / 古文敬語

解説

「さぶらふ」は謙譲語で「お仕えする」「おります」の意。「候ふ」と書く。貴人の近くに控える意味。「はべり」より古風。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

謙譲語 お仕えする おります 候ふ 時代:平安時代 種別:古文敬語

おはす (おわす)

最重要

いらっしゃる・おいでになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはす」は尊敬語で「いらっしゃる」「おいでになる」「おられる」の意。「御座す」と書く。「あり」「をり」「行く」「来」の尊敬語。最重要尊敬語。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

尊敬語 いらっしゃる おいでになる 御座す 時代:平安時代 種別:古文敬語

まかる (まかる)

退出する・参る

平安時代 / 古文敬語

解説

「まかる」は謙譲語で「退出する」「参る」の意。「罷る」と書く。貴人の前から退く意味。「行く」の謙譲語としても使う。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語　退出する　参る　罷る　時代:平安時代　種別:古文敬語

まかづ (まかず)

退出させる・お帰しになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まかづ」は「退出させる」「お帰しになる」の意。「まかる」の使役形。「罷づ」と書く。貴人が人を退出させる意味。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

退出させる　帰す　使役　罷づ　時代:平安時代　種別:古文敬語

まゐる (まいる)

最頻出

参上する・差し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まゐる」は謙譲語で「参上する」「差し上げる」の意。「参る」と書く。「行く」「来」「食ふ」「飲む」などの謙譲語。最頻出謙譲語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語　参上する　差し上げる　参る　時代:平安時代　種別:古文敬語

たてまつる (たてまつる)

最重要

差し上げる・申し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たてまつる」は謙譲語で「差し上げる」「申し上げる」の意。「奉る」と書く。「〜してさしあげる」の補助動詞としても頻出。最重要謙譲語。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語 | 差し上げる | 申し上げる | 奉る | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

けり (けり)

最重要

〜た・〜たなあ

平安時代 / 助動詞

解説

「けり」は過去・詠嘆の助動詞。「〜た」「〜たなあ」の意。ラ変型活用。連用形接続。伝聞過去や詠嘆を表す。最重要助動詞の一つ。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 詠嘆 助動詞 伝聞過去 時代:平安時代 種別:助動詞

き (き)

〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「き」は過去の助動詞。「〜た」の意。特殊型活用。連用形接続。直接過去(自分が体験した過去)を表す。「けり」(伝聞過去)と対比される重要助動詞。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 直接過去 体験 けりと対 時代:平安時代 種別:助動詞

つ（つ）

〜てしまった・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「つ」は完了の助動詞。「〜てしまった」「〜た」の意。下二段型活用。連用形接続。強い完了・確述を表す。「ぬ」と対で重要助動詞。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

完了　確述　てしまった　強意　時代:平安時代　種別:助動詞

ぬ（ぬ）

〜てしまった・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「ぬ」は完了の助動詞。「〜てしまった」「〜た」の意。ナ変型活用。連用形接続。完了・確述を表す。「つ」と対。打消の「ず」の連体形とは別。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

完了　確述　てしまった　つと対　時代:平安時代　種別:助動詞

たり (たり)

〜ている・〜だ

平安時代 / 助動詞

解説

「たり」は完了・存続の助動詞。「〜ている」「〜だ」の意。ラ変型活用。連用形(音便)接続。状態の継続を表す。「咲きたり」などの形。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

完了 存続 ている 音便接続 時代:平安時代 種別:助動詞

り（り）

〜ている・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「り」は完了・存続の助動詞。「〜ている」「〜た」の意。ラ変型活用。サ変の未然形・四段の已然形に接続。特殊な接続をする助動詞。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

完了　存続　ている　特殊接続　時代:平安時代　種別:助動詞

ず (ず)

最重要

〜ない

平安時代 / 助動詞

解説

「ず」は打消の助動詞。「〜ない」の意。特殊型活用。未然形接続。連体形は「ぬ」、已然形は「ね」。打消表現として最重要。「〜ず」「〜ぬ」「〜ね」の使い分けに注意。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

打消 ない ぬね 未然形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

む (む)

最重要

〜だろう・〜よう

平安時代 / 助動詞

解説

「む」は推量・意志・勧誘・仮定・婉曲の助動詞。「〜だろう」「〜よう」の意。特殊型活用。未然形接続。多義的な最重要助動詞。現代語の「う・よう」の原型。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

推量 意志 勧誘 仮定婉曲 時代:平安時代 種別:助動詞

むず (むず)

〜にちがいない・きっと〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「むず」は推量の助動詞。「〜にちがいない」「きっと〜だろう」の意。サ変型活用。終止形接続。「む」+「す」の融合。強い推量を表す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 にちがいない 強意 むとす 時代:平安時代 種別:助動詞

べし (べし)

最重要

〜するべきだ・〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「べし」は推量・当然・義務・命令・可能・意志の助動詞。「〜するべきだ」「〜だろう」の意。特殊型活用。終止形接続(ラ変は連体形)。多義的な最重要助動詞。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 当然 義務 命令可能意志 時代:平安時代 種別:助動詞

まし (まし)

〜だろうに・〜ただろう

平安時代 / 助動詞

解説

「まし」は反実仮想の助動詞。「〜だろうに」「〜ただろう」の意。特殊型活用。未然形接続。事実に反する仮定や後悔を表す。「ましかば〜まし」の形。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

反実仮想 だろうに 仮定 後悔 時代:平安時代 種別:助動詞

まほし (まほし)

〜たい・〜てほしい

平安時代 / 助動詞

解説

「まほし」は希望の助動詞。「〜たい」「〜てほしい」の意。形容詞型活用。未然形接続。話し手の願望を表す。「見まほし」「聞きまほし」の形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

希望 たい 願望 未然形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

たし (たし)

〜たい

平安時代 / 助動詞

解説

「たし」は希望の助動詞。「〜たい」の意。形容詞型活用。連用形接続。「まほし」より口語的。「見たし」「聞きたし」などの形で願望を表す。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

希望 たい 口語的 連用形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

らし (らし)

〜らしい・〜ようだ

平安時代 / 助動詞

解説

「らし」は推定の助動詞。「〜らしい」「〜ようだ」の意。形容詞型活用の一部のみ。終止形接続。客観的な根拠に基づく推定を表す。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

推定 らしい 客観的根拠 終止形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

めり (めり)

〜ようだ・〜らしい

平安時代 / 助動詞

解説

「めり」は推定の助動詞。「〜ようだ」「〜らしい」の意。ラ変型活用。終止形接続。視覚的な根拠に基づく推定。「見+あり」が語源。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推定 ようだ 視覚的 見あり 時代:平安時代 種別:助動詞

なり(伝聞) (なり)

〜そうだ・〜と聞こえる

平安時代 / 助動詞

解説

「なり」は伝聞・推定の助動詞。「〜そうだ」「〜と聞こえる」の意。ラ変型活用。終止形接続。「音+なり」で伝聞。断定の「なり」とは別。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

伝聞 推定 そうだ 音なり 時代:平安時代 種別:助動詞

なり(断定) (なり)

〜だ・〜である

平安時代 / 助動詞

解説

「なり」は断定の助動詞。「〜だ」「〜である」の意。ラ変型活用。体言・連体形に接続。現代語の「だ」「です」に相当。伝聞の「なり」とは別。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

断定 だ 体言接続 である 時代:平安時代 種別:助動詞

たり(断定) (たり)

〜だ・〜である

平安時代 / 助動詞

解説

「たり」は断定の助動詞。「〜だ」「〜である」の意。ラ変型活用。体言に接続。「と+あり」が語源。「なり」より古い断定表現。完了の「たり」とは別。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

断定 だ とあり 体言接続 時代:平安時代 種別:助動詞

る（る）

最重要

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「る」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。多義語として最重要。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

受身　尊敬　自発　可能　時代:平安時代　種別:助動詞

らる (らる)

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「らる」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(上一・上二・下一・下二・サ変)。「る」と同義で接続が異なる。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

受身 尊敬 自発 可能 時代:平安時代 種別:助動詞

す (す)

〜せる・〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「す」は使役・尊敬の助動詞。「〜せる」「〜させる」の意。サ変型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。使役が主で尊敬は稀。「言はす」「泣かす」の形。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

使役 尊敬 せる 四段ナ変ラ変 時代:平安時代 種別:助動詞

さす (さす)

〜せる・〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「さす」は使役・尊敬の助動詞。「〜せる」「〜させる」の意。サ変型活用。未然形接続(上一・上二・下一・下二・サ変)。「す」と同義で接続が異なる。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

使役 尊敬 せる 上下二段サ変 時代:平安時代 種別:助動詞

しむ (しむ)

〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「しむ」は使役の助動詞。「〜させる」の意。下二段型活用。未然形接続。「す・さす」と同じ使役だが接続が異なる。古語では稀。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

使役 | させる | 下二段 | 未然形接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

じ (じ)

〜まい・〜ないつもりだ

平安時代 / 助動詞

解説

「じ」は打消推量・打消意志の助動詞。「〜まい」「〜ないつもりだ」の意。特殊型活用。未然形接続。「む」の打消形として重要。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

打消推量 | 打消意志 | まい | む打消 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

まじ (まじ)

〜ないだろう・〜べきでない

平安時代 / 助動詞

解説

「まじ」は打消推量・打消当然の助動詞。「〜ないだろう」「〜べきでない」の意。形容詞型活用。終止形接続。「べし」の打消形として重要。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

打消推量 べきでない べし打消 形容詞型 時代:平安時代 種別:助動詞

尊敬語の「れる・られる」 (れる・られる)

尊敬の助動詞

平安時代 / 古文敬語

解説

助動詞「れる・られる」は尊敬・受身・自発・可能の四つの意味を持つ。未然形に接続。文脈で尊敬かどうかを判断。主語が高貴な人物で動作主なら尊敬。「見られる」「言はれる」など。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

尊敬 助動詞 受身 自発 可能 識別 時代:平安時代 種別:古文敬語

絶対敬語と相対敬語 (絶対敬語・相対敬語)

敬語の分類

平安時代 / 古文敬語

解説

「絶対敬語」は天皇・皇族など特定の高貴な人物に対してのみ使う敬語。「相対敬語」は話し手と聞き手の上下関係で使い分ける敬語。平安時代は絶対敬語中心。鎌倉時代以降は相対敬語も発達。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

絶対敬語 相対敬語 分類 時代 時代:平安時代 種別:古文敬語

二方向の敬語 (二方向敬語)

複数方向への敬意

平安時代 / 古文敬語

解説

一つの文の中で複数の人物に対して敬意を表すこと。例えば動詞に尊敬語を使い、さらに補助動詞で謙譲を表すなど。「申し給ふ」「聞こえ給ふ」などが二方向の敬語の例。主語と対象の両方への敬意。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

二方向 | 複数敬意 | 複合 | 主語と対象 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

敬語の識別（給ふの三用法） (たまうの識別)

頻出

給ふの意味判定

平安時代 / 古文敬語

解説

「給ふ」は本動詞「与える」、尊敬の補助動詞「〜なさる」、謙譲の補助動詞「〜申し上げる」の三つの用法がある。動詞の連用形に付けば補助動詞。主語が高貴なら尊敬、動作の対象が高貴なら謙譲。識別問題の頻出項目。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

識別 三用法 本動詞 尊敬 謙譲 時代:平安時代 種別:古文敬語

最高敬語（おはします） (おわします)

天皇への敬語

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはします」は天皇や皇族など最高位の人物にのみ使う最高敬語。「おはす」に尊敬の助動詞「ます」が付いた二重敬語。一般の貴族には使わない。絶対敬語の典型例。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

最高敬語 | 天皇 | 二重敬語 | 絶対敬語 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

謙譲語II（丁重語） (謙譲語II)

丁重語の概念

平安時代 / 古文敬語

解説

謙譲語II（丁重語）は、動作の向かう先ではなく、話し手が聞き手に対して丁重に述べる表現。「参る」「申す」「存ず」など。動作の対象に敬意を表すのではなく、話し手の謙虚な態度を示す。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

謙譲語II　丁重語　話し手　聞き手　態度　時代:平安時代　種別:古文敬語

複合敬語 (複合敬語)

敬語の重ね方

平安時代 / 古文敬語

解説

複合敬語は二つ以上の敬語表現を組み合わせたもの。「申し給ふ」（謙譲+尊敬）、「おはします」（尊敬+尊敬）など。より高い敬意を表す。「のたまはせ給ふ」のような三重敬語もある。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

複合敬語 | 二重敬語 | 組み合わせ | 高敬意 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

敬意の方向 (敬意の方向)

敬語の向き

平安時代 / 古文敬語

解説

敬語には「誰から誰への敬意か」という方向性がある。尊敬語は動作の主体に敬意、謙譲語は動作の対象に敬意。複数の人物が登場する文では、敬語の方向を正しく把握することが読解の鍵。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

敬意 方向 主体 対象 読解 時代:平安時代 種別:古文敬語

敬語の省略 (敬語の省略)

敬語表現の簡略化

平安時代 / 古文敬語

解説

会話文や親しい間柄では敬語が省略されることがある。「給ふ」が省かれたり、簡略な形になったりする。文脈から補って理解する必要がある。「のたまふ」→「言ふ」など。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

省略 簡略化 会話 文脈 理解 時代:平安時代 種別:古文敬語

お・ご（接頭語） (お・ご)

美化語の接頭語

平安時代 / 古文敬語

解説

「お」「ご」は名詞に付いて丁寧さや美しさを添える接頭語。「お手紙」「ご返事」など。古文では「御」と書く。「御文」「御返り」などの形。美化語として機能。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

接頭語 美化語 御 丁寧 名詞 時代:平安時代 種別:古文敬語

身分による敬語の違い (身分と敬語)

社会階層と敬語

平安時代 / 古文敬語

解説

古文の敬語は話し手と相手の身分関係で使い分けられる。天皇・皇族には最高敬語、貴族間では通常敬語、庶民には敬語を使わないなど。身分社会を反映した言語表現。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

身分 階層 社会 使い分け 天皇 時代:平安時代 種別:古文敬語

を (を)

格助詞（対象・経由）

助詞

解説

格助詞「を」は動作の対象を示す。「花を見る」「道を行く」。現代語とほぼ同じ用法。移動の経由地も表す。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

助詞 格助詞 対象 経由 を 種別:助詞

に（に）

最頻出

格助詞（場所・時・対象）

助詞

解説

格助詞「に」は場所・時・動作の対象などを示す。「京に住む」「春に咲く」「人に会ふ」。多様な意味を持つ最頻出助詞。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞　格助詞　場所　時　対象　種別:助詞

にて (にて)

格助詞（場所・手段）

助詞

解説

格助詞「にて」は動作が行われる場所や手段を示す。「京にて聞く」（京都で聞く）「筆にて書く」（筆で書く）。「に」＋「て」。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

助詞　格助詞　場所　手段　にて　種別:助詞

より (より)

格助詞（起点・比較・手段）

助詞

解説

格助詞「より」は起点・比較の基準・手段などを示す。「京より来たる」「花より美し」。現代語の「から」「よりも」に相当。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

助詞　格助詞　起点　比較　より　種別:助詞

して（して）

格助詞（手段・様態）

助詞

解説

格助詞「して」は手段・方法・様態を示す。「力して動かす」（力で動かす）。動詞「す」の連用形から。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

助詞　格助詞　手段　様態　して　種別:助詞

ば (ば)

接続助詞（順接確定条件）

助詞

解説

接続助詞「ば」は已然形に付いて確定条件を表す。「春来れば」（春が来たので）。原因・理由を表す。未然形+ばは仮定条件。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

助詞　接続助詞　順接　確定条件　已然形　種別:助詞

ど・ども (ど・ども)

接続助詞（逆接）

助詞

解説

接続助詞「ど」「ども」は逆接を表す。已然形に付く。「行けど見えず」（行ったが見えない）。「ども」は「ど」より強い逆接。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

助詞 接続助詞 逆接 已然形 けれども 種別:助詞

て (て)

接続助詞（継起・並列）

助詞

解説

接続助詞「て」は継起・並列を表す。連用形に付く。「見て帰る」（見て帰る）「美しくて優し」（美しくて優しい）。現代語とほぼ同じ。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

助詞 接続助詞 継起 並列 連用形 種別:助詞

で（で）

接続助詞（打消継起）

助詞

解説

接続助詞「で」は打消の継起を表す。未然形+「ず」の連用形。「言はで帰る」（言わないで帰る）。「〜ないで」の意。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

助詞　接続助詞　打消継起　未然形　ずて　種別:助詞

とも (とも)

接続助詞（逆接仮定）

助詞

解説

接続助詞「とも」は逆接の仮定条件を表す。「雨降るとも行かむ」（雨が降っても行こう）。「〜ても」の意。終止形に付く。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

助詞　接続助詞　逆接仮定　終止形　〜ても　種別:助詞

已然形+ば (いぜんけい+ば)

順接確定条件

助詞

解説

已然形に「ば」が付くと順接確定条件を表す。「春来れば花咲く」（春が来たので花が咲く）。既に起こった事柄の原因・理由。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

文法 確定条件 順接 已然形 原因 種別:助詞

未然形+ば (みぜんけい+ば)

順接仮定条件

助詞

解説

未然形に「ば」が付くと順接仮定条件を表す。「行かば見えむ」（行けば見えるだろう）。まだ起こっていない事柄の仮定。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

文法 仮定条件 順接 未然形 もし 種別:助詞

連用形中止法 (れんようけいちゅうしほう)

文を中断して続ける

助詞

解説

連用形で文を中断し、次の文に続ける表現法。「花咲き鳥鳴く」（花が咲き、鳥が鳴く）。「て」を使わない並列表現。簡潔な文体。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

文法　中止法　連用形　並列　簡潔　種別:助詞

打消の「ず」 (うちけしの「ず」)

打消の助動詞

助詞

解説

「ず」は打消を表す助動詞。未然形に付く。「行かず」「知らず」。「〜ない」の意。連用形は「ず」、連体形は「ぬ」、已然形は「ね」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

助動詞 打消 未然形 ず 〜ない 種別:助詞

完了の「つ」「ぬ」 (かんりょうの「つ」「ぬ」)

完了の助動詞

助詞

解説

「つ」「ぬ」は完了を表す助動詞。「書きつ」「行きぬ」（書いてしまった・行ってしまった）。「つ」は強意的完了、「ぬ」は自然的完了。連用形接続。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

助動詞 完了 つ ぬ 〜てしまった 種別:助詞

が (が)

格助詞（主語）

助詞

解説

格助詞「が」は主語を示す。「我が家」「花が咲く」。所有を表す場合もある。現代語の「の」に近い用法も。連体修飾格としても使用。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞 格助詞 主語 所有 連体修飾 種別:助詞

の（の）

格助詞（連体修飾）

助詞

解説

格助詞「の」は連体修飾・所有・同格などを表す。「京の花」「これの本」。主語を示すこともある。「鳥の鳴く」（鳥が鳴く）。現代語とほぼ同じ。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

助詞　格助詞　連体修飾　所有　主語　種別:助詞

と（と）

格助詞（引用・並列）

助詞

解説

格助詞「と」は引用・並列・比較などを表す。「『行く』と言ふ」（「行く」と言う）「花と鳥」（花と鳥）。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

助詞　格助詞　引用　並列　比較　種別:助詞

へ（へ）

格助詞（方向）

助詞

解説

格助詞「へ」は移動の方向を示す。「京へ行く」「山へ登る」。現代語とほぼ同じ。「え」とも表記される。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

助詞　格助詞　方向　移動　へ　種別:助詞

や (や)

係助詞（疑問・反語）

助詞

解説

係助詞「や」は疑問・反語を表し、文末を連体形で結ぶ（係り結び）。「誰や来たる」（誰が来たのか）。疑問の意を強める。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞　係助詞　疑問　反語　係り結び　種別:助詞

過去の「き」「けり」 (かこの「き」「けり」)

過去の助動詞

助動詞

解説

「き」「けり」は過去を表す助動詞。「き」は直接経験した過去、「けり」は伝聞・回想の過去。「行きき」「行きけり」。「き」は連用形接続、「けり」は連用形接続。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

助動詞 過去 き けり 経験 伝聞 種別:助動詞

推量の「む」「らむ」 (すいりょうの「む」「らむ」)

推量の助動詞

助動詞

解説

「む」「らむ」は推量を表す助動詞。「む」は未来推量・意志、「らむ」は現在推量。「行かむ」（行くだろう・行こう）「今頃するらむ」（今頃しているだろう）。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

助動詞 推量 む らむ 未来 現在 種別:助動詞

受身・可能・自発・尊敬の「る」「らる」

(うけみ・かのう・じはつ・そんけいの「る」「らる」)

多義の助動詞

助動詞

解説

「る」「らる」は受身・可能・自発・尊敬の4つの意味を持つ助動詞。文脈で判断。「見らる」（見られる・見ることができる・自然と見える・ご覧になる）。未然形接続。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

助動詞　受身　可能　自発　尊敬　る　らる　種別:助動詞

使役・尊敬の「す」「さす」 (しえき・そんけいの「す」「さす」)

二義の助動詞

助動詞

解説

「す」「さす」は使役・尊敬の2つの意味を持つ助動詞。「行かす」（行かせる・お行きになる）。文脈で判断。未然形接続。四段・ナ変には「す」、その他には「さす」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

助動詞　使役　尊敬　す　さす　未然形　種別:助動詞

断定の「なり」「たり」 (だんていの「なり」「たり」)

断定の助動詞

助動詞

解説

「なり」「たり」は断定を表す助動詞。「花なり」「学者たり」（花だ・学者だ）。「なり」は体言・連体形接続、「たり」は体言接続。現代語の「だ」に相当。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

助動詞　断定　なり　たり　だ　である　種別:助動詞

伝聞・推定の「なり」 (でんぶん・すいていの「なり」)

様態の助動詞

助動詞

解説

断定の「なり」とは別の助動詞。伝聞「〜そうだ」、推定「〜ようだ」を表す。「雨降るなり」（雨が降るそうだ・降るようだ）。終止形・ラ変連体形接続。音で判断。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

助動詞 伝聞 推定 様態 なり そうだ - 時代:助動詞

様態の「ごとし」 (ようたいの「ごとし」)

比況の助動詞

助動詞

解説

「ごとし」は比況（〜のようだ）を表す助動詞。「花のごとし」「咲くがごとし」（花のようだ・咲くかのようだ）。体言・連体形・「が」「の」に接続。形容詞型活用。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助動詞 比況 ごとし ようだ 如し 形容詞型 種別:助動詞

願望の「たし」 (がんぼうの「たし」)

希望の助動詞

助動詞

解説

「たし」は願望・希望を表す助動詞。「見たし」「聞きたし」（見たい・聞きたい）。形容詞型活用。連用形接続。「まほし」より直接的な願望。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

助動詞 願望 希望 たし 〜たい 形容詞型 種別:助動詞

打消推量の「じ」 (うちけしすいりょうの「じ」)

打消推量の助動詞

助動詞

解説

「じ」は打消推量・打消意志を表す助動詞。「行かじ」（行くまい・行かないだろう）。未然形接続（一部終止形）。現代語の「まい」に相当。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

助動詞 打消推量 打消意志 じ まい 未然形 種別:助動詞

四段活用 (よだんかつよう)

動詞の活用形

助動詞

解説

四段活用は動詞の基本活用の一つ。未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の6つの活用形を持つ。語幹+「ア・イ・ウ・ウ・エ・エ」の音便。「書く」など多数。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

文法 活用 四段 動詞 6形 - 時代:助動詞

上二段活用 (かみにだんかつよう)

動詞の活用形

助動詞

解説

上二段活用は動詞の活用の一つ。「イ・イ・ウ・ウル・ウレ・イヨ」の形。「起く」「落つ」など。中古では上一段化が進行。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

文法 活用 上二段 動詞 起く 落つ 種別:助動詞

下二段活用 (しもにだんかつよう)

動詞の活用形

助動詞

解説

下二段活用は動詞の活用の一つ。「エ・エ・ウ・ウル・ウレ・エヨ」の形。「受く」「得」など。中古では下一段化が進行。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

文法 活用 下二段 動詞 受く 得 - 時代:助動詞

ナ変・ラ変活用 (なへん・らへんかつよう)

特殊な活用

助動詞

解説

ナ変は「死ぬ」「往ぬ」のみ。ラ変は「あり」「をり」「侍り」「候ふ」の4語のみ。不規則な活用形を持つ。「ナ・ニ・ヌ・ヌル・ヌれ・ネ」、「ラ・リ・リ・ル・レ・レ」。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

文法 活用 ナ変 ラ変 死ぬ あり - 時代:助動詞

形容詞の活用 (けいようしのかつよう)

形容詞の変化

助動詞

解説

形容詞はク活用とシク活用の2種類。ク活用は「高し」など、シク活用は「美し」など。語幹+「ク・ク・シ・キ・ケレ・×」。連用形が2つあるのが特徴（く・しく）。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

文法 活用 形容詞 ク活用 シク活用 美し - 時代:助動詞

形容動詞の活用 (けいようどうしのかつよう)

形容動詞の変化

助動詞

解説

形容動詞はナリ活用とタリ活用の2種類。ナリ活用は「静かなり」など、タリ活用は「堂々たり」など。「ナラ・ナリ（ニ）・ナリ・ナル・ナレ・ナレ」の形。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

文法 活用 形容動詞 ナリ活用 タリ活用 静かなり - 時代:助動詞

古文：重要語彙（表現）

全151件　/ 重要候補20件　classical-vocabulary.csv

重要ポイント（大きく）

あはれ (あわれ)

最重要

しみじみとした情趣

平安時代 / 古文単語

解説

「あはれ」は平安時代の美意識を表す最重要語。しみじみとした情趣、感動、もののあわれ。「いとあはれなり」などの形で頻出。物事に感動する心。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

もののあわれ　平安美意識　枕草子　源氏物語　時代:平安時代　種別:古文単語

いとほし (いとおし)

頻出

かわいそうだ・気の毒だ

平安時代 / 古文単語

解説

「いとほし」は「かわいそうだ」「気の毒だ」「いとしい」の意。同情や愛情を表す。「いといとほし」などの形で頻出。現代語の「いとおしい」の語源。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

かわいそう　同情　愛情　現代語語源　時代:平安時代　種別:古文単語

ゆかし (ゆかし)

頻出

見たい・聞きたい

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆかし」は「見たい」「聞きたい」「知りたい」の意。好奇心や興味を表す。「いとゆかし」などの形で頻出。知的好奇心を示す重要語。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

見たい　聞きたい　知りたい　好奇心　時代:平安時代　種別:古文単語

をかし (おかし)

頻出

趣がある・おもしろい

平安時代 / 古文単語

解説

「をかし」は「趣がある」「おもしろい」「美しい」の意。知的で明るい美を表す。「あはれ」と対をなす重要語。枕草子に頻出。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

趣 | おもしろい | 美しい | 枕草子 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

いみじ (いみじ)

最重要

はなはだしい・すばらしい

平安時代 / 古文単語

解説

「いみじ」は「はなはだしい」「すばらしい」「ひどい」の意。程度の激しさを表す最重要語。良い意味でも悪い意味でも使う。「いみじう」の形で副詞化。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

はなはだしい　すばらしい　ひどい　程度　時代:平安時代　種別:古文単語

おどろく (おどろく)

最重要

目を覚ます・気づく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おどろく」は「目を覚ます」「気づく」「驚く」の意。現代語の「驚く」より「目覚める」の意が強い。「音におどろく」などの形。古文最重要動詞の一つ。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

目を覚ます　気づく　驚く　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あかす (あかす)

頻出

飽きない・満足しない

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あかす」は「飽きない」「満足しない」の意。「飽かす」と書く。満足できずにもっと求める様子。「見あかす」などの形で頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

飽きない　満足しない　もっと　飽かす　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

わたる (わたる)

頻出

続く・〜していく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「わたる」は「続く」「〜していく」「ずっと〜する」の意。動作の継続を表す補助動詞。「降りわたる」「鳴きわたる」などの形で頻出。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

続く　継続　補助動詞　ずっと　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

給ふ (たまう)

最重要

尊敬・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「給ふ」は最重要の敬語動詞。本動詞では「与える」「お与えになる」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き、尊敬語「〜なさる」または謙譲語「〜申し上げる」の意。主語によって意味が変わる。文脈判断が必須。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

敬語 尊敬 謙譲 補助動詞 多義 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

奉る (たてまつる)

頻出

謙譲語・差し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「奉る」は謙譲語の代表的動詞。本動詞では「差し上げる」「献上する」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き「〜申し上げる」の意。必ず謙譲の意味。「手紙を奉る」「申し奉る」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

謙譲語 | 差し上げる | 献上 | 補助動詞 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

申す (もうす)

頻出

謙譲語・申す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「申す」は謙譲語の基本動詞。「言ふ」の謙譲語で「申す」「申し上げる」の意。「申し給ふ」で複合敬語になる。「かく申す」「名を申す」などの形で頻出。現代語にも継承された語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 | 申す | 申し上げる | 言ふの謙譲 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

候ふ (そうろう)

頻出

丁寧語・ございます

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

「候ふ」は丁寧語の動詞。「侍り」と同じく「〜ございます」の意。ハ行四段活用。中世以降に頻出。「さぶらふ」とも読む。武士の言葉として発達。「候へば」「候ひき」などの形。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

丁寧語 | ございます | 中世 | 武士言葉 | 時代:鎌倉時代以降 | 種別:古文重要動詞

のたまふ (のたまう)

頻出

尊敬語・おっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「のたまふ」は尊敬語の重要動詞。「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」「仰せになる」の意。ハ行四段活用。「のたまはく」で名詞句を作る。「かくのたまふ」「のたまひける」などの形で頻出。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

尊敬語 | おっしゃる | 言ふの尊敬 | 仰せ | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

〜侍り (〜はべり)

頻出

丁寧の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「侍り」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり侍り」「候侍り」など。男性語として使用される。会話文に頻出。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

丁寧 補助動詞 男性語 会話 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜候ふ (〜そうろう)

頻出

丁寧の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「候ふ」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり候ふ」「侍り候ふ」など。中世以降の武家社会で発達。書簡文に頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

丁寧 補助動詞 武家 書簡 時代:鎌倉時代以降 種別:古文重要動詞

あり (あり)

頻出

ある・いる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あり」は存在を表す基本動詞。「ある」「いる」「生きている」の意。ラ行変格活用。「侍り」「候ふ」の基となる語。「世にあり」「ありける」など頻出。多義的で文脈判断が重要。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

ある　いる　存在　ラ変　基本　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

思ほす (おもおす)

頻出

お思いになる・思召す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「思ほす」は「思ふ」の尊敬語で「お思いになる」「思召す」の意。サ行四段活用。貴人の思考を表す尊敬表現。「かく思ほす」「思ほし召す」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

お思いになる　思召す　尊敬　四段　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

堪ふ (たう)

頻出

耐える・我慢する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「堪ふ」は「耐える」「我慢する」「こらえる」の意。ハ行下二段活用。苦痛や感情を抑える。否定形「堪へず」で「耐えられない」。「堪へかねて」などの形で頻出。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

耐える　我慢　下二段　こらえる　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

いと (いと)

最頻出

非常に・とても

古文単語

解説

程度が著しいことを表す副詞。現代語の「とても」「非常に」に相当。「いと美し」「いとをかし」のように形容詞を修飾する最頻出副詞。『源氏物語』などで多用される。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞　程度　美しい　をかし　頻出　種別:古文単語

わぶ (わぶ)

頻出

嘆く・困る

平安時代 / 古文単語

解説

「わぶ」は「嘆く」「困る」「侘びる」の意。バ行上二段活用。「わびて」「わびぬ」の形で頻出。つらい状況で使われる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

動詞 嘆く 困る 侘びる 上二段 時代:平安時代 種別:古文単語

付録：全データ（削らない）

あはれ (あわれ)

最重要

しみじみとした情趣

平安時代 / 古文単語

解説

「あはれ」は平安時代の美意識を表す最重要語。しみじみとした情趣、感動、もののあわれ。「いとあはれなり」などの形で頻出。物事に感動する心。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

もののあわれ　平安美意識　枕草子　源氏物語　時代:平安時代　種別:古文単語

いとほし (いとおし)

頻出

かわいそうだ・気の毒だ

平安時代 / 古文単語

解説

「いとほし」は「かわいそうだ」「気の毒だ」「いとしい」の意。同情や愛情を表す。「いといとほし」などの形で頻出。現代語の「いとおしい」の語源。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

かわいそう　同情　愛情　現代語語源　時代:平安時代　種別:古文単語

おぼつかなし (おぼつかなし)

不安だ・はっきりしない

平安時代 / 古文単語

解説

「おぼつかなし」は「不安だ」「はっきりしない」「待ち遠しい」の意。不確かさや不安を表す重要語。「おぼつかなく思ふ」などの形。多義的な語。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

不安 はっきりしない 待ち遠しい 多義語 時代:平安時代 種別:古文単語

かたじけなし (かたじけなし)

もったいない・恐れ多い

平安時代 / 古文単語

解説

「かたじけなし」は「もったいない」「恐れ多い」「ありがたい」の意。恩恵に対する感謝や畏敬を表す。「かたじけなく思ふ」などの形。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

もったいない 恐れ多い 感謝 畏敬 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆかし (ゆかし)

頻出

見たい・聞きたい

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆかし」は「見たい」「聞きたい」「知りたい」の意。好奇心や興味を表す。「いとゆかし」などの形で頻出。知的好奇心を示す重要語。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

見たい　聞きたい　知りたい　好奇心　時代:平安時代　種別:古文単語

つれづれなり (つれづれなり)

退屈だ・することがない

鎌倉時代 / 古文単語

解説

「つれづれなり」は「退屈だ」「することがない」「心寂しい」の意。「徒然草」の冒頭「つれづれなるままに」が有名。時間を持て余す様子。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

退屈 心寂しい 徒然草 時間 時代:鎌倉時代 種別:古文単語

をかし (おかし)

頻出

趣がある・おもしろい

平安時代 / 古文単語

解説

「をかし」は「趣がある」「おもしろい」「美しい」の意。知的で明るい美を表す。「あはれ」と対をなす重要語。枕草子に頻出。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

趣 おもしろい 美しい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

あさまし (あさまし)

驚きあきれる・意外だ

平安時代 / 古文単語

解説

「あさまし」は「驚きあきれる」「意外だ」「嘆かわしい」の意。程度が甚だしい様子を表す。「あさましきこと」などの形。強い驚きや非難を含む。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

驚きあきれる　意外　嘆かわしい　程度甚だしい　時代:平安時代　種別:古文単語

いみじ (いみじ)

最重要

はなはだしい・すばらしい

平安時代 / 古文単語

解説

「いみじ」は「はなはだしい」「すばらしい」「ひどい」の意。程度の激しさを表す最重要語。良い意味でも悪い意味でも使う。「いみじう」の形で副詞化。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

はなはだしい　すばらしい　ひどい　程度　時代:平安時代　種別:古文単語

めでたし (めでたし)

すばらしい・立派だ

平安時代 / 古文単語

解説

「めでたし」は「すばらしい」「立派だ」「喜ばしい」の意。賞賛や祝福を表す。「めでたきこと」などの形。現代語の「めでたい」の語源。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

すばらしい　立派　喜ばしい　現代語語源　時代:平安時代　種別:古文単語

うつくし (うつくし)

かわいい・美しい

平安時代 / 古文単語

解説

「うつくし」は「かわいい」「美しい」「いとしい」の意。小さくてかわいらしいものを表す。現代語の「美しい」とは異なる。「うつくしきもの」などの形。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

かわいい　小さい　いとしい　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文単語

わびし (わびし)

つらい・侘しい

平安時代 / 古文単語

解説

「わびし」は「つらい」「侘しい」「みじめだ」の意。精神的・物質的な困窮を表す。「わびしき心」などの形。「わび」の美意識の源。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

つらい　侘しい　みじめ　わび　時代:平安時代　種別:古文単語

ありがたし (ありがたし)

めったにない・珍しい

平安時代 / 古文単語

解説

「ありがたし」は「めったにない」「珍しい」「すばらしい」の意。「有り難し」が語源。稀少性を表す。現代語の「ありがたい」とはニュアンスが異なる。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

めったにない　珍しい　すばらしい　有り難し　時代:平安時代　種別:古文単語

なまめかし (なまめかし)

優美だ・上品だ

平安時代 / 古文単語

解説

「なまめかし」は「優美だ」「上品だ」「若々しい」の意。洗練された美しさを表す。「なまめかしき姿」などの形。王朝貴族の理想的美意識。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

優美 上品 若々しい 王朝美意識 時代:平安時代 種別:古文単語

あてなり (あてなり)

上品だ・高貴だ

平安時代 / 古文単語

解説

「あてなり」は「上品だ」「高貴だ」「優雅だ」の意。「貴なり」と書く。身分の高さや品格を表す。「あてなる人」などの形。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

上品 高貴 優雅 貴なり 時代:平安時代 種別:古文単語

きよげなり (きよげなり)

上品だ・美しい

平安時代 / 古文単語

解説

「きよげなり」は「上品だ」「美しい」「清らかだ」の意。清潔で端正な美しさを表す。「きよげなる姿」などの形。視覚的な美を強調。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

上品 美しい 清らか 視覚的美 時代:平安時代 種別:古文単語

めづらし (めずらし)

珍しい・新鮮だ

平安時代 / 古文単語

解説

「めづらし」は「珍しい」「新鮮だ」「すばらしい」の意。現代語とほぼ同じだが賞賛の意味も含む。「めづらしき花」などの形。滅多にないものへの評価。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

珍しい　新鮮　すばらしい　賞賛　時代:平安時代　種別:古文単語

ねんごろなり (ねんごろなり)

心がこもっている・親しい

平安時代 / 古文単語

解説

「ねんごろなり」は「心がこもっている」「親しい」「熱心だ」の意。「懇ろ」と書く。「ねんごろに語らふ」などの形。誠実で丁寧な様子を表す。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

心がこもる　親しい　熱心　誠実　時代:平安時代　種別:古文単語

はかなし (はかなし)

頼りない・むなしい

平安時代 / 古文単語

解説

「はかなし」は「頼りない」「むなしい」「はかない」の意。「果無し」が語源。一時的で消え去りやすいものを表す。無常観を示す重要語。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

頼りない　むなしい　はかない　無常観　時代:平安時代　種別:古文単語

たのもし (たのもし)

頼もしい・心強い

平安時代 / 古文単語

解説

「たのもし」は「頼もしい」「心強い」「信頼できる」の意。現代語とほぼ同じ。「たのもしき人」などの形。信頼感を表す重要語。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

頼もしい　心強い　信頼できる　現代語同じ　時代:平安時代　種別:古文単語

こころづきなし (こころずきなし)

気に入らない・不愉快だ

平安時代 / 古文単語

解説

「こころづきなし」は「気に入らない」「不愉快だ」「気にくわない」の意。心が引かれない、の意。「心憂し」より軽い否定的感情。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

気に入らない　不愉快　気にくわない　否定感情　時代:平安時代　種別:古文単語

こころうし (こころうし)

つらい・いやだ

平安時代 / 古文単語

解説

「こころうし」は「つらい」「いやだ」「情けない」の意。「心憂し」と書く。心が痛む、の意。強い精神的苦痛を表す。「こころうく思ふ」の形。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

つらい　いやだ　情けない　精神的苦痛　時代:平安時代　種別:古文単語

すさまじ (すさまじ)

興ざめだ・殺風景だ

平安時代 / 古文単語

解説

「すさまじ」は「興ざめだ」「殺風景だ」「がっかりだ」の意。期待外れや白けた気持ちを表す。枕草子「すさまじきもの」の段が有名。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

興ざめ　殺風景　がっかり　枕草子　時代:平安時代　種別:古文単語

ゆゆし (ゆゆし)

恐ろしい・不吉だ

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆゆし」は「恐ろしい」「不吉だ」「はなはだしい」の意。忌み嫌うべきもの、神聖で近づきがたいものを表す。「ゆゆしき御夢」などの形。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

恐ろしい　不吉　はなはだしい　神聖　時代:平安時代　種別:古文単語

おろかなり (おろかなり)

いいかげんだ・並大抵でない

平安時代 / 古文単語

解説

「おろかなり」は「いいかげんだ」「並大抵でない」の意。二つの正反対の意味を持つ。文脈判断が必要。「おろかならず」は並大抵でない、の意。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

いいかげん　並大抵でない　二義　文脈判断　時代:平安時代　種別:古文単語

たいだいし (たいだいし)

いいかげんだ・粗略だ

平安時代 / 古文単語

解説

「たいだいし」は「いいかげんだ」「粗略だ」「無造作だ」の意。「大々し」が語源。軽率でいいかげんな様子を表す。否定的評価。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

いいかげん　粗略　無造作　軽率　時代:平安時代　種別:古文単語

こころにくし (こころにくし)

奥ゆかしい・上品だ

平安時代 / 古文単語

解説

「こころにくし」は「奥ゆかしい」「上品だ」「心惹かれる」の意。心が遠い、の意から。すべてを見せない品格を表す。平安貴族の美意識。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

奥ゆかしい　上品　心惹かれる　品格　時代:平安時代　種別:古文単語

らうたし (らうたし)

かわいい・いとしい

平安時代 / 古文単語

解説

「らうたし」は「かわいい」「いとしい」「愛らしい」の意。「うつくし」より強い愛情を表す。子供や小動物への愛情表現。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

かわいい　いとしい　愛らしい　強い愛情　時代:平安時代　種別:古文単語

まばゆし (まばゆし)

まぶしい・きらびやかだ

平安時代 / 古文単語

解説

「まばゆし」は「まぶしい」「きらびやかだ」「見事すぎて見ていられない」の意。現代語とほぼ同じ。「まばゆき光」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

まぶしい　きらびやか　見事　現代語同じ　時代:平安時代　種別:古文単語

はづかし (はずかし)

立派だ・気後れする

平安時代 / 古文単語

解説

「はづかし」は「立派だ」「気後れする」「恥ずかしい」の意。相手が優れていて自分が気後れする、の意が原義。現代語の「恥ずかしい」とは微妙に異なる。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

立派 気後れ 恥ずかしい 現代語と違う 時代:平安時代 種別:古文単語

こころぐるし (こころぐるし)

気の毒だ・心苦しい

平安時代 / 古文単語

解説

「こころぐるし」は「気の毒だ」「心苦しい」「かわいそうだ」の意。「心苦し」と書く。同情や罪悪感を表す。「いとほし」と類義。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

気の毒 | 心苦しい | かわいそう | 同情 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

あぢきなし (あじきなし)

つまらない・どうしようもない

平安時代 / 古文単語

解説

「あぢきなし」は「つまらない」「どうしようもない」「無益だ」の意。価値がない、の意。「あぢきなく思ふ」などの形。無力感を表す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

つまらない | どうしようもない | 無益 | 無力感 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

びんなし (びんなし)

都合が悪い・具合が悪い

平安時代 / 古文単語

解説

「びんなし」は「都合が悪い」「具合が悪い」「不適当だ」の意。「便無し」が語源。状況に適していない様子を表す。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

都合悪い　具合悪い　不適当　便無し　時代:平安時代　種別:古文単語

いたづらなり (いたずらなり)

むだだ・何もしない

平安時代 / 古文単語

解説

「いたづらなり」は「むだだ」「何もしない」「無益だ」の意。「徒らなり」と書く。効果がない、無駄に過ごす、の意。「いたづらに月日を送る」などの形。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

むだ　何もしない　無益　徒らなり　時代:平安時代　種別:古文単語

あながちなり (あながちなり)

強引だ・むやみに

平安時代 / 古文単語

解説

「あながちなり」は「強引だ」「むやみに」「一途だ」の意。「強ちなり」と書く。無理に押し通す様子。副詞的に「あながちに」の形も。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

強引　むやみに　一途　無理に　時代:平安時代　種別:古文単語

ゆへあり (ゆえあり)

由緒がある・事情がある

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆへあり」は「由緒がある」「事情がある」「風流だ」の意。「故あり」「由あり」と書く。「ゆへある人」は教養ある人の意。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

由緒 事情 風流 教養 時代:平安時代 種別:古文単語

なさけあり (なさけあり)

思いやりがある・風流だ

平安時代 / 古文単語

解説

「なさけあり」は「思いやりがある」「風流だ」「情趣を解する」の意。「情あり」と書く。人情と風流心の両方を含む。平安貴族の理想。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

思いやり 風流 情趣 人情 時代:平安時代 種別:古文単語

なさけなし (なさけなし)

無情だ・無風流だ

平安時代 / 古文単語

解説

「なさけなし」は「無情だ」「無風流だ」「冷淡だ」の意。思いやりも風流心もない様子。「なさけあり」の対義語。強い非難を含む。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

無情 無風流 冷淡 なさけあり対義 時代:平安時代 種別:古文単語

つきづきし (つきずきし)

ふさわしい・似合っている

平安時代 / 古文単語

解説

「つきづきし」は「ふさわしい」「似合っている」「釣り合いが取れている」の意。「付き付きし」が語源。調和の取れた美しさを表す。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

ふさわしい 似合う 釣り合い 調和 時代:平安時代 種別:古文単語

うるはし (うるわし)

端正だ・きちんとしている

平安時代 / 古文単語

解説

「うるはし」は「端正だ」「きちんとしている」「几帳面だ」の意。「麗し」と書く。形式的な美しさ。「うるはしくもてなす」などの形。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

端正 | きちんと | 几帳面 | 形式美 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

あさし (あさし)

浅い・薄い

平安時代 / 古文単語

解説

「あさし」は「浅い」「薄い」「軽薄だ」の意。現代語とほぼ同じ。物理的深さと心の浅さの両方を表す。「浅き心」などの形。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

浅い　薄い　軽薄　現代語同じ　時代:平安時代　種別:古文単語

ふかし (ふかし)

深い・濃い

平安時代 / 古文単語

解説

「ふかし」は「深い」「濃い」「親しい」の意。現代語とほぼ同じ。物理的深さと情の深さの両方。「深き契り」などの形。「あさし」の対義語。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

深い　濃い　親しい　あさし対義　時代:平安時代　種別:古文単語

おもし (おもし)

趣がある・味わい深い

平安時代 / 古文単語

解説

「おもし」は「趣がある」「味わい深い」「重々しい」の意。「重し」が語源。落ち着いた趣を表す。「おもしろし」とは別。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

趣がある　味わい深い　重々しい　おもしろし別　時代:平安時代　種別:古文単語

おもしろし (おもしろし)

興味深い・明るく広々としている

平安時代 / 古文単語

解説

「おもしろし」は「興味深い」「明るく広々としている」「愉快だ」の意。「面白し」と書く。視界が開ける感じが原義。現代語より広い意味。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

興味深い　広々　愉快　視界開ける　時代:平安時代　種別:古文単語

おどろく (おどろく)

最重要

目を覚ます・気づく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おどろく」は「目を覚ます」「気づく」「驚く」の意。現代語の「驚く」より「目覚める」の意が強い。「音におどろく」などの形。古文最重要動詞の一つ。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

目を覚ます　気づく　驚く　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

わぶ (わぶ)

困る・つらい思いをする

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「わぶ」は「困る」「つらい思いをする」「嘆く」の意。精神的・物質的困窮を表す。「わびしげなり」などの形。「わび」の語源。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

困る　つらい　嘆く　わび語源　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

ながむ (ながむ)

物思いに沈む・ぼんやり眺める

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「ながむ」は「物思いに沈む」「ぼんやり眺める」の意。単に見るのではなく、思いにふけりながら眺める様子。「空をながむ」などの形。古文の情緒表現。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

物思い　ぼんやり　眺める　情緒　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あかす (あかす)

頻出

飽きない・満足しない

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あかす」は「飽きない」「満足しない」の意。「飽かす」と書く。満足できずにもっと求める様子。「見あかす」などの形で頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

飽きない　満足しない　もっと　飽かす　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あく (あく)

満足する・飽きる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あく」は「満足する」「飽きる」の意。「飽く」と書く。「あかす」の対。「見飽く」「聞き飽く」などの形。十分に堪能する意味。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

満足する　飽きる　堪能　あかす対　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

まどふ (まどふ)

途方に暮れる・迷う

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「まどふ」は「途方に暮れる」「迷う」「困惑する」の意。「惑ふ」と書く。現代語とほぼ同じ。精神的な混乱を表す。「心まどふ」などの形。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

途方に暮れる　迷う　困惑　惑ふ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

わたる (わたる)

頻出

続く・〜していく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「わたる」は「続く」「〜していく」「ずっと〜する」の意。動作の継続を表す補助動詞。「降りわたる」「鳴きわたる」などの形で頻出。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

続く　継続　補助動詞　ずっと　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おこなふ (おこなう)

仏道修行をする・勤行する

平安〜鎌倉時代 / 古文重要動詞

解説

「おこなふ」は「仏道修行をする」「勤行する」の意。現代語の「行う」より宗教的な意味が強い。「行ふ」と書く。僧侶の修行を指す。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

仏道修行 勤行 宗教的 僧侶 時代:平安〜鎌倉時代 種別:古文重要動詞

とぶらふ（とぶらう）

訪ねる・見舞う

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「とぶらふ」は「訪ねる」「見舞う」「弔問する」の意。「訪ふ」と書く。人を尋ねる、安否を気遣う意味。「とぶらひに来る」などの形。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

訪ねる　見舞う　弔問　訪ふ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

ののしる (ののしる)

大声で騒ぐ・評判になる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「ののしる」は「大声で騒ぐ」「評判になる」の意。現代語の「罵る」とは異なる。世間で話題になる様子。「世にののしる」などの形。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

大声で騒ぐ　評判　話題　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おぼゆ (おぼゆ)

思われる・似ている

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おぼゆ」は「思われる」「似ている」「覚える」の意。自然に心に浮かぶ、の意。「覚ゆ」と書く。「思ふ」の自発形的な意味。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

思われる　似ている　覚える　自発　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

いらふ (いらう)

答える・応じる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「いらふ」は「答える」「応じる」の意。「答ふ」「応ふ」と書く。相手の言葉に反応する様子。「問ひにいらふ」などの形。返答を表す。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

答える　応じる　返答　答ふ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

そうず (そうず)

そうする・そうである

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「そうず」は「そうする」「そうである」の意。サ変動詞「す」に「さう」が付いた形。「然うす」が語源。指示内容を受ける。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

そうする　そうである　然うす　指示　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

給ふ（たまう）

最重要

尊敬・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「給ふ」は最重要の敬語動詞。本動詞では「与える」「お与えになる」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き、尊敬語「〜なさる」または謙譲語「〜申し上げる」の意。主語によって意味が変わる。文脈判断が必須。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

敬語 尊敬 謙譲 補助動詞 多義 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

奉る (たてまつる)

頻出

謙譲語・差し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「奉る」は謙譲語の代表的動詞。本動詞では「差し上げる」「献上する」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き「〜申し上げる」の意。必ず謙譲の意味。「手紙を奉る」「申し奉る」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

謙譲語 | 差し上げる | 献上 | 補助動詞 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

聞こゆ (きこゆ)

謙譲語・申し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「聞こゆ」は謙譲語の重要動詞。本動詞では「申し上げる」「お聞かせする」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き「〜申し上げる」の意。「奉る」より丁寧度が低い。「言ひ聞こゆ」「見え聞こゆ」の形。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

謙譲語 | 申し上げる | 補助動詞 | 丁寧度 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

申す (もうす)

頻出

謙譲語・申す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「申す」は謙譲語の基本動詞。「言ふ」の謙譲語で「申す」「申し上げる」の意。「申し給ふ」で複合敬語になる。「かく申す」「名を申す」などの形で頻出。現代語にも継承された語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 | 申す | 申し上げる | 言ふの謙譲 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

参る (まいる)

謙譲語・参上する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「参る」は謙譲語の動詞。本動詞では「参上する」「伺う」の意。「行く」「来」の謙譲語。補助動詞として「〜申し上げる」の意もある。「参り給ふ」で複合敬語。「宮に参る」などの形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

謙譲語 | 参上 | 行くの謙譲 | 来の謙譲 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

侍り (はべり)

丁寧語・ございます

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「侍り」は丁寧語の代表的動詞。「〜ございます」「〜です」の意。ラ変動詞。「あり」の丁寧語。補助動詞として動詞の連用形に付き丁寧の意を表す。「侍り」は主に男性が使用。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

丁寧語 | ございます | ラ変 | 補助動詞 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

候ふ（そうろう）

頻出

丁寧語・ございます

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

「候ふ」は丁寧語の動詞。「侍り」と同じく「〜ございます」の意。ハ行四段活用。中世以降に頻出。「さぶらふ」とも読む。武士の言葉として発達。「候へば」「候ひき」などの形。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

丁寧語 | ございます | 中世 | 武士言葉 | 時代:鎌倉時代以降 | 種別:古文重要動詞

おはす (おわす)

尊敬語・いらっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おはす」は尊敬語の重要動詞。「あり」「ゐる」「行く」「来」の尊敬語で「いらっしゃる」「おいでになる」の意。サ行変格活用。「おはします」がより高い敬意。「御前におはす」などの形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

尊敬語　いらっしゃる　サ変　高敬語　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おはします (おわします)

最高敬語・いらっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おはします」は最高敬語の動詞。「おはす」に尊敬の助動詞「ます」が付いた形。天皇や皇族など最高位の人物に使用。「いらっしゃる」の最高敬語。「御所におはします」の形。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

最高敬語　天皇　皇族　複合敬語　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

のたまふ (のたまう)

頻出

尊敬語・おっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「のたまふ」は尊敬語の重要動詞。「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」「仰せになる」の意。ハ行四段活用。「のたまはく」で名詞句を作る。「かくのたまふ」「のたまひける」などの形で頻出。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

尊敬語 おっしゃる 言ふの尊敬 仰せ 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜給ふ (〜たまう)

尊敬の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「給ふ」は動詞の連用形に付いて尊敬を表す。「〜なさる」「〜される」の意。「見給ふ」「聞き給ふ」「思ひ給ふ」など。文脈で尊敬か謙譲かを判断。動作の主体が高貴な人物なら尊敬。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

尊敬 補助動詞 接続 判断 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜奉る (〜たてまつる)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「奉る」は動詞の連用形に付いて謙譲を表す。「〜申し上げる」の意。「見奉る」「聞き奉る」「申し奉る」など。必ず謙譲の意味で使用。動作の対象が高貴な人物。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

謙譲 補助動詞 申し上げる 対象 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜聞こゆ (〜きこゆ)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「聞こゆ」は動詞の連用形に付いて謙譲を表す。「〜申し上げる」の意。「奉る」より丁寧度が低い。「見え聞こゆ」「言ひ聞こゆ」など。「お聞かせする」の意もある。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

謙譲 補助動詞 丁寧度低 お聞かせする 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜侍り (〜はべり)

頻出

丁寧の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「侍り」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり侍り」「候侍り」など。男性語として使用される。会話文に頻出。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

丁寧 補助動詞 男性語 会話 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜候ふ (〜そうろう)

頻出

丁寧の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「候ふ」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり候ふ」「侍り候ふ」など。中世以降の武家社会で発達。書簡文に頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

丁寧 補助動詞 武家 書簡 時代:鎌倉時代以降 種別:古文重要動詞

往ぬ (いぬ)

行ってしまう・死ぬ

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「往ぬ」は「行く」の強意形で「行ってしまう」「去る」の意。ナ行変格活用。完了・消滅のニュアンスを含む。「鳥も往ぬべし」などの形。「死ぬ」の意味もある。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

行く　去る　死ぬ　ナ変　完了　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

率る (ゐる)

連れて行く・引き連れる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「率る」は「連れて行く」「引き連れる」の意。上一段活用。「具す」と同義。人を伴う動作を表す。「子を率て行く」などの形。現代語「引率」の語源。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

連れて行く　引き連れる　上一段　具す　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

据う（すう）

座らせる・置く

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「据う」は「座らせる」「置く」「安置する」の意。ワ行下二段活用。「据ゑる」とも書く。物や人を定位置に配置する。「御座に据う」などの形。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

座らせる　置く　下二段　据ゑる　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

具す（ぐす）

連れて行く・備える

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「具す」は「連れて行く」「備える」「揃える」の意。サ行変格活用。「率る」と同義だが硬い表現。「従者を具す」「武具を具す」などの形。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

連れて行く　備える　サ変　率る　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

消つ (けつ)

消える・消滅する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「消つ」は「消える」「消滅する」の意。タ行下二段活用。「消ゆ」とも書く。火や音、人の姿などが消え去る様子。「煙消つ」「音消つ」などの形。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

消える　消滅　下二段　消ゆ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

寝 (ぬ)

寝る・お休みになる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「寝」は「寝る」「臥す」の意。ナ行下二段活用。「寝る」の古形。尊敬語として使うこともある。「御寝」で貴人の就寝。「寝ね給ふ」などの形。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

寝る　臥す　下二段　尊敬可　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

御す (おす)

召し上がる・お乗りになる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「御す」は「召し上がる」「お乗りになる」「召す」の意。サ行変格活用。「めす」とも読む。尊敬語。食事や乗り物に関する動作の尊敬表現。「物を御す」などの形。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

召し上がる　お乗りになる　サ変　尊敬語　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あり (あり)

頻出

ある・いる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あり」は存在を表す基本動詞。「ある」「いる」「生きている」の意。ラ行変格活用。「侍り」「候ふ」の基となる語。「世にあり」「ありける」など頻出。多義的で文脈判断が重要。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

ある　いる　存在　ラ変　基本　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

をり (おり)

いる・座る

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「をり」は「いる」「座る」の意。ラ行変格活用。「居り」と書く。「あり」より具体的な場所での存在を表す。「座す」の意味も。「そこをり」などの形。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

いる　座る　ラ変　居り　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あらはす (あらわす)

現す・明らかにする

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あらはす」は「現す」「明らかにする」「顕す」の意。サ行四段活用。隠れていたものを見えるようにする。「理をあらはす」「姿をあらはす」などの形。真実を示す。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

現す　明らかにする　四段　顕す　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

思ほす (おもおす)

頻出

お思いになる・思召す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「思ほす」は「思ふ」の尊敬語で「お思いになる」「思召す」の意。サ行四段活用。貴人の思考を表す尊敬表現。「かく思ほす」「思ほし召す」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

お思いになる　思召す　尊敬　四段　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

忍ぶ (しのぶ)

耐える・隠れる・人目を避ける

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「忍ぶ」は「耐える」「隠れる」「我慢する」の意。バ行四段活用。秘密を守る、苦難に耐える、密かに行動する。「恋を忍ぶ」「忍びて行く」など。多義語。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

耐える　隠れる　我慢　四段　多義　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

やる (やる)

送る・やる・追いやる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「やる」は「送る」「やる」「追いやる」の意。ラ行四段活用。「遣る」と書く。手紙や使者を送る。気持ちを晴らす。「文をやる」「心をやる」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

送る　やる　追いやる　四段　遣る　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

経 (へ)

過ぎる・経る・時が経つ

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「経」は「過ぎる」「経る」の意。ハ行下二段活用。時間が経過する。場所を通り過ぎる。「年を経」「月日経ぬ」などの形。時の経過を表す重要語。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

過ぎる　経る　時間　下二段　経過　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

果つ (はつ)

終わる・死ぬ・やり遂げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「果つ」は「終わる」「死ぬ」「やり遂げる」の意。タ行下二段活用。完結・完了を表す。命が尽きる意味も。「語り果つ」「果てぬ」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

終わる　死ぬ　完了　下二段　完結　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

飽く (あく)

満足する・飽きる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「飽く」は「満足する」「飽きる」「十分になる」の意。カ行四段活用。欲求が満たされる。「見飽く」「聞き飽く」などの形。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

満足 飽きる 四段 充足 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

堪ふ (たう)

頻出

耐える・我慢する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「堪ふ」は「耐える」「我慢する」「こらえる」の意。ハ行下二段活用。苦痛や感情を抑える。否定形「堪へず」で「耐えられない」。「堪へかねて」などの形で頻出。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

耐える　我慢　下二段　こらえる　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

むつぶ (むつぶ)

親しくする・仲良くする

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「むつぶ」は「親しくする」「仲良くする」の意。バ行四段活用。「睦ぶ」と書く。人と親密な関係を持つ。「むつびかはす」「むつましく」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

親しくする　仲良く　四段　睦ぶ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おこなふ (おこなう)

修行する・仏道修行

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おこなふ」は「行う」「修行する」の意。ハ行四段活用。特に仏教の修行を指すことが多い。「法をおこなふ」「おこなひ澄ます」などの形。宗教的実践。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

行う　修行　仏道　四段　宗教　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

いと (いと)

最頻出

非常に・とても

古文単語

解説

程度が著しいことを表す副詞。現代語の「とても」「非常に」に相当。「いと美し」「いとをかし」のように形容詞を修飾する最頻出副詞。『源氏物語』などで多用される。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞 程度 美しい をかし 頻出 種別:古文単語

いみじ (いみじ)

非常に・ひどく

平安時代 / 古文単語

解説

程度が甚だしいことを表す形容詞。連用形「いみじう」「いみじく」が副詞的に使われる。良い意味にも悪い意味にも用いる。「いみじう泣く」「いみじき美人」。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

形容詞 程度 甚だしい 連用形 副詞 時代:平安時代 種別:古文単語

いとど (いとど)

いっそう・ますます

古文単語

解説

程度が増すことを表す副詞。「さらにいとど」のように他の副詞と呼応することも。既にある状態がさらに増す意。「いとど心細し」。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

副詞 程度 増加 心細し 呼応 種別:古文単語

さらに (さらに)

全く〜ない（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して「全く〜ない」「決して〜ない」の意を表す副詞。「さらに知らず」「さらになし」。打消と呼応しない場合は「改めて」「さっぱり」の意。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

副詞 打消呼応 全く 決して 知らず 種別:古文単語

つゆ (つゆ)

少しも〜ない（打消と呼応）

平安時代 / 古文単語

解説

打消の語と呼応して「少しも〜ない」「全く〜ない」の意。露のように僅かなことさえない意。「つゆ知らず」「つゆ思はず」。元は名詞「露」から。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

副詞 | 打消呼応 | 少しも | 露 | 僅か | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

え（え）

〜できない（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して不可能を表す副詞。「え行かず」「え言はず」。能力的・状況的に不可能な意。「得」の副詞化とされる。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞　打消呼応　不可能　できない　状況　種別:古文単語

よも（よも）

まさか〜ないだろう（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して否定的推量を表す副詞。「よもあらじ」「よも知らじ」。話し手の否定的な推測・期待。反語的に用いることも。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

副詞　打消呼応　推量　否定　まさか　種別:古文単語

まさに (まさに)

ちょうど・今にも

古文単語

解説

時間的な適切性や切迫を表す副詞。「まさに言はむとす」「まさに死なむとす」。「正に」の字義から。現代語の「まさに」とほぼ同義。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

副詞 時間 切迫 ちょうど 適切 種別:古文単語

やがて (やがて)

そのまま・すぐに

平安時代 / 古文単語

解説

時間的・状態的な連続を表す副詞。現代語の「やがて」とは異なり「すぐに」「そのまま」の意。「やがて帰る」「やがて寝入る」。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

副詞 時間 連続 すぐに そのまま 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆめ (ゆめ)

決して〜するな（打消と呼応）

古文単語

解説

禁止を表す副詞。打消の語と呼応して「決して〜するな」の意。「ゆめ語るな」「ゆめ忘るな」。夢のように儚い意から。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

副詞　打消呼応　禁止　決して　命令　種別:古文単語

よに (よに)

世間で・非常に

平安時代 / 古文単語

解説

「世に」と書く。「世間では」の意と、「非常に」の意の二義。「よに聞こゆ」「よに珍しき」。文脈で判断。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

副詞 世間 程度 非常に 二義 時代:平安時代 種別:古文単語

いたう (いたう)

ひどく・非常に

平安時代 / 古文単語

解説

程度が激しいことを表す副詞。形容詞「いたし」の連用形から。「いたう泣く」「いたう寒し」。現代語の「いたく」。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

副詞 程度 激しい 連用形 いたし 時代:平安時代 種別:古文単語

なほ (なほ)

やはり・それでも

古文単語

解説

前の状態が変わらない意や、逆接の意を表す副詞。「なほ行く」「なほ美し」。現代語の「なお」に相当。期待に反する継続。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

副詞　継続　逆接　やはり　それでも　種別:古文単語

ひたすら (ひたすら)

ひたすら・一途に

平安時代 / 古文単語

解説

他のことを考えず一つのことに集中する意の副詞。「ひたすら思ふ」「ひたすら祈る」。現代語とほぼ同義。「ひた」は接頭語。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

副詞 専心 一途 集中 ひた 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆゆし (ゆゆし)

不吉だ・立派だ

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で、不吉・恐ろしい意と、立派・素晴らしい意の両義。文脈で判断。「ゆゆしき夢」「ゆゆしき人」。連用形「ゆゆしく」が副詞的に使われる。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

形容詞 不吉 立派 両義 恐ろしい 時代:平安時代 種別:古文単語

あへて (あへて)

決して〜ない（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して強い否定を表す副詞。「あへて言はず」「あへて知らず」。現代語の「敢えて」とは意味が異なる。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

副詞 打消呼応 強否定 決して 敢えて 種別:古文単語

かく (かく)

このように・こう

古文単語

解説

近称の指示副詞。話し手に近い事柄を指す。「かく申す」「かくて過ぐす」。現代語の「こう」「このように」。「然く」と書く。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

副詞 指示 近称 このように こう 種別:古文単語

かかる (かかる)

このような・こんな

古文単語

解説

近称の連体詞。「かく」の連体形。「かかる事」「かかる時」。現代語の「こんな」「このような」に相当。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

連体詞 指示 近称 このような こんな 種別:古文単語

さ (さ)

そう・そのように

古文単語

解説

中称の指示副詞。「そう」「そのように」の意。「さ思ふ」「さあらば」。現代語の「そう」に相当。「然」と書く。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

副詞 指示 中称 そう そのように 種別:古文単語

などか (などか)

どうして〜ないのか（反語）

平安時代 / 古文単語

解説

疑問の副詞「など」に係助詞「か」が付いた形。打消と呼応して反語を表す。「などか知らざらむ」（どうして知らないことがあろうか、知っているはずだ）。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

副詞 疑問 反語 打消呼応 どうして 時代:平安時代 種別:古文単語

さて (さて)

そうして・ところで

古文単語

解説

接続詞。前の事柄を受けて次に移る。「そうして」「それで」の意と、話題転換の「ところで」の意。「さてその後」。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

接続詞 順接 話題転換 そうして ところで 種別:古文単語

さるは (さるは)

そうは言うものの

平安時代 / 古文単語

解説

接続詞。逆接を表す。「さ（そう）ある（言う）は」の意。「さるはかく思ふ」（そうは言うものの、こう思う）。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

接続詞 逆接 そうは言うものの しかし けれども 時代:平安時代 種別:古文単語

されば (されば)

だから・それゆえに

古文単語

解説

接続詞。原因・理由を受けて結果を導く。「さあれば」が縮まった形。「されば申す」（だから申し上げる）。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

接続詞　順接　原因　結果　だから　種別:古文単語

しかれども (しかれども)

しかしながら

平安時代 / 古文単語

解説

接続詞。逆接を表す。「しか（そう）あれども」の意。「しかれども行かず」（しかしながら行かない）。現代語の「しかれども」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

接続詞 逆接 しかしながら けれども 然れども 時代:平安時代 種別:古文単語

ここに (ここに)

ここで・この時

古文単語

解説

接続詞的に使われ、話の展開を示す。「ここで」「この時」「すると」の意。「ここに一人の僧あり」（ここに一人の僧がいた）。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

接続詞　展開　ここで　この時　すると　種別:古文単語

御前 (おまえ・ごぜん)

貴人の前・貴人の居場所

平安時代 / 古文単語

解説

貴人のいる場所や、貴人の前を指す尊敬語。「御前に参る」（貴人の前に参上する）。現代語の「おまえ」とは全く異なる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

名詞 尊敬語 貴人 宮中 居場所 時代:平安時代 種別:古文単語

女房 (にょうぼう)

宮中・貴族の家に仕える女性

平安時代 / 古文単語

解説

宮中や貴族の邸宅で仕える女性。侍女。身分の高い女性も含む。「女房たち集まりて」。現代語の「妻」の意味ではない。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

名詞 女性 宮中 侍女 貴族 時代:平安時代 種別:古文単語

局 (つぼね)

女房の部屋

平安時代 / 古文単語

解説

宮中や貴族邸で、女房が使う個室。「局に籠る」。転じて、その部屋の主である女房を指すこともある。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

名詞 部屋 女房 宮中 個室 時代:平安時代 種別:古文単語

君達 (きんだち)

貴族の子弟

平安時代 / 古文単語

解説

貴族の息子や娘を指す敬称。「きんだち」と読む。「若君達」などの形で使われる。身分の高い若者への呼称。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

名詞 敬称 貴族 子弟 若者 時代:平安時代 種別:古文単語

御曹司 (おんぞうし)

貴族の子息

平安時代 / 古文単語

解説

貴族の息子、特に嫡子を指す敬称。「ぞうし」は「蔵人」の転。現代語では総理大臣の息子などに使われる。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

名詞 敬称 貴族 子息 嫡子 時代:平安時代 種別:古文単語

上 (うえ)

身分の高い人

平安時代 / 古文単語

解説

高貴な人、主人、天皇などを指す敬称。「上に申す」「上の御前」。文脈により意味が変わる多義語。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

名詞 敬称 身分 主人 天皇 時代:平安時代 種別:古文単語

宮仕え (みやづかえ)

宮中に仕えること

平安時代 / 古文単語

解説

宮中や貴族の邸宅で働くこと。特に女性が宮中で女房として仕えること。「宮仕えに出づ」。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

名詞 動詞 宮中 仕える 女房 時代:平安時代 種別:古文単語

対 (たい)

貴族邸の建物

平安時代 / 古文単語

解説

寝殿造りの主要建物の一つ。寝殿の東西に配置される建物。「東の対」「西の対」。住居や控え室として使われる。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

名詞 建築 寝殿造り 貴族 邸宅 時代:平安時代 種別:古文単語

几帳 (きちょう)

間仕切りの調度

平安時代 / 古文単語

解説

布を張った可動式の間仕切り。貴族の住居で目隠しやプライバシー保護に使用。「几帳の陰」などの表現。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

名詞 調度 間仕切り 貴族 プライバシー 時代:平安時代 種別:古文単語

御簾 (みす)

簾のカーテン

平安時代 / 古文単語

解説

竹などで編んだすだれ。貴族の住居で部屋を仕切る。「御簾を巻き上げる」。中の様子を隠す役割。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

名詞 調度 すだれ 貴族 目隠し 時代:平安時代 種別:古文単語

やる (やる)

贈る・送る・行かせる

平安時代 / 古文単語

解説

「やる」は「贈る」「送る」「行かせる」の意。他動詞。「文をやる」（手紙を送る）「人をやる」（人を行かせる）。現代語より広い意味。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

動詞 贈る 送る 行かせる 他動詞 時代:平安時代 種別:古文単語

わぶ (わぶ)

頻出

嘆く・困る

平安時代 / 古文単語

解説

「わぶ」は「嘆く」「困る」「侘びる」の意。バ行上二段活用。「わびて」「わびぬ」の形で頻出。つらい状況で使われる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

動詞 嘆く 困る 侘びる 上二段 時代:平安時代 種別:古文単語

わびし (わびし)

つらい・みすぼらしい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「つらい」「困った」「みすぼらしい」の意。「わびしき身」「わびしく思ふ」。「わぶ」の形容詞形。侘しい状況を表す。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

形容詞 つらい 困った みすぼらしい 侘びる 時代:平安時代 種別:古文単語

らうたし (らうたし)

かわいらしい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「かわいらしい」「いとおしい」の意。幼い者や小さいものへの愛情を表す。「らうたき子」「らうたくて」。平安時代特有の美意識。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

形容詞 かわいらしい いとおしい 愛情 美意識 時代:平安時代 種別:古文単語

うつくし (うつくし)

かわいらしい・美しい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「かわいらしい」「美しい」の意。現代語の「美しい」より「かわいい」に近い。小さいもの、愛らしいものへの感情。枕草子「うつくしきもの」。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

形容詞 かわいらしい 美しい 愛らしい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

めでたし (めでたし)

素晴らしい・立派だ

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「素晴らしい」「立派だ」「すぐれている」の意。賞賛を表す。「めでたき人」。現代語の「めでたい」とニュアンスが異なる。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

形容詞 | 素晴らしい | 立派 | すぐれている | 賞賛 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

あはれなり (あわれなり)

しみじみとした

平安時代 / 古文単語

解説

形容動詞で「しみじみとした」「趣深い」の意。「もののあはれ」の「あはれ」。感動・共感を表す。平安文学の美意識の中心概念。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

形容動詞 | しみじみ | 趣深い | 感動 | もののあはれ | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

をかし (をかし)

趣がある・興味深い

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「趣がある」「興味深い」「美しい」の意。知的・感覚的な美を表す。「あはれ」より客観的。枕草子の美意識。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

形容詞 趣がある 興味深い 美しい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

つきづきし (つきづきし)

ふさわしい・似合う

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「ふさわしい」「似合っている」「調和している」の意。「つきづきしき人」。場面や状況に適している様子を表す。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

形容詞 ふさわしい 似合う 調和 適切 時代:平安時代 種別:古文単語

おぼゆ (おぼゆ)

思われる・思い出される

平安時代 / 古文単語

解説

「おぼゆ」は「思われる」「思い出される」「似ている」の意。ヤ行下二段活用。自発的な思いや記憶を表す。「美しくおぼゆ」「昔おぼえて」。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

動詞 | 思われる | 自発 | 記憶 | 下二段 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

おどろく (おどろく)

目が覚める・驚く

平安時代 / 古文単語

解説

「おどろく」は「目が覚める」「気づく」「驚く」の意。カ行四段活用。現代語の「驚く」より広い意味。「夢よりおどろく」（夢から覚める）。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

動詞 | 目が覚める | 気づく | 驚く | 四段 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

おこたる (おこたる)

病気が治る・怠る

平安時代 / 古文単語

解説

「おこたる」は「病気が治る」「怠ける」の意。ラ行四段活用。「病おこたる」（病気が治る）。現代語と意味が異なる場合がある。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

動詞 病気が治る 怠る 四段 治癒 時代:平安時代 種別:古文単語

あく (あく)

開く

平安時代 / 古文単語

解説

「あく」は「開く」の意。カ行四段活用。「戸あく」「目あく」。自動詞。他動詞は「開く」（あく）。現代語とほぼ同じ。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

動詞 開く 自動詞 四段 戸 時代:平安時代 種別:古文単語

あやし (あやし)

不思議だ・身分が低い

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「不思議だ」「怪しい」「身分が低い」「粗末だ」の意。多義語。「あやしき者」（身分の低い者）「あやしと思ふ」（不思議だと思う）。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

形容詞 | 不思議 | 身分低い | 怪しい | 粗末 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

ありがたし (ありがたし)

めったにない・すばらしい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「めったにない」「珍しい」「すばらしい」の意。「有り難し」の原義は「存在し難い」。現代語の「ありがたい」より広い意味。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

形容詞 めったにない 珍しい すばらしい 稀少 時代:平安時代 種別:古文単語

いかで (いかで)

どうして・なんとかして

平安時代 / 古文単語

解説

副詞で疑問「どうして」と願望「なんとかして」の二義。「いかでか知らむ」（どうして知ろうか）「いかで会はむ」（なんとかして会いたい）。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

副詞 疑問 願望 どうして なんとかして 時代:平安時代 種別:古文単語

いかに (いかに)

どのように・どんなに

平安時代 / 古文単語

解説

副詞で疑問「どのように」と程度「どんなに」の意。「いかに思ふ」（どう思うか）「いかに悲しき」（どんなに悲しいことか）。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞 疑問 程度 どのように どんなに 時代:平安時代 種別:古文単語

いづくに (いづくに)

どこに

平安時代 / 古文単語

解説

疑問の副詞。場所を尋ねる。「いづくに住む」（どこに住むか）。「いづこに」とも。現代語の「どこに」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

副詞 疑問 場所 どこに いづこ 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆくりなし (ゆくりなし)

思いがけない・突然の

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「思いがけない」「突然の」「不意の」の意。「ゆくりなき事」（思いがけないこと）。予期しない出来事を表す。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

形容詞 | 思いがけない | 突然 | 不意 | 予期しない | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

ねんごろなり (ねんごろなり)

丁寧だ・熱心だ

平安時代 / 古文単語

解説

形容動詞で「丁寧だ」「親切だ」「熱心だ」の意。「ねんごろに言ふ」（丁寧に言う）。心を込めた様子を表す。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

形容動詞 丁寧 親切 熱心 懇ろ 時代:平安時代 種別:古文単語

はかなし (はかなし)

頼りない・儚い

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「頼りない」「儚い」「取るに足りない」の意。「はかなき命」（儚い命）。無常観を表す重要語。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

形容詞 | 頼りない | 儚い | 無常 | 取るに足りない | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

ゆゆしげなり (ゆゆしげなり)

恐ろしげだ・立派そうだ

平安時代 / 古文単語

解説

形容動詞で「恐ろしげだ」「不吉そうだ」「立派そうだ」の意。「ゆゆし」の様態形。「ゆゆしげなる夢」（不吉そうな夢）。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

形容動詞 恐ろしげ 不吉そう 立派そう 様態 時代:平安時代 種別:古文単語

参上す (参上す)

参上する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「参上す」は「参上する」「伺う」の意。サ行変格活用。謙譲語。「御前に参上す」。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

動詞 謙譲語 参上 伺う サ変 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

申し上ぐ (申し上ぐ)

申し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「申し上ぐ」は「申し上げる」の意。ガ行下二段活用。謙譲語。「事を申し上ぐ」。「申す」+「上ぐ」の複合動詞。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

動詞 謙譲語 申し上げる 下二段 複合 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

賜る (たまわる)

いただく・くださる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「賜る」は謙譲語で「いただく」、尊敬語で「くださる」の意。ラ行四段活用。二義あり文脈で判断。「御文を賜る」（お手紙をいただく）。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

動詞　謙譲語　尊敬語　いただく　四段　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

古文：古典常識（作品・名文）

全96件　/ 重要候補6件　classical-knowledge.csv

重要ポイント（大きく）

いとをかし (いとおかし)

頻出

たいそう趣がある

平安時代 / 古文表現

解説

「いとをかし」は「をかし」の強調形。「いと」(たいそう)+「をかし」(趣がある)。枕草子に頻出する表現。知的で明るい美の評価。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

をかし　強調　枕草子　知的美　時代:平安時代　種別:古文表現

あはれなり (あわれなり)

頻出

しみじみとしている

平安時代 / 古文表現

解説

「あはれなり」は「あはれ」の形容動詞形。しみじみとした情趣を表す。源氏物語に頻出。平安貴族の美意識の中核概念。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

あはれ　もののあわれ　源氏物語　美意識　時代:平安時代　種別:古文表現

いみじう (いみじう)

最頻出

たいそう・はなはだしく

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう」は「いみじ」の連用形で副詞。「たいそう」「はなはだしく」の意。程度の強さを表す最頻出副詞。「いみじう泣く」「いみじう喜ぶ」など。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

たいそう　はなはだしく　程度副詞　最頻出　時代:平安時代　種別:古文表現

係り結び (かかりむすび)

最重要

古文の構文法則

古文表現

解説

係助詞（ぞ・なむ・や・か・こそ）が文中にあると、文末が連体形または已然形で結ばれる法則。「ぞ・なむ・や・か」は連体形、「こそ」は已然形で結ぶ。古文の最重要文法事項。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

文法　係助詞　連体形　已然形　構文　種別:古文表現

候ふ (そうろう)

頻出

丁寧・謙譲の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文表現

解説

「候ふ」は丁寧語・謙譲語の補助動詞。「あり」の丁寧語。武家の書状で頻出。「〜で候」の形。中世以降に一般化。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

補助動詞 丁寧 謙譲 候ふ 武家 時代:鎌倉時代以降 種別:古文表現

いみじう心憂し (いみじううれうし)

頻出

非常につらい

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう心憂し」は「非常につらい」「ひどく悲しい」の意。強い悲嘆を表す慣用表現。『源氏物語』などで頻出。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

慣用句 つらい 悲しい 悲嘆 心憂し 時代:平安時代 種別:古文表現

付録：全データ（削らない）

竹取物語 (たけとりものがたり)

日本最古の物語

平安時代初期 / 古典作品

解説

「竹取物語」は日本最古の物語文学。かぐや姫の物語として有名。平安時代初期成立。作者未詳。「物語の出で来はじめの祖」と評される。【あらすじ】竹取の翁が光る竹の中からかぐや姫を見つけ、やがて姫は多くの求婚者や帝の求愛を退け、最後は月へ帰っていく物語。

例文1

竹取の翁が竹の中で光る小さな姫を見つけ、家に連れ帰って育て始める。（現代語訳）【竹取物語】

例文2

月から迎えが来る夜、かぐや姫は育ての親に別れを告げ、天人の衣を着せられて涙も心も遠のいていく。帝の軍勢も引き留められず、姫は月へ昇ってしまう。（現代語訳）【竹取物語】

関連

かぐや姫 | 最古の物語 | 平安初期 | 作者未詳 | 時代:平安時代初期 | 種別:古典作品

伊勢物語 (いせものがたり)

在原業平の歌物語

平安時代初期 / 古典作品

解説

「伊勢物語」は在原業平を主人公とする歌物語。全125段。和歌を中心とした短編集。「昔男ありけり」で始まる各段が有名。恋愛を主題とする。【あらすじ】在原業平を思わせる「昔男」を中心に、恋や旅の逸話と和歌を組み合わせた短い話の連なり。

例文1

主人公は恋に悩みながら各地を旅し、折々の出来事を和歌に託して語る。（現代語訳）【伊勢物語】

例文2

東国への旅の途中、隅田川のほとりで都を思って涙がこぼれ、旅の寂しさが胸に迫る。変わらぬ月や春の景色に、変わってしまった自分の身を重ねて嘆く。（現代語訳）【伊勢物語】

関連

在原業平 | 歌物語 | 昔男 | 恋愛 | 時代:平安時代初期 | 種別:古典作品

土佐日記 (とさにっき)

紀貫之の日記文学

平安時代中期 / 古典作品

解説

「土佐日記」は紀貫之が仮名で書いた日記文学。「男もすなる日記といふものを」で始まる。女性視点で書かれた最初の仮名日記。【あらすじ】紀貫之が「女」のふりをして、土佐から都へ戻る旅の日々を仮名で記した日記文学。旅の別れや喪失の悲しみが描かれる。

例文1

作者一行が任地の土佐を出発し、船で都へ帰る道中の出来事を日々書き留める。（現代語訳）【土佐日記】

例文2

旅の途中、亡くした子のことがふと胸に迫り、楽しむはずの景色も悲しみに染まる。どうしようもない思いを、歌と言葉でこぼしながら船路を進む。（現代語訳）【土佐日記】

関連

紀貫之 | 仮名日記 | 男もすなる | 女性視点 | 時代:平安時代中期 | 種別:古典作品

枕草子 (まくらのそうし)

清少納言の随筆

平安時代中期 / 古典作品

解説

「枕草子」は清少納言の随筆文学。「春はあけぼの」で始まる。をかしの文学の代表。宮廷生活を鋭い観察眼で描く。約300段。【あらすじ】清少納言が宮廷での見聞や感想を、鋭い観察と機知ある文章で綴った随筆。四季や人物、出来事が多彩に描かれる。

例文1

四季それぞれの美しさを、春の夜明けや秋の夕暮れなど具体的な情景で語る。（現代語訳）【枕草子】

例文2

雪の積もった香炉峰をめぐるやり取りで、機転の利いた返答が場を一気に沸かせる。宮中の知的な遊びと、才気が勝負になる緊張感が伝わる。（現代語訳）【枕草子】

関連

清少納言 | 春はあけぼの | をかし | 随筆 | 時代:平安時代中期 | 種別:古典作品

源氏物語 (げんじものがたり)

紫式部の長編小説

平安時代中期 / 古典作品

解説

「源氏物語」は紫式部による世界最古の長編小説。光源氏の生涯と恋愛を描く全54帖。「もののあわれ」の文学の最高峰。日本文学の最高傑作。【あらすじ】光源氏の恋愛と栄華、そしてその後の世代までを描く長編物語。人の心の揺れと「もののあわれ」が物語全体を貫く。

例文1

身分の定まらない母を持つ光源氏が宮中で成長し、さまざまな恋に身を投じていく。（現代語訳）【源氏物語】

例文2

栄華の頂点にあるように見えても、別れや嫉妬が積み重なり、心は静かに疲れていく。最愛の人を失う場面では、取り返しのつかない喪失が物語の空気を変えてしまう。（現代語訳）【源氏物語】

関連

紫式部 | 光源氏 | もののあわれ | 長編小説 | 時代:平安時代中期 | 種別:古典作品

更級日記 (さらしなにっき)

菅原孝標女の日記

平安時代後期 / 古典作品

解説

「更級日記」は菅原孝標女の回想的日記文学。源氏物語への憧れから始まる。「あづまぢの道のはてよりも」で始まる。女性の内面を描く。【あらすじ】菅原孝標女が少女期から晩年までを回想し、物語への憧れと現実の人生の移ろいを綴った日記文学。

例文1

幼い頃から物語を強く望み、ついにそれを手にして夢中になる心の高まりが語られる。（現代語訳）【更級日記】

例文2

憧れていた物語の世界に心を預けたのに、現実の人生は思うように進まず、ふと我に返って虚しさを覚える。年月を経て、かつての熱と今の静けさの落差を受け止める場面が胸に残る。（現代語訳）【更級日記】

関連

菅原孝標女　源氏物語憧れ　回想的日記　女性内面　時代:平安時代後期　種別:古典作品

大鏡 (おおかがみ)

歴史物語

平安時代後期 / 古典作品

解説

「大鏡」は歴史物語の代表作。藤原道長の栄華を中心に摂関政治を描く。「鏡物」の最初。二人の老人の対話形式。紀伝体で書かれる。【あらすじ】摂関政治の時代を、老人たちの語り（対話）という形で回想し、藤原氏と道長の栄華を中心に描く歴史物語。

例文1

二人の老人が昔話として語り始め、宮廷の政争や人々の評判が生き生きと伝えられる。（現代語訳）【大鏡】

例文2

語りが進むにつれ、道長の権勢が極まり、誰も逆らえない空気が都を覆っていく。やがて栄華の影にある緊張や不安もにじみ、時代の大きなうねりが感じられる。（現代語訳）【大鏡】

関連

藤原道長 | 歴史物語 | 鏡物 | 対話形式 | 時代:平安時代後期 | 種別:古典作品

今昔物語集 (こんじゃくものがたりしゅう)

説話集

平安時代後期 / 古典作品

解説

「今昔物語集」は日本最大の説話集。全31巻(現存28巻)。「今は昔」で始まる約千話を収録。仏教説話・世俗説話を含む。【あらすじ】仏教説話や世俗説話など多種多様な短編を集めた大規模な説話集。「今は昔」の語り口で物語が展開する。

例文1

「今は昔」と語り出し、因果応報や人の欲深さなど、教訓を含む出来事を短く語る。（現代語訳）【今昔物語集】

例文2

人の欲や怠け心が招いた結末がはっきり示され、読後に強い戒めが残る。笑い話でも最後には「そうなってはいけない」と思わせる落ちが付く。（現代語訳）【今昔物語集】

関連

説話集 | 今は昔 | 仏教説話 | 世俗説話 | 時代:平安時代後期 | 種別:古典作品

平家物語 (へいけものがたり)

軍記物語

鎌倉時代 / 古典作品

解説

「平家物語」は平氏の興亡を描いた軍記物語。「祇園精舎の鐘の声」で始まる。琵琶法師により語られた。無常観を描く。全12巻。【あらすじ】平氏の栄華と滅亡、源平合戦の激動を語る軍記物語。冒頭から無常観が示され、盛者必衰の理が描かれる。

例文1

平氏が権勢を誇るが、やがて戦乱が広がり、一門が滅びへ向かっていく。（現代語訳）【平家物語】

例文2

都で栄華を誇った平家が、戦の連敗で次第に追い詰められていく。最期を迎える場面では、勝敗以上に無常と別れの痛みが強く胸に迫る。（現代語訳）【平家物語】

関連

平氏興亡　祇園精舎　軍記物語　琵琶法師　時代:鎌倉時代　種別:古典作品

徒然草 (つれづれぐさ)

兼好法師の随筆

鎌倉時代 / 古典作品

解説

「徒然草」は兼好法師(吉田兼好)の随筆。「つれづれなるままに」で始まる。全243段。人生観・無常観を記す。枕草子と並ぶ随筆の双璧。【あらすじ】兼好法師が、世の中の出来事や人の心を観察し、教訓や無常観を交えて書き留めた随筆。短い段が積み重なる。

例文1

退屈な時間に硯へ向かい、思いつくままに物事を書きつけていく動機が述べられる。（現代語訳）【徒然草】

例文2

人の失敗や世間の評判を見て、なるほどと思う教訓が最後に突きつけられる。笑って読んでいたはずが、結局は自分の生き方を省みる気持ちになる。（現代語訳）【徒然草】

関連

兼好法師 | つれづれなるままに | 随筆 | 人生観 | 時代:鎌倉時代 | 種別:古典作品

方丈記 (ほうじょうき)

鴨長明の随筆

鎌倉時代 / 古典作品

解説

「方丈記」は鴨長明の随筆。「ゆく河の流れは絶えずして」で始まる。無常観を哲学的に描く。五大災厄を記録。隠遁生活を語る。【あらすじ】鴨長明が災厄の記憶と自らの隠遁生活を語り、世の無常を深く考察する随筆。

例文1

都で起きた大火や飢饉などの災厄を振り返り、人の世の不安定さを語る。（現代語訳）【方丈記】

例文2

災厄で都が崩れていく様子を見たのち、作者は小さな庵に身を置く。静けさの中でも執着が消えないことに気づき、無常を突き詰めて語る場面が核心となる。（現代語訳）【方丈記】

関連

鴨長明 | ゆく河の流れ | 無常観 | 隠遁 | 時代:鎌倉時代 | 種別:古典作品

奥の細道 (おくのほそみち)

松尾芭蕉の紀行文

江戸時代 / 古典作品

解説

「奥の細道」は松尾芭蕉の俳諧紀行文。「月日は百代の過客にして」で始まる。東北・北陸の旅を俳句と散文で記録。俳文学の最高峰。【あらすじ】松尾芭蕉が弟子と共に東北・北陸を旅し、名所の感慨を俳句と散文で記した俳諧紀行。

例文1

旅立ちにあたり、時の流れも人も旅人であると感じ、人生を旅に重ねて語る。（現代語訳）【奥の細道】

例文2

名所を前にして言葉が尽きるほどの感慨に包まれ、旅の疲れも忘れる。ふと一句を置いた瞬間、風景と歴史が一つに結ばれたように感じられる。（現代語訳）【奥の細道】

関連

松尾芭蕉 | 月日は百代の過客 | 俳諧紀行 | 俳文学 | 時代:江戸時代 | 種別:古典作品

古今和歌集 (こきんわかしゅう)

最初の勅撰和歌集

平安時代初期 / 古典作品

解説

「古今和歌集」は最初の勅撰和歌集。紀貫之らが撰者。仮名序と真名序を持つ。約1100首収録。六歌仙・三十六歌仙の歌を多く含む。【あらすじ】最初の勅撰和歌集として、四季や恋などの歌を体系的に集めた。仮名序・真名序を持ち、和歌の美意識を示す。

例文1

桜への思いのように、自然の美が人の心を大きく揺らすことを歌で表す。（現代語訳）【古今和歌集】

例文2

仮名序で、和歌は人の心から生まれ世を動かすものだと語られ、歌の価値が高らかに宣言される。続く歌々では、恋や別れの痛みが凝縮され、短い言葉で感情の頂点が示される。（現代語訳）【古今和歌集】

関連

勅撰和歌集 紀貫之 仮名序 六歌仙 時代:平安時代初期 種別:古典作品

春はあけぼの (はるはあけぼの)

枕草子冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「春はあけぼの」は枕草子の有名な冒頭文。四季の美しさを簡潔に表現。「やうやう白くなりゆく山ぎは」と続く。をかしの美意識の典型。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

枕草子 清少納言 をかし 四季 時代:平安時代中期 種別:名文句

祇園精舎の鐘の声 (ぎおんしょうじゃのかねのこえ)

平家物語冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」は平家物語の冒頭。仏教的無常観を表現。盛者必衰の理を説く。日本文学屈指の名文。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

平家物語 無常観 盛者必衰 諸行無常 時代:鎌倉時代 種別:名文句

ゆく河の流れは絶えずして (ゆくかわのながれはたえずして)

方丈記冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」は方丈記の冒頭。無常の理を河の流れに喩える。哲学的な無常観の表現。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

方丈記 鴨長明 無常観 河の流れ 時代:鎌倉時代 種別:名文句

つれづれなるままに (つれづれなるままに)

徒然草冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて」は徒然草の冒頭。退屈な時間に物を書く動機を語る。随筆文学の名文。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

徒然草 兼好法師 退屈 随筆 時代:鎌倉時代 種別:名文句

月日は百代の過客にして (つきひはひゃくだいのかかくにして)

奥の細道冒頭

江戸時代 / 名文句

解説

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」は奥の細道の冒頭。時間の流れを旅に喩える。人生を旅と捉える哲学。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

奥の細道 | 松尾芭蕉 | 時間 | 旅人 | 時代:江戸時代 | 種別:名文句

いとをかし (いとおかし)

頻出

たいそう趣がある

平安時代 / 古文表現

解説

「いとをかし」は「をかし」の強調形。「いと」(たいそう)+「をかし」(趣がある)。枕草子に頻出する表現。知的で明るい美の評価。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

をかし | 強調 | 枕草子 | 知的美 | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

あはれなり (あわれなり)

頻出

しみじみとしている

平安時代 / 古文表現

解説

「あはれなり」は「あはれ」の形容動詞形。しみじみとした情趣を表す。源氏物語に頻出。平安貴族の美意識の中核概念。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

あはれ　もののあわれ　源氏物語　美意識　時代:平安時代　種別:古文表現

かたはらいたし (かたわらいたし)

そばにいて恥ずかしい

平安時代 / 古文表現

解説

「かたはらいたし」は「そばにいて恥ずかしい」「見ていられない」の意。他人の失態を見て自分も恥ずかしい気持ち。現代語の「片腹痛い」とは異なる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

恥ずかしい　見ていられない　他人の失態　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文表現

心もとなし (こころもとなし)

待ち遠しい・不安だ

平安時代 / 古文表現

解説

「心もとなし」は「待ち遠しい」「不安だ」「はっきりしない」の意。心が落ち着かない様子。「おぼつかなし」と類義だが、より強い焦燥感。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

待ち遠しい　不安　はっきりしない　焦燥感　時代:平安時代　種別:古文表現

あやし (あやし)

不思議だ・粗末だ

平安時代 / 古文表現

解説

「あやし」は「不思議だ」「粗末だ」「身分が低い」の意。多義的な語。「あやしの者」は身分の低い人。文脈で意味を判断する必要がある。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

不思議　粗末　身分低い　多義語　時代:平安時代　種別:古文表現

うつくしげなり (うつくしげなり)

かわいらしそうだ

平安時代 / 古文表現

解説

「うつくしげなり」は「かわいらしそうだ」「愛らしく見える」の意。「うつくし」に様態の「げなり」が付いた形。外見の評価。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

かわいらしい　愛らしい　様態　外見　時代:平安時代　種別:古文表現

いみじう (いみじう)

最頻出

たいそう・はなはだしく

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう」は「いみじ」の連用形で副詞。「たいそう」「はなはだしく」の意。程度の強さを表す最頻出副詞。「いみじう泣く」「いみじう喜ぶ」など。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

たいそう　はなはだしく　程度副詞　最頻出　時代:平安時代　種別:古文表現

いかにもいかにも (いかにもいかにも)

どうかどうか・何とか

平安時代 / 古文表現

解説

「いかにもいかにも」は「どうかどうか」「何とか」「ぜひとも」の意。「いかに」の繰り返しで強調。強い願望や懇願を表す。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

どうか　何とか　ぜひとも　強調　時代:平安時代　種別:古文表現

春はあけぼの (はるはあけぼの)

枕草子の冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」清少納言『枕草子』の有名な冒頭文。春の美しさを「あけぼの」に見出す。をかしの文学の代表。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

枕草子 | 清少納言 | をかし | 冒頭文 | 春 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

夏は夜 (なつはよる)

枕草子・四季の美

平安時代中期 / 名文句

解説

「夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。」『枕草子』の春夏秋冬論の夏の部分。夏の美しさを夜に見出す。蛍の飛ぶ様子を描写。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

枕草子 | 清少納言 | 四季 | 夏 | 蛍 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

秋は夕暮れ (あきはゆうぐれ)

枕草子・四季の美

平安時代中期 / 名文句

解説

「秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに、烏の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。」『枕草子』の秋の美。夕暮れ時の情趣を描く。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

枕草子 清少納言 四季 秋 あはれ 時代:平安時代中期 種別:名文句

冬はつとめて (ふゆはつとめて)

枕草子・四季の美

平安時代中期 / 名文句

解説

「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきづきし。」『枕草子』の冬の美。早朝の寒さと炭火の情景。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

枕草子 | 清少納言 | 四季 | 冬 | 早朝 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

つれづれなるままに (つれづれなるままに)

徒然草の冒頭

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」兼好法師『徒然草』の有名な冒頭文。無聊の中で随筆を書く動機を述べる。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

徒然草 兼好法師 冒頭文 無聊 随筆 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

祇園精舎の鐘の声 (ぎおんしょうじゃのかねのこえ)

平家物語の冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。」『平家物語』の有名な冒頭文。仏教の無常観を表す。平家一門の栄枯盛衰のテーマを示す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

平家物語 冒頭文 無常観 諸行無常 盛者必衰 時代:鎌倉時代 種別:名文句

いづれの御時にか (いずれのおんときにか)

源氏物語の冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。」紫式部『源氏物語』の冒頭文。桐壺帝の時代を「いづれの御時にか」とぼかして始まる。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

源氏物語 紫式部 冒頭文 桐壺 更衣 時代:平安時代中期 種別:名文句

うつくしきもの (うつくしきもの)

枕草子の名段

平安時代中期 / 名文句

解説

「うつくしきもの。瓜にかきたるちごの顔。すずめの子の、ねず鳴きするに躍り来る。」『枕草子』の有名な段。「うつくし」はかわいいものの意。小さくてかわいいものを列挙。清少納言の鋭い観察眼。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

枕草子 清少納言 かわいい 観察 小さい 時代:平安時代中期 種別:名文句

木は桜 (きはさくら)

枕草子・植物論

平安時代中期 / 名文句

解説

「木は、桜。花は濃くて葉は薄きが、いと面白し。」『枕草子』の植物論の一節。桜を最高の木として賛美。をかしの美意識。簡潔な表現で美を語る清少納言の文体。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

枕草子 | 清少納言 | 桜 | 植物 | をかし | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

雪のいと高う降りたるを (ゆきのいとたこうふりたるを)

枕草子の名場面

平安時代中期 / 名文句

解説

「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに」『枕草子』の冬の情景。雪の日の宮中の優雅な様子を描く。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

枕草子 清少納言 雪 宮中 優雅 時代:平安時代中期 種別:名文句

中納言参り給ひて (ちゅうなごんまいりたまいて)

枕草子の名場面

平安時代中期 / 名文句

解説

「中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに」から始まる有名な場面。中納言定子が清少納言に扇を贈る場面。「香炉峰の雪」の故事を引いた知的な遊び。才女同士の交流。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

枕草子 | 清少納言 | 中納言 | 扇 | 香炉峰 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

仁和寺にある法師 (にんなじにあるほうし)

徒然草の名段

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ」で始まる話。目的地の本社まで行かず麓で帰った失敗談。「少しのことにも先達はあらまほしきことなり」の教訓。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 失敗 教訓 先達 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

高名の木登り (こうみょうのきのぼり)

徒然草の名段

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに」で始まる話。危険は油断した時に起こるという教訓。「あやふき時は言はで、やすき時に教へけり」の名言。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 教訓 油断 安全 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

奥山に猫またといふもの (おくやまにねこまたというもの)

徒然草の逸話

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」という怪異譚。山中で恐怖に怯えていたら、実は飼っていた犬だったという話。恐怖心理を描く。思い込みの危険性。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

徒然草 兼好法師 怪異 恐怖 心理 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

花は盛りに (はなはさかりに)

徒然草の美意識

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは」で始まる有名な段。完璧なものだけを美とするのではなく、衰えや不完全さにも美を見出す。無常観に基づく美意識。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

徒然草 兼好法師 美意識 無常 不完全 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

つれづれなるままに日暮らし (つれづれなるままにひぐらし)

徒然草の心境

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

徒然草冒頭の一節。「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて」と続く。退屈な日々を硯に向かって過ごす兼好法師の姿。随筆執筆の動機を率直に述べる。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

徒然草 兼好法師 退屈 執筆 動機 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

世にしたがへば (よにしたがえば)

徒然草の処世訓

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「世にしたがへば、身苦し。したがはねば、狂へるに似たり」という処世訓。世間に従えば窮屈、従わねば変人扱い。どちらを選ぶかの苦悩。兼好の人生観を示す。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 処世 人生観 苦悩 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

一事を必ず成さんと思はば (いちじをかならずなさんとおもわば)

徒然草の教訓

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず」という教訓。一つのことを成し遂げようと思うなら、他のことが損なわれても気にするな。専念の重要性。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 教訓 専念 集中 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

友とするにわろき者 (ともとするにわろきもの)

徒然草の人物論

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「友とするにわろき者、七つあり」で始まる段。悪い友人の特徴を列挙。「一つには、高く、やんごとなき人」など七項目。友人選びの基準を示す。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 友人 人物論 基準 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

ゆく河の流れは絶えずして (ゆくかわのながれはたえずして)

方丈記の冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」で始まる『方丈記』の有名な冒頭文。諸行無常を水の流れに喩える。鴨長明の無常観を象徴的に表現。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

方丈記 鴨長明 無常 水 流れ 時代:鎌倉時代 種別:名文句

男もすなる日記 (おとこもすなるにっき)

土佐日記の冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」という『土佐日記』の冒頭。男が書く日記を女性も書いてみようという趣向。紀貫之が女性の視点で書く仮名日記。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

土佐日記 紀貫之 冒頭 女性視点 仮名 時代:平安時代中期 種別:名文句

今は昔 (いまはむかし)

今昔物語集の決まり文句

平安時代末期 / 名文句

解説

「今は昔」は『今昔物語集』の各話の冒頭に現れる決まり文句。「今となっては昔のことだが」の意。説話を語り始める定型表現。約千話すべてがこの言葉で始まる。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

今昔物語集 冒頭 決まり文句 説話 定型 時代:平安時代末期 種別:名文句

月やあらぬ (つきやあらぬ)

伊勢物語・東下り

平安時代初期 / 名文句

解説

「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして」という和歌。『伊勢物語』東下りの段。月も春も変わらないが、自分だけが変わってしまった嘆き。在原業平の心情。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

伊勢物語 | 在原業平 | 和歌 | 東下り | 嘆き | 時代:平安時代初期 | 種別:名文句

世の中にたえて桜のなかりせば (よのなかにたえてさくらのなかりせば)

古今和歌集の名歌

平安時代初期 / 名文句

解説

「世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし」という在原業平の和歌。桜がなければ春は穏やかなのにという逆説。桜への複雑な思い。『古今和歌集』収録。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

古今和歌集 | 在原業平 | 和歌 | 桜 | 春 | 時代:平安時代初期 | 種別:名文句

係り結び (かかりむすび)

最重要

古文の構文法則

古文表現

解説

係助詞（ぞ・なむ・や・か・こそ）が文中にあると、文末が連体形または已然形で結ばれる法則。「ぞ・なむ・や・か」は連体形、「こそ」は已然形で結ぶ。古文の最重要文法事項。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

文法 | 係助詞 | 連体形 | 已然形 | 構文 | 種別:古文表現

ぞ〜連体形 (ぞ〜れんたいけい)

係り結び（強調）

古文表現

解説

係助詞「ぞ」が文中にある時、文末が連体形で結ばれる。強調を表す。「花ぞ咲ける」（花が咲いている）。「ぞ」の後の語を強調。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

係り結び　強調　連体形　係助詞　ぞ　種別:古文表現

なむ〜連体形 (なむ〜れんたいけい)

係り結び（強調）

古文表現

解説

係助詞「なむ」が文中にある時、文末が連体形で結ばれる。強調を表す。「人なむ来たる」（人が来た）。「なむ」の後の語を強調。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

係り結び　強調　連体形　係助詞　なむ　種別:古文表現

や・か〜連体形 (や・か〜れんたいけい)

係り結び（疑問・反語）

古文表現

解説

係助詞「や」「か」が文中にある時、文末が連体形で結ばれる。疑問・反語を表す。「誰か知る」（誰が知ろうか）。疑問や反語的強調。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

係り結び　疑問　反語　連体形　係助詞　種別:古文表現

こそ〜已然形 (こそ〜いぜんけい)

係り結び（強意）

古文表現

解説

係助詞「こそ」が文中にある時、文末が已然形で結ばれる。強意を表す。「これこそ花なれ」（これこそが花だ）。最も強い強調。已然形結びのみ「こそ」。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

係り結び　強意　已然形　係助詞　こそ　種別:古文表現

べし (べし)

推量・当然・可能など

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「べし」は推量・当然・意志・可能・命令など多義。「行くべし」（行くだろう・行くべきだ）。文脈で意味を判断。終止形接続。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

助動詞 推量 当然 意志 多義 時代:平安時代 種別:古文表現

まじ (まじ)

打消推量・打消当然

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「まじ」は「べし」の打消。「行くまじ」（行かないだろう・行くべきでない）。打消推量・打消意志・打消可能など。終止形接続。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

助動詞 打消推量 打消当然 打消意志 べし 時代:平安時代 種別:古文表現

らむ (らむ)

現在推量・原因推量

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「らむ」は現在の推量を表す。「今頃何をするらむ」（今頃何をしているだろう）。目に見えない現在の事柄の推量。終止形接続。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助動詞 | 現在推量 | 原因推量 | 目に見えない | 現在 | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

けむ (けむ)

過去推量・原因推量

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「けむ」は過去の推量を表す。「昨日何をしけむ」（昨日何をしただろう）。過去の事柄の推量。連用形接続。「けん」とも。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

助動詞 | 過去推量 | 原因推量 | 過去 | けん | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

まほし (まほし)

希望

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「まほし」は希望を表す。「行かまほし」「見まほしき」（行きたい・見たい）。形容詞型活用。連用形「まほしく」もよく使われる。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

助動詞 | 希望 | 〜たい | 形容詞型 | 願望 | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

平家物語 (へいけものがたり)

鎌倉時代の軍記物語

鎌倉時代 / 古典作品

解説

平家一門の栄華と滅亡を描いた軍記物語。「祇園精舎の鐘の声」の冒頭で有名。琵琶法師により語られた。諸行無常がテーマ。【あらすじ】平氏の栄華と滅亡、源平合戦の激動を語る軍記物語。冒頭から無常観が示され、盛者必衰の理が描かれる。

例文1

平氏が権勢を誇るが、やがて戦乱が広がり、一門が滅びへ向かっていく。（現代語訳）【平家物語】

例文2

都で栄華を誇った平家が、戦の連敗で次第に追い詰められていく。最期を迎える場面では、勝敗以上に無常と別れの痛みが強く胸に迫る。（現代語訳）【平家物語】

関連

軍記物語　平家　源平　無常　琵琶法師　時代:鎌倉時代　種別:古典作品

太平記 (たいへいき)

南北朝時代の軍記物語

南北朝時代 / 古典作品

解説

後醍醐天皇の時代から南北朝の争乱を描いた軍記物語。全40巻。足利尊氏、楠木正成などが登場。歴史的価値も高い。【あらすじ】後醍醐天皇の倒幕から南北朝の争乱までを描く軍記物語。武将たちの活躍と政治の変転が大きな流れとして語られる。

例文1

倒幕を目指す動きが広がり、戦乱の中で武将たちが名を上げていく。（現代語訳）【太平記】

例文2

戦が重なるにつれ、忠義や大義を掲げた武将たちが命を賭ける場面が続く。勝敗が決したあとに残るのは栄光ではなく喪失で、乱世のむごさが際立つ。（現代語訳）【太平記】

関連

軍記物語 南北朝 後醍醐天皇 足利尊氏 楠木正成 時代:南北朝時代 種別:古典作品

保元物語 (ほうげんものがたり)

保元の乱を描く軍記物語

平安時代末期 / 古典作品

解説

保元の乱（1156年）を題材とした軍記物語。崇徳上皇と後白河天皇の対立。源為朝の活躍。武士の台頭を描く。【あらすじ】保元の乱を題材に、皇族・貴族・武士の対立と、武士が台頭していく時代の転換点を描く軍記物語。

例文1

皇位をめぐる争いが火種となり、武士たちがそれぞれの陣営で戦うことになる。（現代語訳）【保元物語】

例文2

決戦では、親子や兄弟が敵味方に分かれて矢を放つという悲劇が頂点に達する。勝った側も後味の悪さを抱え、武士の時代の始まりが突きつけられる。（現代語訳）【保元物語】

関連

軍記物語　保元の乱　崇徳上皇　後白河天皇　源為朝　時代:平安時代末期　種別:古典作品

平治物語 (へいじものがたり)

平治の乱を描く軍記物語

平安時代末期 / 古典作品

解説

平治の乱（1159年）を題材とした軍記物語。源義朝と平清盛の対立。平家の隆盛のきっかけ。源頼朝の少年時代も描かれる。【あらすじ】平治の乱を題材に、源氏と平氏の対立が激化し、平清盛の台頭につながる過程を描く軍記物語。

例文1

都で政変が起こり、源氏と平氏が衝突して戦いが広がる。（現代語訳）【平治物語】

例文2

都が炎と混乱に包まれ、追う者と追われる者の運命が一気に決まってしまう。敗れた側が落ち延びる場面が、のちの源平の大争乱へとつながる山場になる。（現代語訳）【平治物語】

関連

軍記物語　平治の乱　源義朝　平清盛　源頼朝　時代:平安時代末期　種別:古典作品

宇治拾遺物語 (うじしゅういものがたり)

説話集

鎌倉時代初期 / 古典作品

解説

鎌倉時代初期の説話集。全15巻。「今は昔」で始まる短編説話を多数収録。笑い話や教訓話など多様。『今昔物語集』と類似点多い。【あらすじ】鎌倉初期の説話集で、教訓話だけでなく笑い話も多い。短い話で人間の機微が描かれる。

例文1

思わぬ勘違いや失敗が起こり、読者がくすっと笑えるような逸話が語られる。（現代語訳）【宇治拾遺物語】

例文2

勘違いが積み重なって最後に大恥をかき、まわりが一斉に笑う落ちが決まる。笑いのあとに、人の愚かさや戒めが自然と残る。（現代語訳）【宇治拾遺物語】

関連

説話集 鎌倉 今は昔 短編 笑い話 時代:鎌倉時代初期 種別:古典作品

古今著聞集 (ここんちょもんじゅう)

説話集

鎌倉時代 / 古典作品

解説

鎌倉時代の説話集。橘成季編。全30巻。和歌・音楽・舞踊など文化的話題が豊富。貴族社会の逸話を多数収録。【あらすじ】鎌倉時代に編まれた説話集で、和歌・音楽・芸能など文化的題材が豊富。貴族社会の逸話が多い。

例文1

和歌や音楽にまつわる逸話が語られ、当時の文化の価値観が伝わる。（現代語訳）【古今著聞集】

例文2

名人の一言や機転で、その場の評価がひっくり返る場面が印象的に語られる。芸能や和歌が人生の勝負所になるところがこの集の面白さだ。（現代語訳）【古今著聞集】

関連

説話集 鎌倉 橘成季 和歌 文化 時代:鎌倉時代 種別:古典作品

沙石集 (しゃせきしゅう)

仏教説話集

鎌倉時代 / 古典作品

解説

鎌倉時代の仏教説話集。無住道暁著。全10巻。仏教的教訓を含む説話。民衆の生活も描かれる。説話文学の代表作。【あらすじ】仏教的教訓を含む説話を集めた作品で、僧侶や民衆の暮らしも描かれる。信仰と現実の間の人間像が表れる。

例文1

僧が語る因果応報の話などを通して、心の持ち方や行いの大切さが示される。（現代語訳）【沙石集】

例文2

欲や慢心が招いた結末が示され、読み手ははっとして姿勢を正す。最後に仏教の教えへ収束していく語りが、教訓としての山場になる。（現代語訳）【沙石集】

関連

説話集 仏教 無住道暁 教訓 鎌倉 時代:鎌倉時代 種別:古典作品

蜻蛉日記 (かげろうにっき)

平安時代の日記文学

平安時代 / 古典作品

解説

藤原道綱母が夫・藤原兼家との結婚生活を綴った日記。女性の心情を率直に描く。日本最初の女流日記文学。約20年間の記録。【あらすじ】藤原道綱母が、夫との結婚生活の苦悩や心の揺れを率直に綴った日記文学。内面描写が特徴。

例文1

夫の訪れを待ちながら不安と苛立ちが募り、心が落ち着かない日々が語られる。（現代語訳）【蜻蛉日記】

例文2

夫を待ち続ける日々が限界に達し、作者は心の折れそうな瞬間を言葉にする。迷いながらも自分の生き方を選び直そうとする決意が、この日記の山場になる。（現代語訳）【蜻蛉日記】

関連

日記文学 女流 藤原道綱母 藤原兼家 結婚生活 時代:平安時代 種別:古典作品

和泉式部日記 (いずみしきぶにっき)

和泉式部の日記

平安時代 / 古典作品

解説

和泉式部と敦道親王との恋愛を描いた日記風物語。和歌を多く含む。情熱的な恋愛描写。虚構性も指摘される。【あらすじ】和泉式部と敦道親王の恋を中心に、和歌を交えながら情熱的な心情を描く日記風の物語。

例文1

身分差のある恋に惹かれ合い、逢瀬を重ねるたびに喜びと不安が増していく。（現代語訳）【和泉式部日記】

例文2

恋の噂や身分の壁に揺さぶられながらも、二人は和歌で思いを投げ合う。会えない夜の切なさが頂点に達し、言葉だけが熱を持って残る。（現代語訳）【和泉式部日記】

関連

日記文学 女流 和泉式部 敦道親王 恋愛 時代:平安時代 種別:古典作品

紫式部日記 (むらさきしきぶにっき)

紫式部の宮仕え日記

平安時代 / 古典作品

解説

紫式部が宮中での生活や藤原道長らとの交流を記した日記。『源氏物語』の作者による貴重な記録。鋭い人物観察。【あらすじ】紫式部が宮廷での生活や人々の振る舞いを観察し、出来事や評判を記した日記。作者の人物評が鋭い。

例文1

宮中の行事や日常が描かれ、華やかさの裏にある気遣いや緊張感も伝わる。（現代語訳）【紫式部日記】

例文2

華やかな宮廷の裏で、噂や嫉妬が渦巻き、作者は一歩引いて冷静に観察する。人の長所も短所も見抜いて書き留める筆致が、読者に強い印象を与える。（現代語訳）【紫式部日記】

関連

日記文学 | 女流 | 紫式部 | 宮中 | 藤原道長 | 時代:平安時代 | 種別:古典作品

更級日記 (さらしなにっき)

菅原孝標女の日記

平安時代 / 古典作品

解説

菅原孝標女が『源氏物語』への憧れや人生を綴った日記。少女期から晩年まで。物語への情熱と現実の落差を描く。回想的作品。【あらすじ】菅原孝標女が少女期から晩年までを回想し、物語への憧れと現実の人生の移ろいを綴った日記文学。

例文1

幼い頃から物語を強く望み、ついにそれを手にして夢中になる心の高まりが語られる。（現代語訳）【更級日記】

例文2

憧れていた物語の世界に心を預けたのに、現実の人生は思うように進まず、ふと我に返って虚しさを覚える。年月を経て、かつての熱と今の静けさの落差を受け止める場面が胸に残る。（現代語訳）【更級日記】

関連

日記文学 | 女流 | 菅原孝標女 | 源氏物語 | 回想 | 時代:平安時代 | 種別:古典作品

讃岐典侍日記 (さぬきのすけにっき)

平安時代の日記文学

平安時代 / 古典作品

解説

讃岐典侍（藤原長子）が堀河天皇への思慕を綴った日記。宮仕えの女性の立場から見た宮中。和歌を多く含む短編日記。【あらすじ】讃岐典侍が宮中での立場から、帝への思慕や心の動きを和歌とともに綴った短い日記文学。

例文1

帝への思いが募り、会えない時間の寂しさを和歌や言葉で表す。（現代語訳）【讃岐典侍日記】

例文2

帝との距離が埋まらないまま時が過ぎ、思慕が耐えがたいほど強くなる。会えない現実を受け入れつつ、歌にだけ心を託す場面が切ない山場になる。（現代語訳）【讃岐典侍日記】

関連

日記文学 | 女流 | 讃岐典侍 | 堀河天皇 | 宮中 | 時代:平安時代 | 種別:古典作品

大鏡 (おおかがみ)

歴史物語

平安時代末期 / 古典作品

解説

藤原氏の栄華を描いた歴史物語。全3巻。藤原道長の時代を中心に、摂関政治の全盛期を描く。老人の回想形式。四鏡の一つ。【あらすじ】摂関政治の時代を、老人たちの語り（対話）という形で回想し、藤原氏と道長の栄華を中心に描く歴史物語。

例文1

二人の老人が昔話として語り始め、宮廷の政争や人々の評判が生き生きと伝えられる。（現代語訳）【大鏡】

例文2

語りが進むにつれ、道長の権勢が極まり、誰も逆らえない空気が都を覆っていく。やがて栄華の影にある緊張や不安もにじみ、時代の大きなうねりが感じられる。（現代語訳）【大鏡】

関連

歴史物語 藤原氏 藤原道長 摂関政治 四鏡 時代:平安時代末期 種別:古典作品

増鏡 (ますかがみ)

歴史物語

南北朝時代 / 古典作品

解説

後鳥羽院から後醍醐天皇までを描いた歴史物語。全17巻。鎌倉時代の政治を貴族の視点で記録。四鏡の最後。【あらすじ】後鳥羽院から後醍醐天皇の頃までの政治と宮廷社会を、貴族の視点で語る歴史物語。四鏡の最後にあたる。

例文1

院政や政争の移り変わりが、宮廷に近い目線で淡々と語られる。（現代語訳）【増鏡】

例文2

政局が転がるように変わり、昨日の常識が今日には崩れてしまう。語りが積み重なって時代の転換点が見えてくるところが、この歴史物語の山場になる。（現代語訳）【増鏡】

関連

歴史物語 後鳥羽院 後醍醐天皇 鎌倉時代 四鏡 時代:南北朝時代 種別:古典作品

発心集 (ほっしんしゅう)

仏教説話集

鎌倉時代 / 古典作品

解説

鴨長明著の仏教説話集。全8巻。発心（出家・入道）の話を集める。『方丈記』の作者による説話文学。仏教的世界観。【あらすじ】出家や入道など「発心」にまつわる説話を集め、世俗の執着から離れる心の転換を描く。

例文1

世の無常を感じた人が出家を決意し、これまでの暮らしを捨てるきっかけが語られる。（現代語訳）【発心集】

例文2

世俗の成功や愛着を捨てる決断の瞬間が描かれ、読者も心を揺さぶられる。出家後の苦しさや迷いを越えて心が変わるところが、説話の結末として示される。（現代語訳）【発心集】

関連

説話集 仏教 鴨長明 発心 出家 時代:鎌倉時代 種別:古典作品

十訓抄（じっきんしょう）

説話集

鎌倉時代中期 / 古典作品

解説

鎌倉時代中期の説話集。全10巻。10の教訓（十訓）を主題とする。和漢の故事を収録。『今昔物語集』の影響が見られる。【あらすじ】十の教訓を軸に、和漢の故事や逸話を集めた説話集。権力者から庶民まで、行動の戒めが示される。

例文1

権力や欲に振り回された失敗談が語られ、慎みの大切さが示される。（現代語訳）【十訓抄】

例文2

軽い気持ちの過ちが大きな破滅につながり、最後に厳しい結末で締まる。逆に、慎み深い振る舞いが報われる話では、結果がはっきり出て教訓が胸に刺さる。（現代語訳）【十訓抄】

関連

説話集 教訓 十訓 故事 和漢 時代:鎌倉時代中期 種別:古典作品

栄花物語 (えいがものがたり)

歴史物語

平安時代中期 / 古典作品

解説

藤原氏の栄華を描いた歴史物語。全40巻。藤原道長の時代を中心に、摂関家の繁栄を描く。物語風の歴史叙述。【あらすじ】藤原氏、とくに道長の時代を中心に、宮廷の栄華や行事を物語風に描く歴史物語。華やかな宮廷生活の記録でもある。

例文1

摂関家の勢いが増し、宮廷行事や婚姻を通じて権力が固まっていく。（現代語訳）【栄花物語】

例文2

道長の権勢が頂点に達し、宮廷行事がきらびやかに続く一方で、その繁栄が永遠ではない気配も漂う。華やかさと無常が同時に見えるところが読みどころになる。（現代語訳）【栄花物語】

関連

歴史物語 藤原氏 藤原道長 摂関家 繁栄 時代:平安時代中期 種別:古典作品

む〜打消 (む〜うちけし)

助動詞「む」の打消

平安時代 / 古文表現

解説

「む」は打消推量・打消意志を表す助動詞。「行かむ」は「行かないだろう」。未然形接続。「ず」と混同しないよう注意。現代語「まい」の語源。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

助動詞 | 打消推量 | 打消意志 | 未然形 | まい | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

給ふ・賜ふ (たまう)

尊敬・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「給ふ」「賜ふ」は尊敬・謙譲両方で使われる補助動詞。「言ひ給ふ」（おっしゃる）「申し給ふ」（申し上げなさる）。動作の主が誰かで判断。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

補助動詞 尊敬 謙譲 給ふ 賜ふ 時代:平安時代 種別:古文表現

侍り (はべり)

丁寧・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「侍り」は丁寧語・謙譲語の補助動詞。「あり」の丁寧語。「侍り」で文を結ぶと丁寧な表現に。宮中言葉の特徴。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

補助動詞 丁寧 謙譲 侍り あり 時代:平安時代 種別:古文表現

候ふ（そうろう）

頻出

丁寧・謙譲の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文表現

解説

「候ふ」は丁寧語・謙譲語の補助動詞。「あり」の丁寧語。武家の書状で頻出。「〜で候」の形。中世以降に一般化。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

補助動詞 丁寧 謙譲 候ふ 武家 時代:鎌倉時代以降 種別:古文表現

奉る (たてまつる)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「奉る」は謙譲語の補助動詞。「〜申し上げる」の意。「書き奉る」「申し奉る」。動作を貴人に向けて行う時に使用。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

補助動詞　謙譲　奉る　申し上げる　貴人　時代:平安時代　種別:古文表現

聞こゆ・聞こえさす (きこゆ・きこえさす)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「聞こゆ」「聞こえさす」は謙譲語の補助動詞。「〜申し上げる」の意。「聞こえさす」は「聞こゆ」より丁重。「申し聞こゆ」など。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

補助動詞 謙譲 聞こゆ 聞こえさす 申し上げる 時代:平安時代 種別:古文表現

参る (まいる)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「参る」は謙譲語の補助動詞。「〜申し上げる」の意。「申し参らす」「書き参らす」。貴人への動作を表す。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

補助動詞 謙譲 参る 申し上げる 貴人 時代:平安時代 種別:古文表現

春はあけぼの (はるはあけぼの)

枕草子の冒頭

平安時代 / 名文句

解説

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて」という『枕草子』の有名な冒頭。四季の美を詠む。清少納言の美意識の象徴。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

枕草子 | 清少納言 | 春 | あけぼの | 冒頭 | 時代:平安時代 | 種別:名文句

本意 (ほい)

本来の願い・念願

平安時代 / 古文表現

解説

「本意」は本来の願い、念願、かねてからの望みの意。「本意を遂ぐ」（念願を遂げる）。重要な目標や願望を表す。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

名詞 願い 念願 望み 目標 時代:平安時代 種別:古文表現

いみじう心憂し (いみじううれうし)

頻出

非常につらい

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう心憂し」は「非常につらい」「ひどく悲しい」の意。強い悲嘆を表す慣用表現。『源氏物語』などで頻出。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

慣用句 つらい 悲しい 悲嘆 心憂し 時代:平安時代 種別:古文表現

世の常ならず (よのつねならず)

普通でない・格別だ

平安時代 / 古文表現

解説

「世の常ならず」は「普通でない」「格別だ」「並外れている」の意。特別な状態を表す慣用表現。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

慣用句 普通でない 格別 並外れている 特別 時代:平安時代 種別:古文表現

思ひやり (おもいやり)

想像・推察・思いやり

平安時代 / 古文表現

解説

「思ひやり」は「想像」「推察」「思いやり」の意。他者の状況や心情を推し量ること。現代語より広い意味。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

名詞 想像 推察 思いやり 心情 時代:平安時代 種別:古文表現

あてなり (あてなり)

上品だ・高貴だ

平安時代 / 古文表現

解説

形容動詞で「上品だ」「高貴だ」「優雅だ」の意。貴族的な美を表す重要語。「あてなる人」（上品な人）。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

形容動詞 上品 高貴 優雅 貴族的 時代:平安時代 種別:古文表現

たより (たより)

便り・機会・縁

平安時代 / 古文表現

解説

「たより」は「便り」「機会」「手段」「縁故」の意。多義語。「人のたより」（人づて）「たよりあらば」（機会があれば）。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

名詞 便り 機会 手段 縁故 時代:平安時代 種別:古文表現

源氏物語 (げんじものがたり)

平安時代の長編小説

平安時代中期 / 古典作品

解説

紫式部作の長編物語。全54巻。光源氏の生涯と恋愛を描く。日本文学最高峰。世界最古の長編小説とも言われる。平安貴族社会を精緻に描写。【あらすじ】光源氏の恋愛と栄華、そしてその後の世代までを描く長編物語。人の心の揺れと「もののあわれ」が物語全体を貫く。

例文1

身分の定まらない母を持つ光源氏が宮中で成長し、さまざまな恋に身を投じていく。（現代語訳）【源氏物語】

例文2

栄華の頂点にあるように見えても、別れや嫉妬が積み重なり、心は静かに疲れていく。最愛の人を失う場面では、取り返しのつかない喪失が物語の空気を変えてしまう。（現代語訳）【源氏物語】

関連

物語　紫式部　光源氏　恋愛　長編　時代:平安時代中期　種別:古典作品

竹取物語 (たけとりものがたり)

日本最古の物語

平安時代初期 / 古典作品

解説

かぐや姫の物語。『竹取翁物語』とも。竹から生まれた姫が月に帰る。日本最古の物語文学。「今は昔」で始まる。求婚譚と昇天譚の融合。【あらすじ】竹取の翁が光る竹の中からかぐや姫を見つけ、やがて姫は多くの求婚者や帝の求愛を退け、最後は月へ帰っていく物語。

例文1

竹取の翁が竹の中で光る小さな姫を見つけ、家に連れ帰って育て始める。（現代語訳）【竹取物語】

例文2

月から迎えが来る夜、かぐや姫は育ての親に別れを告げ、天人の衣を着せられて涙も心も遠のいていく。帝の軍勢も引き留められず、姫は月へ昇ってしまう。（現代語訳）【竹取物語】

関連

物語 | かぐや姫 | 竹 | 月 | 最古 | 時代:平安時代初期 | 種別:古典作品

堤中納言物語 (つつみちゅうなごんものがたり)

短編物語集

平安時代末期 / 古典作品

解説

平安時代末期の短編物語集。全10編。ユーモラスで機知に富んだ作品が多い。「虫めづる姫君」など。作者不詳。【あらすじ】平安末期の短編物語集で、機知やユーモアのある話が多い。「虫めづる姫君」など個性的な人物が登場する。

例文1

世間の常識にとらわれない姫君が登場し、周囲を驚かせるような振る舞いを見せる。（現代語訳）【堤中納言物語】

例文2

姫君が周囲の笑いものになっても平然と自分の好きを貫き、場の空気が一変する。世間の常識が揺さぶられる瞬間がこの話の山場になる。（現代語訳）【堤中納言物語】

関連

物語 短編集 ユーモア 虫めづる姫君 作者不詳 時代:平安時代末期 種別:古典作品

落窪物語 (おちくぼものがたり)

継子いじめの物語

平安時代中期 / 古典作品

解説

継子いじめと恋愛を描いた物語。全4巻。シンデレラ型の物語。平安中期の作品。庶民的で写実的な描写が特徴。【あらすじ】継母と姉にいじめられる姫が、助けを得て幸せをつかむ「シンデレラ型」の物語。庶民的で写実的な描写が特徴。

例文1

姫は理不尽ないじめに耐えながらも、味方となる人々に支えられて希望をつなぐ。（現代語訳）【落窪物語】

例文2

姫は長い屈辱を耐え抜いた末に、助けの手によって屋敷から救い出される。立場が逆転し、加害者側が慌てふためく展開が痛快な山場となる。（現代語訳）【落窪物語】

関連

物語　継子いじめ　恋愛　シンデレラ　写実的　時代:平安時代中期　種別:古典作品

うつほ物語 (うつほものがたり)

音楽と恋愛の物語

平安時代中期 / 古典作品

解説

音楽（琴）を主題とした長編物語。全20巻。『源氏物語』以前の作品。俊蔭の琴の秘曲伝承と数世代の恋愛を描く。【あらすじ】琴の秘曲の伝承を軸に、複数世代にわたる恋愛や出世を描く長編物語。音楽が物語を動かす重要な要素となる。

例文1

秘められた琴の技と物語が受け継がれ、運命のように人々の人生に関わっていく。（現代語訳）【うつほ物語】

例文2

秘曲が披露される場面で、音が人の心と運命を大きく動かし、周囲の評価が一気に変わる。音楽が栄達や恋の行方を決めていくところが物語の盛り上がりになる。（現代語訳）【うつほ物語】

関連

物語　音楽　琴　恋愛　長編　時代:平安時代中期　種別:古典作品

古文：単語（総覧）

全327件　/ 重要候補38件　classical-words.csv

重要ポイント（大きく）

あはれ (あわれ)

最重要

しみじみとした情趣

平安時代 / 古文単語

解説

「あはれ」は平安時代の美意識を表す最重要語。しみじみとした情趣、感動、もののあわれ。「いとあはれなり」などの形で頻出。物事に感動する心。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

もののあわれ　平安美意識　枕草子　源氏物語　時代:平安時代　種別:古文単語

いとほし (いとおし)

頻出

かわいそうだ・気の毒だ

平安時代 / 古文単語

解説

「いとほし」は「かわいそうだ」「気の毒だ」「いとしい」の意。同情や愛情を表す。「いといとほし」などの形で頻出。現代語の「いとおしい」の語源。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

かわいそう　同情　愛情　現代語語源　時代:平安時代　種別:古文単語

ゆかし (ゆかし)

頻出

見たい・聞きたい

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆかし」は「見たい」「聞きたい」「知りたい」の意。好奇心や興味を表す。「いとゆかし」などの形で頻出。知的好奇心を示す重要語。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

見たい　聞きたい　知りたい　好奇心　時代:平安時代　種別:古文単語

をかし (おかし)

頻出

趣がある・おもしろい

平安時代 / 古文単語

解説

「をかし」は「趣がある」「おもしろい」「美しい」の意。知的で明るい美を表す。「あはれ」と対をなす重要語。枕草子に頻出。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

趣 おもしろい 美しい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

いみじ (いみじ)

最重要

はなはだしい・すばらしい

平安時代 / 古文単語

解説

「いみじ」は「はなはだしい」「すばらしい」「ひどい」の意。程度の激しさを表す最重要語。良い意味でも悪い意味でも使う。「いみじう」の形で副詞化。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

はなはだしい　すばらしい　ひどい　程度　時代:平安時代　種別:古文単語

おどろく (おどろく)

最重要

目を覚ます・気づく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おどろく」は「目を覚ます」「気づく」「驚く」の意。現代語の「驚く」より「目覚める」の意が強い。「音におどろく」などの形。古文最重要動詞の一つ。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

目を覚ます　気づく　驚く　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あかす (あかす)

頻出

飽きない・満足しない

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あかす」は「飽きない」「満足しない」の意。「飽かす」と書く。満足できずにもっと求める様子。「見あかす」などの形で頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

飽きない　満足しない　もっと　飽かす　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

わたる (わたる)

頻出

続く・〜していく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「わたる」は「続く」「〜していく」「ずっと〜する」の意。動作の継続を表す補助動詞。「降りわたる」「鳴きわたる」などの形で頻出。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

続く　継続　補助動詞　ずっと　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

たまふ (たまう)

最頻出

お与えになる・〜なさる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たまふ」は尊敬語で「お与えになる」「〜なさる」の意。補助動詞として「〜なさる」の意でも使う。「賜ふ」「給ふ」と書く。最頻出の尊敬語。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

尊敬語 | お与えになる | なさる | 最頻出 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

はべり (はべり)

頻出

あります・ございます

平安時代 / 古文敬語

解説

「はべり」は丁寧語で「あります」「ございます」「お仕えする」の意。「侍り」と書く。「あり」の丁寧語。会話文に頻出。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

丁寧語 | あります | ございます | 侍り | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

おはす (おわす)

最重要

いらっしゃる・おいでになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはす」は尊敬語で「いらっしゃる」「おいでになる」「おられる」の意。「御座す」と書く。「あり」「をり」「行く」「来」の尊敬語。最重要尊敬語。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

尊敬語　いらっしゃる　おいでになる　御座す　時代:平安時代　種別:古文敬語

まゐる (まいる)

最頻出

参上する・差し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まゐる」は謙譲語で「参上する」「差し上げる」の意。「参る」と書く。「行く」「来」「食ふ」「飲む」などの謙譲語。最頻出謙譲語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 参上する 差し上げる 参る 時代:平安時代 種別:古文敬語

たてまつる (たてまつる)

最重要

差し上げる・申し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たてまつる」は謙譲語で「差し上げる」「申し上げる」の意。「奉る」と書く。「〜してさしあげる」の補助動詞としても頻出。最重要謙譲語。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語　差し上げる　申し上げる　奉る　時代:平安時代　種別:古文敬語

けり (けり)

最重要

〜た・〜たなあ

平安時代 / 助動詞

解説

「けり」は過去・詠嘆の助動詞。「〜た」「〜たなあ」の意。ラ変型活用。連用形接続。伝聞過去や詠嘆を表す。最重要助動詞の一つ。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 詠嘆 助動詞 伝聞過去 時代:平安時代 種別:助動詞

ず (ず)

最重要

〜ない

平安時代 / 助動詞

解説

「ず」は打消の助動詞。「〜ない」の意。特殊型活用。未然形接続。連体形は「ぬ」、已然形は「ね」。打消表現として最重要。「〜ず」「〜ぬ」「〜ね」の使い分けに注意。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

打消 ない ぬね 未然形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

む (む)

最重要

〜だろう・〜よう

平安時代 / 助動詞

解説

「む」は推量・意志・勧誘・仮定・婉曲の助動詞。「〜だろう」「〜よう」の意。特殊型活用。未然形接続。多義的な最重要助動詞。現代語の「う・よう」の原型。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

推量 | 意志 | 勧誘 | 仮定婉曲 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

べし (べし)

最重要

〜するべきだ・〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「べし」は推量・当然・義務・命令・可能・意志の助動詞。「〜するべきだ」「〜だろう」の意。特殊型活用。終止形接続(ラ変は連体形)。多義的な最重要助動詞。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 当然 義務 命令可能意志 時代:平安時代 種別:助動詞

る（る）

最重要

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「る」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。多義語として最重要。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

受身　尊敬　自発　可能　時代:平安時代　種別:助動詞

いとをかし (いとおかし)

頻出

たいそう趣がある

平安時代 / 古文表現

解説

「いとをかし」は「をかし」の強調形。「いと」(たいそう)+「をかし」(趣がある)。枕草子に頻出する表現。知的で明るい美の評価。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

をかし　強調　枕草子　知的美　時代:平安時代　種別:古文表現

あはれなり (あわれなり)

頻出

しみじみとしている

平安時代 / 古文表現

解説

「あはれなり」は「あはれ」の形容動詞形。しみじみとした情趣を表す。源氏物語に頻出。平安貴族の美意識の中核概念。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

あはれ　もののあわれ　源氏物語　美意識　時代:平安時代　種別:古文表現

いみじう (いみじう)

最頻出

たいそう・はなはだしく

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう」は「いみじ」の連用形で副詞。「たいそう」「はなはだしく」の意。程度の強さを表す最頻出副詞。「いみじう泣く」「いみじう喜ぶ」など。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

たいそう　はなはだしく　程度副詞　最頻出　時代:平安時代　種別:古文表現

給ふ (たまう)

最重要

尊敬・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「給ふ」は最重要の敬語動詞。本動詞では「与える」「お与えになる」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き、尊敬語「〜なさる」または謙譲語「〜申し上げる」の意。主語によって意味が変わる。文脈判断が必須。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

敬語 尊敬 謙譲 補助動詞 多義 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

奉る (たてまつる)

頻出

謙譲語・差し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「奉る」は謙譲語の代表的動詞。本動詞では「差し上げる」「献上する」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き「〜申し上げる」の意。必ず謙譲の意味。「手紙を奉る」「申し奉る」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

謙譲語 | 差し上げる | 献上 | 補助動詞 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

申す (もうす)

頻出

謙譲語・申す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「申す」は謙譲語の基本動詞。「言ふ」の謙譲語で「申す」「申し上げる」の意。「申し給ふ」で複合敬語になる。「かく申す」「名を申す」などの形で頻出。現代語にも継承された語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 | 申す | 申し上げる | 言ふの謙譲 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

候ふ (そうろう)

頻出

丁寧語・ございます

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

「候ふ」は丁寧語の動詞。「侍り」と同じく「〜ございます」の意。ハ行四段活用。中世以降に頻出。「さぶらふ」とも読む。武士の言葉として発達。「候へば」「候ひき」などの形。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

丁寧語 | ございます | 中世 | 武士言葉 | 時代:鎌倉時代以降 | 種別:古文重要動詞

のたまふ (のたまう)

頻出

尊敬語・おっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「のたまふ」は尊敬語の重要動詞。「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」「仰せになる」の意。ハ行四段活用。「のたまはく」で名詞句を作る。「かくのたまふ」「のたまひける」などの形で頻出。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

尊敬語 | おっしゃる | 言ふの尊敬 | 仰せ | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

〜侍り (〜はべり)

頻出

丁寧の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「侍り」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり侍り」「候侍り」など。男性語として使用される。会話文に頻出。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

丁寧 | 補助動詞 | 男性語 | 会話 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

〜候ふ (〜そうろう)

頻出

丁寧の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「候ふ」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり候ふ」「侍り候ふ」など。中世以降の武家社会で発達。書簡文に頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

丁寧 補助動詞 武家 書簡 時代:鎌倉時代以降 種別:古文重要動詞

敬語の識別（給ふの三用法） (たまうの識別)

頻出

給ふの意味判定

平安時代 / 古文敬語

解説

「給ふ」は本動詞「与える」、尊敬の補助動詞「〜なさる」、謙譲の補助動詞「〜申し上げる」の三つの用法がある。動詞の連用形に付けば補助動詞。主語が高貴なら尊敬、動作の対象が高貴なら謙譲。識別問題の頻出項目。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

識別 三用法 本動詞 尊敬 謙譲 時代:平安時代 種別:古文敬語

あり (あり)

頻出

ある・いる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あり」は存在を表す基本動詞。「ある」「いる」「生きている」の意。ラ行変格活用。「侍り」「候ふ」の基となる語。「世にあり」「ありける」など頻出。多義的で文脈判断が重要。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

ある　いる　存在　ラ変　基本　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

思ほす (おもおす)

頻出

お思いになる・思召す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「思ほす」は「思ふ」の尊敬語で「お思いになる」「思召す」の意。サ行四段活用。貴人の思考を表す尊敬表現。「かく思ほす」「思ほし召す」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

お思いになる　思召す　尊敬　四段　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

堪ふ (たう)

頻出

耐える・我慢する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「堪ふ」は「耐える」「我慢する」「こらえる」の意。ハ行下二段活用。苦痛や感情を抑える。否定形「堪へず」で「耐えられない」。「堪へかねて」などの形で頻出。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

耐える　我慢　下二段　こらえる　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

いと (いと)

最頻出

非常に・とても

古文単語

解説

程度が著しいことを表す副詞。現代語の「とても」「非常に」に相当。「いと美し」「いとをかし」のように形容詞を修飾する最頻出副詞。『源氏物語』などで多用される。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞　程度　美しい　をかし　頻出　種別:古文単語

係り結び (かかりむすび)

最重要

古文の構文法則

古文表現

解説

係助詞（ぞ・なむ・や・か・こそ）が文中にあると、文末が連体形または已然形で結ばれる法則。「ぞ・なむ・や・か」は連体形、「こそ」は已然形で結ぶ。古文の最重要文法事項。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

文法　係助詞　連体形　已然形　構文　種別:古文表現

候ふ (そうろう)

頻出

丁寧・謙譲の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文表現

解説

「候ふ」は丁寧語・謙譲語の補助動詞。「あり」の丁寧語。武家の書状で頻出。「〜で候」の形。中世以降に一般化。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

補助動詞 丁寧 謙譲 候ふ 武家 時代:鎌倉時代以降 種別:古文表現

わぶ (わぶ)

頻出

嘆く・困る

平安時代 / 古文単語

解説

「わぶ」は「嘆く」「困る」「侘びる」の意。バ行上二段活用。「わびて」「わびぬ」の形で頻出。つらい状況で使われる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

動詞 嘆く 困る 侘びる 上二段 時代:平安時代 種別:古文単語

に (に)

最頻出

格助詞（場所・時・対象）

助詞

解説

格助詞「に」は場所・時・動作の対象などを示す。「京に住む」「春に咲く」「人に会ふ」。多様な意味を持つ最頻出助詞。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞 格助詞 場所 時 対象 種別:助詞

いみじう心憂し (いみじううれうし)

頻出

非常につらい

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう心憂し」は「非常につらい」「ひどく悲しい」の意。強い悲嘆を表す慣用表現。『源氏物語』などで頻出。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

慣用句 つらい 悲しい 悲嘆 心憂し 時代:平安時代 種別:古文表現

付録：全データ（削らない）

あはれ (あわれ)

最重要

しみじみとした情趣

平安時代 / 古文単語

解説

「あはれ」は平安時代の美意識を表す最重要語。しみじみとした情趣、感動、もののあわれ。「いとあはれなり」などの形で頻出。物事に感動する心。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

もののあわれ　平安美意識　枕草子　源氏物語　時代:平安時代　種別:古文単語

いとほし (いとおし)

頻出

かわいそうだ・気の毒だ

平安時代 / 古文単語

解説

「いとほし」は「かわいそうだ」「気の毒だ」「いとしい」の意。同情や愛情を表す。「いといとほし」などの形で頻出。現代語の「いとおしい」の語源。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

かわいそう　同情　愛情　現代語語源　時代:平安時代　種別:古文単語

おぼつかなし (おぼつかなし)

不安だ・はっきりしない

平安時代 / 古文単語

解説

「おぼつかなし」は「不安だ」「はっきりしない」「待ち遠しい」の意。不確かさや不安を表す重要語。「おぼつかなく思ふ」などの形。多義的な語。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

不安 はっきりしない 待ち遠しい 多義語 時代:平安時代 種別:古文単語

かたじけなし (かたじけなし)

もったいない・恐れ多い

平安時代 / 古文単語

解説

「かたじけなし」は「もったいない」「恐れ多い」「ありがたい」の意。恩恵に対する感謝や畏敬を表す。「かたじけなく思ふ」などの形。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

もったいない 恐れ多い 感謝 畏敬 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆかし (ゆかし)

頻出

見たい・聞きたい

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆかし」は「見たい」「聞きたい」「知りたい」の意。好奇心や興味を表す。「いとゆかし」などの形で頻出。知的好奇心を示す重要語。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

見たい　聞きたい　知りたい　好奇心　時代:平安時代　種別:古文単語

つれづれなり (つれづれなり)

退屈だ・することがない

鎌倉時代 / 古文単語

解説

「つれづれなり」は「退屈だ」「することがない」「心寂しい」の意。「徒然草」の冒頭「つれづれなるままに」が有名。時間を持て余す様子。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

退屈 心寂しい 徒然草 時間 時代:鎌倉時代 種別:古文単語

をかし (おかし)

頻出

趣がある・おもしろい

平安時代 / 古文単語

解説

「をかし」は「趣がある」「おもしろい」「美しい」の意。知的で明るい美を表す。「あはれ」と対をなす重要語。枕草子に頻出。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

趣 おもしろい 美しい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

あさまし (あさまし)

驚きあきれる・意外だ

平安時代 / 古文単語

解説

「あさまし」は「驚きあきれる」「意外だ」「嘆かわしい」の意。程度が甚だしい様子を表す。「あさましきこと」などの形。強い驚きや非難を含む。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

驚きあきれる　意外　嘆かわしい　程度甚だしい　時代:平安時代　種別:古文単語

いみじ (いみじ)

最重要

はなはだしい・すばらしい

平安時代 / 古文単語

解説

「いみじ」は「はなはだしい」「すばらしい」「ひどい」の意。程度の激しさを表す最重要語。良い意味でも悪い意味でも使う。「いみじう」の形で副詞化。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

はなはだしい　すばらしい　ひどい　程度　時代:平安時代　種別:古文単語

めでたし (めでたし)

すばらしい・立派だ

平安時代 / 古文単語

解説

「めでたし」は「すばらしい」「立派だ」「喜ばしい」の意。賞賛や祝福を表す。「めでたきこと」などの形。現代語の「めでたい」の語源。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

すばらしい　立派　喜ばしい　現代語語源　時代:平安時代　種別:古文単語

うつくし (うつくし)

かわいい・美しい

平安時代 / 古文単語

解説

「うつくし」は「かわいい」「美しい」「いとしい」の意。小さくてかわいらしいものを表す。現代語の「美しい」とは異なる。「うつくしきもの」などの形。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

かわいい　小さい　いとしい　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文単語

わびし (わびし)

つらい・侘しい

平安時代 / 古文単語

解説

「わびし」は「つらい」「侘しい」「みじめだ」の意。精神的・物質的な困窮を表す。「わびしき心」などの形。「わび」の美意識の源。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

つらい　侘しい　みじめ　わび　時代:平安時代　種別:古文単語

ありがたし (ありがたし)

めったにない・珍しい

平安時代 / 古文単語

解説

「ありがたし」は「めったにない」「珍しい」「すばらしい」の意。「有り難し」が語源。稀少性を表す。現代語の「ありがたい」とはニュアンスが異なる。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

めったにない　珍しい　すばらしい　有り難し　時代:平安時代　種別:古文単語

なまめかし (なまめかし)

優美だ・上品だ

平安時代 / 古文単語

解説

「なまめかし」は「優美だ」「上品だ」「若々しい」の意。洗練された美しさを表す。「なまめかしき姿」などの形。王朝貴族の理想的美意識。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

優美 上品 若々しい 王朝美意識 時代:平安時代 種別:古文単語

あてなり (あてなり)

上品だ・高貴だ

平安時代 / 古文単語

解説

「あてなり」は「上品だ」「高貴だ」「優雅だ」の意。「貴なり」と書く。身分の高さや品格を表す。「あてなる人」などの形。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

上品 高貴 優雅 貴なり 時代:平安時代 種別:古文単語

きよげなり (きよげなり)

上品だ・美しい

平安時代 / 古文単語

解説

「きよげなり」は「上品だ」「美しい」「清らかだ」の意。清潔で端正な美しさを表す。「きよげなる姿」などの形。視覚的な美を強調。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

上品 美しい 清らか 視覚的美 時代:平安時代 種別:古文単語

めづらし (めずらし)

珍しい・新鮮だ

平安時代 / 古文単語

解説

「めづらし」は「珍しい」「新鮮だ」「すばらしい」の意。現代語とほぼ同じだが賞賛の意味も含む。「めづらしき花」などの形。滅多にないものへの評価。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

珍しい　新鮮　すばらしい　賞賛　時代:平安時代　種別:古文単語

ねんごろなり (ねんごろなり)

心がこもっている・親しい

平安時代 / 古文単語

解説

「ねんごろなり」は「心がこもっている」「親しい」「熱心だ」の意。「懇ろ」と書く。「ねんごろに語らふ」などの形。誠実で丁寧な様子を表す。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

心がこもる　親しい　熱心　誠実　時代:平安時代　種別:古文単語

はかなし (はかなし)

頼りない・むなしい

平安時代 / 古文単語

解説

「はかなし」は「頼りない」「むなしい」「はかない」の意。「果無し」が語源。一時的で消え去りやすいものを表す。無常観を示す重要語。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

頼りない　むなしい　はかない　無常観　時代:平安時代　種別:古文単語

たのもし (たのもし)

頼もしい・心強い

平安時代 / 古文単語

解説

「たのもし」は「頼もしい」「心強い」「信頼できる」の意。現代語とほぼ同じ。「たのもしき人」などの形。信頼感を表す重要語。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

頼もしい　心強い　信頼できる　現代語同じ　時代:平安時代　種別:古文単語

こころづきなし (こころずきなし)

気に入らない・不愉快だ

平安時代 / 古文単語

解説

「こころづきなし」は「気に入らない」「不愉快だ」「気にくわない」の意。心が引かれない、の意。「心憂し」より軽い否定的感情。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

気に入らない　不愉快　気にくわない　否定感情　時代:平安時代　種別:古文単語

こころうし (こころうし)

つらい・いやだ

平安時代 / 古文単語

解説

「こころうし」は「つらい」「いやだ」「情けない」の意。「心憂し」と書く。心が痛む、の意。強い精神的苦痛を表す。「こころうく思ふ」の形。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

つらい　いやだ　情けない　精神的苦痛　時代:平安時代　種別:古文単語

すさまじ (すさまじ)

興ざめだ・殺風景だ

平安時代 / 古文単語

解説

「すさまじ」は「興ざめだ」「殺風景だ」「がっかりだ」の意。期待外れや白けた気持ちを表す。枕草子「すさまじきもの」の段が有名。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

興ざめ　殺風景　がっかり　枕草子　時代:平安時代　種別:古文単語

ゆゆし (ゆゆし)

恐ろしい・不吉だ

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆゆし」は「恐ろしい」「不吉だ」「はなはだしい」の意。忌み嫌うべきもの、神聖で近づきがたいものを表す。「ゆゆしき御夢」などの形。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

恐ろしい　不吉　はなはだしい　神聖　時代:平安時代　種別:古文単語

おろかなり (おろかなり)

いいかげんだ・並大抵でない

平安時代 / 古文単語

解説

「おろかなり」は「いいかげんだ」「並大抵でない」の意。二つの正反対の意味を持つ。文脈判断が必要。「おろかならず」は並大抵でない、の意。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

いいかげん　並大抵でない　二義　文脈判断　時代:平安時代　種別:古文単語

たいだいし (たいだいし)

いいかげんだ・粗略だ

平安時代 / 古文単語

解説

「たいだいし」は「いいかげんだ」「粗略だ」「無造作だ」の意。「大々し」が語源。軽率でいいかげんな様子を表す。否定的評価。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

いいかげん　粗略　無造作　軽率　時代:平安時代　種別:古文単語

こころにくし (こころにくし)

奥ゆかしい・上品だ

平安時代 / 古文単語

解説

「こころにくし」は「奥ゆかしい」「上品だ」「心惹かれる」の意。心が遠い、の意から。すべてを見せない品格を表す。平安貴族の美意識。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

奥ゆかしい　上品　心惹かれる　品格　時代:平安時代　種別:古文単語

らうたし (らうたし)

かわいい・いとしい

平安時代 / 古文単語

解説

「らうたし」は「かわいい」「いとしい」「愛らしい」の意。「うつくし」より強い愛情を表す。子供や小動物への愛情表現。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

かわいい　いとしい　愛らしい　強い愛情　時代:平安時代　種別:古文単語

まばゆし (まばゆし)

まぶしい・きらびやかだ

平安時代 / 古文単語

解説

「まばゆし」は「まぶしい」「きらびやかだ」「見事すぎて見ていられない」の意。現代語とほぼ同じ。「まばゆき光」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

まぶしい　きらびやか　見事　現代語同じ　時代:平安時代　種別:古文単語

はづかし (はずかし)

立派だ・気後れする

平安時代 / 古文単語

解説

「はづかし」は「立派だ」「気後れする」「恥ずかしい」の意。相手が優れていて自分が気後れする、の意が原義。現代語の「恥ずかしい」とは微妙に異なる。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

立派 気後れ 恥ずかしい 現代語と違う 時代:平安時代 種別:古文単語

こころぐるし (こころぐるし)

気の毒だ・心苦しい

平安時代 / 古文単語

解説

「こころぐるし」は「気の毒だ」「心苦しい」「かわいそうだ」の意。「心苦し」と書く。同情や罪悪感を表す。「いとほし」と類義。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

気の毒 | 心苦しい | かわいそう | 同情 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

あぢきなし (あじきなし)

つまらない・どうしようもない

平安時代 / 古文単語

解説

「あぢきなし」は「つまらない」「どうしようもない」「無益だ」の意。価値がない、の意。「あぢきなく思ふ」などの形。無力感を表す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

つまらない | どうしようもない | 無益 | 無力感 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

びんなし (びんなし)

都合が悪い・具合が悪い

平安時代 / 古文単語

解説

「びんなし」は「都合が悪い」「具合が悪い」「不適当だ」の意。「便無し」が語源。状況に適していない様子を表す。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

都合悪い　具合悪い　不適当　便無し　時代:平安時代　種別:古文単語

いたづらなり (いたずらなり)

むだだ・何もしない

平安時代 / 古文単語

解説

「いたづらなり」は「むだだ」「何もしない」「無益だ」の意。「徒らなり」と書く。効果がない、無駄に過ごす、の意。「いたづらに月日を送る」などの形。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

むだ　何もしない　無益　徒らなり　時代:平安時代　種別:古文単語

あながちなり (あながちなり)

強引だ・むやみに

平安時代 / 古文単語

解説

「あながちなり」は「強引だ」「むやみに」「一途だ」の意。「強ちなり」と書く。無理に押し通す様子。副詞的に「あながちに」の形も。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

強引　むやみに　一途　無理に　時代:平安時代　種別:古文単語

ゆへあり (ゆえあり)

由緒がある・事情がある

平安時代 / 古文単語

解説

「ゆへあり」は「由緒がある」「事情がある」「風流だ」の意。「故あり」「由あり」と書く。「ゆへある人」は教養ある人の意。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

由緒 事情 風流 教養 時代:平安時代 種別:古文単語

なさけあり (なさけあり)

思いやりがある・風流だ

平安時代 / 古文単語

解説

「なさけあり」は「思いやりがある」「風流だ」「情趣を解する」の意。「情あり」と書く。人情と風流心の両方を含む。平安貴族の理想。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

思いやり 風流 情趣 人情 時代:平安時代 種別:古文単語

なさけなし (なさけなし)

無情だ・無風流だ

平安時代 / 古文単語

解説

「なさけなし」は「無情だ」「無風流だ」「冷淡だ」の意。思いやりも風流心もない様子。「なさけあり」の対義語。強い非難を含む。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

無情 無風流 冷淡 なさけあり対義 時代:平安時代 種別:古文単語

つきづきし (つきずきし)

ふさわしい・似合っている

平安時代 / 古文単語

解説

「つきづきし」は「ふさわしい」「似合っている」「釣り合いが取れている」の意。「付き付きし」が語源。調和の取れた美しさを表す。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

ふさわしい 似合う 釣り合い 調和 時代:平安時代 種別:古文単語

うるはし (うるわし)

端正だ・きちんとしている

平安時代 / 古文単語

解説

「うるはし」は「端正だ」「きちんとしている」「几帳面だ」の意。「麗し」と書く。形式的な美しさ。「うるはしくもてなす」などの形。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

端正 | きちんと | 几帳面 | 形式美 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

あさし (あさし)

浅い・薄い

平安時代 / 古文単語

解説

「あさし」は「浅い」「薄い」「軽薄だ」の意。現代語とほぼ同じ。物理的深さと心の浅さの両方を表す。「浅き心」などの形。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

浅い　薄い　軽薄　現代語同じ　時代:平安時代　種別:古文単語

ふかし (ふかし)

深い・濃い

平安時代 / 古文単語

解説

「ふかし」は「深い」「濃い」「親しい」の意。現代語とほぼ同じ。物理的深さと情の深さの両方。「深き契り」などの形。「あさし」の対義語。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

深い　濃い　親しい　あさし対義　時代:平安時代　種別:古文単語

おもし (おもし)

趣がある・味わい深い

平安時代 / 古文単語

解説

「おもし」は「趣がある」「味わい深い」「重々しい」の意。「重し」が語源。落ち着いた趣を表す。「おもしろし」とは別。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

趣がある　味わい深い　重々しい　おもしろし別　時代:平安時代　種別:古文単語

おもしろし (おもしろし)

興味深い・明るく広々としている

平安時代 / 古文単語

解説

「おもしろし」は「興味深い」「明るく広々としている」「愉快だ」の意。「面白し」と書く。視界が開ける感じが原義。現代語より広い意味。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

興味深い　広々　愉快　視界開ける　時代:平安時代　種別:古文単語

おどろく (おどろく)

最重要

目を覚ます・気づく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おどろく」は「目を覚ます」「気づく」「驚く」の意。現代語の「驚く」より「目覚める」の意が強い。「音におどろく」などの形。古文最重要動詞の一つ。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

目を覚ます　気づく　驚く　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

わぶ (わぶ)

困る・つらい思いをする

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「わぶ」は「困る」「つらい思いをする」「嘆く」の意。精神的・物質的困窮を表す。「わびしげなり」などの形。「わび」の語源。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

困る　つらい　嘆く　わび語源　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

ながむ (ながむ)

物思いに沈む・ぼんやり眺める

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「ながむ」は「物思いに沈む」「ぼんやり眺める」の意。単に見るのではなく、思いにふけりながら眺める様子。「空をながむ」などの形。古文の情緒表現。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

物思い　ぼんやり　眺める　情緒　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あかす (あかす)

頻出

飽きない・満足しない

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あかす」は「飽きない」「満足しない」の意。「飽かす」と書く。満足できずにもっと求める様子。「見あかす」などの形で頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

飽きない　満足しない　もっと　飽かす　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あく (あく)

満足する・飽きる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あく」は「満足する」「飽きる」の意。「飽く」と書く。「あかす」の対。「見飽く」「聞き飽く」などの形。十分に堪能する意味。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

満足する　飽きる　堪能　あかす対　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

まどふ (まどふ)

途方に暮れる・迷う

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「まどふ」は「途方に暮れる」「迷う」「困惑する」の意。「惑ふ」と書く。現代語とほぼ同じ。精神的な混乱を表す。「心まどふ」などの形。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

途方に暮れる　迷う　困惑　惑ふ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

わたる (わたる)

頻出

続く・〜していく

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「わたる」は「続く」「〜していく」「ずっと〜する」の意。動作の継続を表す補助動詞。「降りわたる」「鳴きわたる」などの形で頻出。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

続く　継続　補助動詞　ずっと　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おこなふ (おこなう)

仏道修行をする・勤行する

平安〜鎌倉時代 / 古文重要動詞

解説

「おこなふ」は「仏道修行をする」「勤行する」の意。現代語の「行う」より宗教的な意味が強い。「行ふ」と書く。僧侶の修行を指す。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

仏道修行 勤行 宗教的 僧侶 時代:平安〜鎌倉時代 種別:古文重要動詞

とぶらふ（とぶらう）

訪ねる・見舞う

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「とぶらふ」は「訪ねる」「見舞う」「弔問する」の意。「訪ふ」と書く。人を尋ねる、安否を気遣う意味。「とぶらひに来る」などの形。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

訪ねる　見舞う　弔問　訪ふ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

ののしる (ののしる)

大声で騒ぐ・評判になる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「ののしる」は「大声で騒ぐ」「評判になる」の意。現代語の「罵る」とは異なる。世間で話題になる様子。「世にののしる」などの形。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

大声で騒ぐ　評判　話題　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おぼゆ (おぼゆ)

思われる・似ている

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おぼゆ」は「思われる」「似ている」「覚える」の意。自然に心に浮かぶ、の意。「覚ゆ」と書く。「思ふ」の自発形的な意味。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

思われる　似ている　覚える　自発　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

いらふ (いらう)

答える・応じる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「いらふ」は「答える」「応じる」の意。「答ふ」「応ふ」と書く。相手の言葉に反応する様子。「問ひにいらふ」などの形。返答を表す。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

答える　応じる　返答　答ふ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

そうず (そうず)

そうする・そうである

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「そうず」は「そうする」「そうである」の意。サ変動詞「す」に「さう」が付いた形。「然うす」が語源。指示内容を受ける。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

そうする　そうである　然うす　指示　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

たまふ (たまう)

最頻出

お与えになる・〜なさる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たまふ」は尊敬語で「お与えになる」「〜なさる」の意。補助動詞として「〜なさる」の意でも使う。「賜ふ」「給ふ」と書く。最頻出の尊敬語。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

尊敬語 お与えになる なさる 最頻出 時代:平安時代 種別:古文敬語

きこゆ (きこゆ)

申し上げる・お聞こえになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「きこゆ」は謙譲語で「申し上げる」の意。尊敬語で「お聞こえになる」の意もある。「聞こゆ」と書く。謙譲と尊敬の両方の用法がある重要語。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

謙譲語 尊敬語 申し上げる 聞こえる 時代:平安時代 種別:古文敬語

はべり (はべり)

頻出

あります・ございます

平安時代 / 古文敬語

解説

「はべり」は丁寧語で「あります」「ございます」「お仕えする」の意。「侍り」と書く。「あり」の丁寧語。会話文に頻出。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

丁寧語 | あります | ございます | 侍り | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

さぶらふ (さぶらう)

お仕えする・おります

平安時代 / 古文敬語

解説

「さぶらふ」は謙譲語で「お仕えする」「おります」の意。「候ふ」と書く。貴人の近くに控える意味。「はべり」より古風。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

謙譲語 | お仕えする | おります | 候ふ | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

おはす (おわす)

最重要

いらっしゃる・おいでになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはす」は尊敬語で「いらっしゃる」「おいでになる」「おられる」の意。「御座す」と書く。「あり」「をり」「行く」「来」の尊敬語。最重要尊敬語。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

尊敬語 いらっしゃる おいでになる 御座す 時代:平安時代 種別:古文敬語

まかる (まかる)

退出する・参る

平安時代 / 古文敬語

解説

「まかる」は謙譲語で「退出する」「参る」の意。「罷る」と書く。貴人の前から退く意味。「行く」の謙譲語としても使う。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語 退出する 参る 罷る 時代:平安時代 種別:古文敬語

まかづ (まかず)

退出させる・お帰しになる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まかづ」は「退出させる」「お帰しになる」の意。「まかる」の使役形。「罷づ」と書く。貴人が人を退出させる意味。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

退出させる　帰す　使役　罷づ　時代:平安時代　種別:古文敬語

まゐる (まいる)

最頻出

参上する・差し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「まゐる」は謙譲語で「参上する」「差し上げる」の意。「参る」と書く。「行く」「来」「食ふ」「飲む」などの謙譲語。最頻出謙譲語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 参上する 差し上げる 参る 時代:平安時代 種別:古文敬語

たてまつる (たてまつる)

最重要

差し上げる・申し上げる

平安時代 / 古文敬語

解説

「たてまつる」は謙譲語で「差し上げる」「申し上げる」の意。「奉る」と書く。「〜してさしあげる」の補助動詞としても頻出。最重要謙譲語。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

謙譲語 差し上げる 申し上げる 奉る 時代:平安時代 種別:古文敬語

けり (けり)

最重要

〜た・〜たなあ

平安時代 / 助動詞

解説

「けり」は過去・詠嘆の助動詞。「〜た」「〜たなあ」の意。ラ変型活用。連用形接続。伝聞過去や詠嘆を表す。最重要助動詞の一つ。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 詠嘆 助動詞 伝聞過去 時代:平安時代 種別:助動詞

き (き)

〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「き」は過去の助動詞。「〜た」の意。特殊型活用。連用形接続。直接過去(自分が体験した過去)を表す。「けり」(伝聞過去)と対比される重要助動詞。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

過去 直接過去 体験 けりと対 時代:平安時代 種別:助動詞

つ（つ）

〜てしまった・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「つ」は完了の助動詞。「〜てしまった」「〜た」の意。下二段型活用。連用形接続。強い完了・確述を表す。「ぬ」と対で重要助動詞。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

完了　確述　てしまった　強意　時代:平安時代　種別:助動詞

ぬ（ぬ）

〜てしまった・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「ぬ」は完了の助動詞。「〜てしまった」「〜た」の意。ナ変型活用。連用形接続。完了・確述を表す。「つ」と対。打消の「ず」の連体形とは別。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

完了　確述　てしまった　つと対　時代:平安時代　種別:助動詞

たり (たり)

〜ている・〜だ

平安時代 / 助動詞

解説

「たり」は完了・存続の助動詞。「〜ている」「〜だ」の意。ラ変型活用。連用形(音便)接続。状態の継続を表す。「咲きたり」などの形。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

完了 存続 ている 音便接続 時代:平安時代 種別:助動詞

り（り）

〜ている・〜た

平安時代 / 助動詞

解説

「り」は完了・存続の助動詞。「〜ている」「〜た」の意。ラ変型活用。サ変の未然形・四段の已然形に接続。特殊な接続をする助動詞。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

完了　存続　ている　特殊接続　時代:平安時代　種別:助動詞

ず（ず）

最重要

〜ない

平安時代 / 助動詞

解説

「ず」は打消の助動詞。「〜ない」の意。特殊型活用。未然形接続。連体形は「ぬ」、已然形は「ね」。打消表現として最重要。「〜ず」「〜ぬ」「〜ね」の使い分けに注意。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

打消　ない　ぬね　未然形接続　時代:平安時代　種別:助動詞

む (む)

最重要

〜だろう・〜よう

平安時代 / 助動詞

解説

「む」は推量・意志・勧誘・仮定・婉曲の助動詞。「〜だろう」「〜よう」の意。特殊型活用。未然形接続。多義的な最重要助動詞。現代語の「う・よう」の原型。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

推量 意志 勧誘 仮定婉曲 時代:平安時代 種別:助動詞

むず (むず)

〜にちがいない・きっと〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「むず」は推量の助動詞。「〜にちがいない」「きっと〜だろう」の意。サ変型活用。終止形接続。「む」+「す」の融合。強い推量を表す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 にちがいない 強意 むとす 時代:平安時代 種別:助動詞

べし (べし)

最重要

〜するべきだ・〜だろう

平安時代 / 助動詞

解説

「べし」は推量・当然・義務・命令・可能・意志の助動詞。「〜するべきだ」「〜だろう」の意。特殊型活用。終止形接続(ラ変は連体形)。多義的な最重要助動詞。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推量 当然 義務 命令可能意志 時代:平安時代 種別:助動詞

まし (まし)

〜だろうに・〜ただろう

平安時代 / 助動詞

解説

「まし」は反実仮想の助動詞。「〜だろうに」「〜ただろう」の意。特殊型活用。未然形接続。事実に反する仮定や後悔を表す。「ましかば〜まし」の形。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

反実仮想 だろうに 仮定 後悔 時代:平安時代 種別:助動詞

まほし (まほし)

〜たい・〜てほしい

平安時代 / 助動詞

解説

「まほし」は希望の助動詞。「〜たい」「〜てほしい」の意。形容詞型活用。未然形接続。話し手の願望を表す。「見まほし」「聞きまほし」の形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

希望 たい 願望 未然形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

たし (たし)

〜たい

平安時代 / 助動詞

解説

「たし」は希望の助動詞。「〜たい」の意。形容詞型活用。連用形接続。「まほし」より口語的。「見たし」「聞きたし」などの形で願望を表す。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

希望 たい 口語的 連用形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

らし (らし)

〜らしい・〜ようだ

平安時代 / 助動詞

解説

「らし」は推定の助動詞。「〜らしい」「〜ようだ」の意。形容詞型活用の一部のみ。終止形接続。客観的な根拠に基づく推定を表す。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

推定 らしい 客観的根拠 終止形接続 時代:平安時代 種別:助動詞

めり (めり)

〜ようだ・〜らしい

平安時代 / 助動詞

解説

「めり」は推定の助動詞。「〜ようだ」「〜らしい」の意。ラ変型活用。終止形接続。視覚的な根拠に基づく推定。「見+あり」が語源。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

推定 ようだ 視覚的 見あり 時代:平安時代 種別:助動詞

なり(伝聞) (なり)

〜そうだ・〜と聞こえる

平安時代 / 助動詞

解説

「なり」は伝聞・推定の助動詞。「〜そうだ」「〜と聞こえる」の意。ラ変型活用。終止形接続。「音+なり」で伝聞。断定の「なり」とは別。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

伝聞 推定 そうだ 音なり 時代:平安時代 種別:助動詞

なり(断定) (なり)

〜だ・〜である

平安時代 / 助動詞

解説

「なり」は断定の助動詞。「〜だ」「〜である」の意。ラ変型活用。体言・連体形に接続。現代語の「だ」「です」に相当。伝聞の「なり」とは別。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

断定 だ 体言接続 である 時代:平安時代 種別:助動詞

たり(断定) (たり)

〜だ・〜である

平安時代 / 助動詞

解説

「たり」は断定の助動詞。「〜だ」「〜である」の意。ラ変型活用。体言に接続。「と+あり」が語源。「なり」より古い断定表現。完了の「たり」とは別。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

断定 だ とあり 体言接続 時代:平安時代 種別:助動詞

る（る）

最重要

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「る」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。多義語として最重要。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

受身　尊敬　自発　可能　時代:平安時代　種別:助動詞

らる (らる)

〜れる・〜られる

平安時代 / 助動詞

解説

「らる」は受身・尊敬・自発・可能の助動詞。「〜れる」「〜られる」の意。下二段型活用。未然形接続(上一・上二・下一・下二・サ変)。「る」と同義で接続が異なる。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

受身 尊敬 自発 可能 時代:平安時代 種別:助動詞

す (す)

〜せる・〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「す」は使役・尊敬の助動詞。「〜せる」「〜させる」の意。サ変型活用。未然形接続(四段・ナ変・ラ変)。使役が主で尊敬は稀。「言はす」「泣かす」の形。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

使役 尊敬 せる 四段ナ変ラ変 時代:平安時代 種別:助動詞

さす (さす)

〜せる・〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「さす」は使役・尊敬の助動詞。「〜せる」「〜させる」の意。サ変型活用。未然形接続(上一・上二・下一・下二・サ変)。「す」と同義で接続が異なる。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

使役 尊敬 せる 上下二段サ変 時代:平安時代 種別:助動詞

しむ (しむ)

〜させる

平安時代 / 助動詞

解説

「しむ」は使役の助動詞。「〜させる」の意。下二段型活用。未然形接続。「す・さす」と同じ使役だが接続が異なる。古語では稀。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

使役 | させる | 下二段 | 未然形接続 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

じ (じ)

〜まい・〜ないつもりだ

平安時代 / 助動詞

解説

「じ」は打消推量・打消意志の助動詞。「〜まい」「〜ないつもりだ」の意。特殊型活用。未然形接続。「む」の打消形として重要。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

打消推量 | 打消意志 | まい | む打消 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

まじ (まじ)

〜ないだろう・〜べきでない

平安時代 / 助動詞

解説

「まじ」は打消推量・打消当然の助動詞。「〜ないだろう」「〜べきでない」の意。形容詞型活用。終止形接続。「べし」の打消形として重要。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

打消推量 | べきでない | べし打消 | 形容詞型 | 時代:平安時代 | 種別:助動詞

竹取物語 (たけとりものがたり)

日本最古の物語

平安時代初期 / 古典作品

解説

「竹取物語」は日本最古の物語文学。かぐや姫の物語として有名。平安時代初期成立。作者未詳。「物語の出で来はじめの祖」と評される。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

かぐや姫 | 最古の物語 | 平安初期 | 作者未詳 | 時代:平安時代初期 | 種別:古典作品

伊勢物語 (いせものがたり)

在原業平の歌物語

平安時代初期 / 古典作品

解説

「伊勢物語」は在原業平を主人公とする歌物語。全125段。和歌を中心とした短編集。「昔男ありけり」で始まる各段が有名。恋愛を主題とする。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

在原業平 | 歌物語 | 昔男 | 恋愛 | 時代:平安時代初期 | 種別:古典作品

土佐日記 (とさにっき)

紀貫之の日記文学

平安時代中期 / 古典作品

解説

「土佐日記」は紀貫之が仮名で書いた日記文学。「男もすなる日記といふものを」で始まる。女性視点で書かれた最初の仮名日記。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

紀貫之 | 仮名日記 | 男もすなる | 女性視点 | 時代:平安時代中期 | 種別:古典作品

枕草子 (まくらのそうし)

清少納言の随筆

平安時代中期 / 古典作品

解説

「枕草子」は清少納言の随筆文学。「春はあけぼの」で始まる。をかしの文学の代表。宮廷生活を鋭い観察眼で描く。約300段。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

清少納言 春はあけぼの をかし 随筆 時代:平安時代中期 種別:古典作品

源氏物語 (げんじものがたり)

紫式部の長編小説

平安時代中期 / 古典作品

解説

「源氏物語」は紫式部による世界最古の長編小説。光源氏の生涯と恋愛を描く全54帖。「もののあわれ」の文学の最高峰。日本文学の最高傑作。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

紫式部 光源氏 もののあわれ 長編小説 時代:平安時代中期 種別:古典作品

更級日記 (さらしなにっき)

菅原孝標女の日記

平安時代後期 / 古典作品

解説

「更級日記」は菅原孝標女の回想的日記文学。源氏物語への憧れから始まる。「あづまぢの道のはてよりも」で始まる。女性の内面を描く。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

菅原孝標女 | 源氏物語憧れ | 回想的日記 | 女性内面 | 時代:平安時代後期 | 種別:古典作品

大鏡 (おおかがみ)

歴史物語

平安時代後期 / 古典作品

解説

「大鏡」は歴史物語の代表作。藤原道長の栄華を中心に摂関政治を描く。「鏡物」の最初。二人の老人の対話形式。紀伝体で書かれる。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

藤原道長 | 歴史物語 | 鏡物 | 対話形式 | 時代:平安時代後期 | 種別:古典作品

今昔物語集 (こんじゃくものがたりしゅう)

説話集

平安時代後期 / 古典作品

解説

「今昔物語集」は日本最大の説話集。全31巻(現存28巻)。「今は昔」で始まる約千話を収録。仏教説話・世俗説話を含む。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

説話集 | 今は昔 | 仏教説話 | 世俗説話 | 時代:平安時代後期 | 種別:古典作品

平家物語 (へいけものがたり)

軍記物語

鎌倉時代 / 古典作品

解説

「平家物語」は平氏の興亡を描いた軍記物語。「祇園精舎の鐘の声」で始まる。琵琶法師により語られた。無常観を描く。全12巻。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

平氏興亡　祇園精舎　軍記物語　琵琶法師　時代:鎌倉時代　種別:古典作品

徒然草 (つれづれぐさ)

兼好法師の随筆

鎌倉時代 / 古典作品

解説

「徒然草」は兼好法師(吉田兼好)の随筆。「つれづれなるままに」で始まる。全243段。人生観・無常観を記す。枕草子と並ぶ随筆の双璧。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

兼好法師 | つれづれなるままに | 随筆 | 人生観 | 時代:鎌倉時代 | 種別:古典作品

方丈記 (ほうじょうき)

鴨長明の随筆

鎌倉時代 / 古典作品

解説

「方丈記」は鴨長明の随筆。「ゆく河の流れは絶えずして」で始まる。無常観を哲学的に描く。五大災厄を記録。隠遁生活を語る。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

鴨長明 | ゆく河の流れ | 無常観 | 隠遁 | 時代:鎌倉時代 | 種別:古典作品

奥の細道 (おくのほそみち)

松尾芭蕉の紀行文

江戸時代 / 古典作品

解説

「奥の細道」は松尾芭蕉の俳諧紀行文。「月日は百代の過客にして」で始まる。東北・北陸の旅を俳句と散文で記録。俳文学の最高峰。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

松尾芭蕉 | 月日は百代の過客 | 俳諧紀行 | 俳文学 | 時代:江戸時代 | 種別:古典作品

古今和歌集 (こきんわかしゅう)

最初の勅撰和歌集

平安時代初期 / 古典作品

解説

「古今和歌集」は最初の勅撰和歌集。紀貫之らが撰者。仮名序と真名序を持つ。約1100首収録。六歌仙・三十六歌仙の歌を多く含む。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

勅撰和歌集 | 紀貫之 | 仮名序 | 六歌仙 | 時代:平安時代初期 | 種別:古典作品

春はあけぼの (はるはあけぼの)

枕草子冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「春はあけぼの」は枕草子の有名な冒頭文。四季の美しさを簡潔に表現。「やうやう白くなりゆく山ぎは」と続く。をかしの美意識の典型。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

枕草子 清少納言 をかし 四季 時代:平安時代中期 種別:名文句

祇園精舎の鐘の声 (ぎおんしょうじゃのかねのこえ)

平家物語冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」は平家物語の冒頭。仏教的無常観を表現。盛者必衰の理を説く。日本文学屈指の名文。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

平家物語 無常観 盛者必衰 諸行無常 時代:鎌倉時代 種別:名文句

ゆく河の流れは絶えずして (ゆくかわのながれはたえずして)

方丈記冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」は方丈記の冒頭。無常の理を河の流れに喩える。哲学的な無常観の表現。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

方丈記 鴨長明 無常観 河の流れ 時代:鎌倉時代 種別:名文句

つれづれなるままに (つれづれなるままに)

徒然草冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて」は徒然草の冒頭。退屈な時間に物を書く動機を語る。随筆文学の名文。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

徒然草 兼好法師 退屈 随筆 時代:鎌倉時代 種別:名文句

月日は百代の過客にして (つきひはひゃくだいのかかくにして)

奥の細道冒頭

江戸時代 / 名文句

解説

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也」は奥の細道の冒頭。時間の流れを旅に喩える。人生を旅と捉える哲学。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

奥の細道 | 松尾芭蕉 | 時間 | 旅人 | 時代:江戸時代 | 種別:名文句

いとをかし (いとおかし)

頻出

たいそう趣がある

平安時代 / 古文表現

解説

「いとをかし」は「をかし」の強調形。「いと」(たいそう)+「をかし」(趣がある)。枕草子に頻出する表現。知的で明るい美の評価。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

をかし | 強調 | 枕草子 | 知的美 | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

あはれなり (あわれなり)

頻出

しみじみとしている

平安時代 / 古文表現

解説

「あはれなり」は「あはれ」の形容動詞形。しみじみとした情趣を表す。源氏物語に頻出。平安貴族の美意識の中核概念。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

あはれ　もののあわれ　源氏物語　美意識　時代:平安時代　種別:古文表現

かたはらいたし (かたわらいたし)

そばにいて恥ずかしい

平安時代 / 古文表現

解説

「かたはらいたし」は「そばにいて恥ずかしい」「見ていられない」の意。他人の失態を見て自分も恥ずかしい気持ち。現代語の「片腹痛い」とは異なる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

恥ずかしい　見ていられない　他人の失態　現代語と違う　時代:平安時代　種別:古文表現

心もとなし (こころもとなし)

待ち遠しい・不安だ

平安時代 / 古文表現

解説

「心もとなし」は「待ち遠しい」「不安だ」「はっきりしない」の意。心が落ち着かない様子。「おぼつかなし」と類義だが、より強い焦燥感。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

待ち遠しい　不安　はっきりしない　焦燥感　時代:平安時代　種別:古文表現

あやし (あやし)

不思議だ・粗末だ

平安時代 / 古文表現

解説

「あやし」は「不思議だ」「粗末だ」「身分が低い」の意。多義的な語。「あやしの者」は身分の低い人。文脈で意味を判断する必要がある。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

不思議　粗末　身分低い　多義語　時代:平安時代　種別:古文表現

うつくしげなり (うつくしげなり)

かわいらしそうだ

平安時代 / 古文表現

解説

「うつくしげなり」は「かわいらしそうだ」「愛らしく見える」の意。「うつくし」に様態の「げなり」が付いた形。外見の評価。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

かわいらしい　愛らしい　様態　外見　時代:平安時代　種別:古文表現

いみじう (いみじう)

最頻出

たいそう・はなはだしく

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう」は「いみじ」の連用形で副詞。「たいそう」「はなはだしく」の意。程度の強さを表す最頻出副詞。「いみじう泣く」「いみじう喜ぶ」など。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

たいそう　はなはだしく　程度副詞　最頻出　時代:平安時代　種別:古文表現

いかにもいかにも (いかにもいかにも)

どうかどうか・何とか

平安時代 / 古文表現

解説

「いかにもいかにも」は「どうかどうか」「何とか」「ぜひとも」の意。「いかに」の繰り返しで強調。強い願望や懇願を表す。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

どうか　何とか　ぜひとも　強調　時代:平安時代　種別:古文表現

給ふ (たまう)

最重要

尊敬・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「給ふ」は最重要の敬語動詞。本動詞では「与える」「お与えになる」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き、尊敬語「〜なさる」または謙譲語「〜申し上げる」の意。主語によって意味が変わる。文脈判断が必須。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

敬語 尊敬 謙譲 補助動詞 多義 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

奉る (たてまつる)

頻出

謙譲語・差し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「奉る」は謙譲語の代表的動詞。本動詞では「差し上げる」「献上する」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き「〜申し上げる」の意。必ず謙譲の意味。「手紙を奉る」「申し奉る」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

謙譲語 | 差し上げる | 献上 | 補助動詞 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

聞こゆ (きこゆ)

謙譲語・申し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「聞こゆ」は謙譲語の重要動詞。本動詞では「申し上げる」「お聞かせする」の意。補助動詞として動詞の連用形に付き「〜申し上げる」の意。「奉る」より丁寧度が低い。「言ひ聞こゆ」「見え聞こゆ」の形。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

謙譲語 | 申し上げる | 補助動詞 | 丁寧度 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

申す (もうす)

頻出

謙譲語・申す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「申す」は謙譲語の基本動詞。「言ふ」の謙譲語で「申す」「申し上げる」の意。「申し給ふ」で複合敬語になる。「かく申す」「名を申す」などの形で頻出。現代語にも継承された語。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

謙譲語 | 申す | 申し上げる | 言ふの謙譲 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

参る (まいる)

謙譲語・参上する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「参る」は謙譲語の動詞。本動詞では「参上する」「伺う」の意。「行く」「来」の謙譲語。補助動詞として「〜申し上げる」の意もある。「参り給ふ」で複合敬語。「宮に参る」などの形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

謙譲語 | 参上 | 行くの謙譲 | 来の謙譲 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

侍り (はべり)

丁寧語・ございます

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「侍り」は丁寧語の代表的動詞。「〜ございます」「〜です」の意。ラ変動詞。「あり」の丁寧語。補助動詞として動詞の連用形に付き丁寧の意を表す。「侍り」は主に男性が使用。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

丁寧語 | ございます | ラ変 | 補助動詞 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

候ふ（そうろう）

頻出

丁寧語・ございます

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

「候ふ」は丁寧語の動詞。「侍り」と同じく「〜ございます」の意。ハ行四段活用。中世以降に頻出。「さぶらふ」とも読む。武士の言葉として発達。「候へば」「候ひき」などの形。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

丁寧語 | ございます | 中世 | 武士言葉 | 時代:鎌倉時代以降 | 種別:古文重要動詞

おはす (おわす)

尊敬語・いらっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おはす」は尊敬語の重要動詞。「あり」「ゐる」「行く」「来」の尊敬語で「いらっしゃる」「おいでになる」の意。サ行変格活用。「おはします」がより高い敬意。「御前におはす」などの形。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

尊敬語　いらっしゃる　サ変　高敬語　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おはします (おわします)

最高敬語・いらっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おはします」は最高敬語の動詞。「おはす」に尊敬の助動詞「ます」が付いた形。天皇や皇族など最高位の人物に使用。「いらっしゃる」の最高敬語。「御所におはします」の形。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

最高敬語　天皇　皇族　複合敬語　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

のたまふ (のたまう)

頻出

尊敬語・おっしゃる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「のたまふ」は尊敬語の重要動詞。「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」「仰せになる」の意。ハ行四段活用。「のたまはく」で名詞句を作る。「かくのたまふ」「のたまひける」などの形で頻出。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

尊敬語　おっしゃる　言ふの尊敬　仰せ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

〜給ふ (〜たまう)

尊敬の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「給ふ」は動詞の連用形に付いて尊敬を表す。「〜なさる」「〜される」の意。「見給ふ」「聞き給ふ」「思ひ給ふ」など。文脈で尊敬か謙譲かを判断。動作の主体が高貴な人物なら尊敬。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

尊敬 補助動詞 接続 判断 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜奉る (〜たてまつる)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「奉る」は動詞の連用形に付いて謙譲を表す。「〜申し上げる」の意。「見奉る」「聞き奉る」「申し奉る」など。必ず謙譲の意味で使用。動作の対象が高貴な人物。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

謙譲 補助動詞 申し上げる 対象 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜聞こゆ (〜きこゆ)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「聞こゆ」は動詞の連用形に付いて謙譲を表す。「〜申し上げる」の意。「奉る」より丁寧度が低い。「見え聞こゆ」「言ひ聞こゆ」など。「お聞かせする」の意もある。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

謙譲 補助動詞 丁寧度低 お聞かせする 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

〜侍り (〜はべり)

頻出

丁寧の補助動詞

平安時代 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「侍り」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり侍り」「候侍り」など。男性語として使用される。会話文に頻出。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

丁寧 | 補助動詞 | 男性語 | 会話 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

〜候ふ (〜そうろう)

頻出

丁寧の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文重要動詞

解説

補助動詞「候ふ」は動詞の連用形に付いて丁寧を表す。「〜ございます」の意。「あり候ふ」「侍り候ふ」など。中世以降の武家社会で発達。書簡文に頻出。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

丁寧 補助動詞 武家 書簡 時代:鎌倉時代以降 種別:古文重要動詞

尊敬語の「れる・られる」 (れる・られる)

尊敬の助動詞

平安時代 / 古文敬語

解説

助動詞「れる・られる」は尊敬・受身・自発・可能の四つの意味を持つ。未然形に接続。文脈で尊敬かどうかを判断。主語が高貴な人物で動作主なら尊敬。「見られる」「言はれる」など。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

尊敬 助動詞 受身 自発 可能 識別 時代:平安時代 種別:古文敬語

絶対敬語と相対敬語 (絶対敬語・相対敬語)

敬語の分類

平安時代 / 古文敬語

解説

「絶対敬語」は天皇・皇族など特定の高貴な人物に対してのみ使う敬語。「相対敬語」は話し手と聞き手の上下関係で使い分ける敬語。平安時代は絶対敬語中心。鎌倉時代以降は相対敬語も発達。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

絶対敬語 相対敬語 分類 時代 時代:平安時代 種別:古文敬語

二方向の敬語 (二方向敬語)

複数方向への敬意

平安時代 / 古文敬語

解説

一つの文の中で複数の人物に対して敬意を表すこと。例えば動詞に尊敬語を使い、さらに補助動詞で謙譲を表すなど。「申し給ふ」「聞こえ給ふ」などが二方向の敬語の例。主語と対象の両方への敬意。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

二方向　複数敬意　複合　主語と対象　時代:平安時代　種別:古文敬語

敬語の識別（給ふの三用法） (たまうの識別)

頻出

給ふの意味判定

平安時代 / 古文敬語

解説

「給ふ」は本動詞「与える」、尊敬の補助動詞「〜なさる」、謙譲の補助動詞「〜申し上げる」の三つの用法がある。動詞の連用形に付けば補助動詞。主語が高貴なら尊敬、動作の対象が高貴なら謙譲。識別問題の頻出項目。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

識別 三用法 本動詞 尊敬 謙譲 時代:平安時代 種別:古文敬語

最高敬語（おはします） (おわします)

天皇への敬語

平安時代 / 古文敬語

解説

「おはします」は天皇や皇族など最高位の人物にのみ使う最高敬語。「おはす」に尊敬の助動詞「ます」が付いた二重敬語。一般の貴族には使わない。絶対敬語の典型例。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

最高敬語 | 天皇 | 二重敬語 | 絶対敬語 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

春はあけぼの (はるはあけぼの)

枕草子の冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、少し明かりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。」清少納言『枕草子』の有名な冒頭文。春の美しさを「あけぼの」に見出す。をかしの文学の代表。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

枕草子 | 清少納言 | をかし | 冒頭文 | 春 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

夏は夜 (なつはよる)

枕草子・四季の美

平安時代中期 / 名文句

解説

「夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、蛍の多く飛びちがひたる。」『枕草子』の春夏秋冬論の夏の部分。夏の美しさを夜に見出す。蛍の飛ぶ様子を描写。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

枕草子 | 清少納言 | 四季 | 夏 | 蛍 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

秋は夕暮れ (あきはゆうぐれ)

枕草子・四季の美

平安時代中期 / 名文句

解説

「秋は夕暮れ。夕日の差して山の端いと近うなりたるに、烏の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。」『枕草子』の秋の美。夕暮れ時の情趣を描く。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

枕草子 | 清少納言 | 四季 | 秋 | あはれ | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

冬はつとめて (ふゆはつとめて)

枕草子・四季の美

平安時代中期 / 名文句

解説

「冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るもいとつきづきし。」『枕草子』の冬の美。早朝の寒さと炭火の情景。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

枕草子 | 清少納言 | 四季 | 冬 | 早朝 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

つれづれなるままに (つれづれなるままに)

徒然草の冒頭

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」兼好法師『徒然草』の有名な冒頭文。無聊の中で随筆を書く動機を述べる。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

徒然草 兼好法師 冒頭文 無聊 随筆 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

祇園精舎の鐘の声 (ぎおんしょうじゃのかねのこえ)

平家物語の冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。」『平家物語』の有名な冒頭文。仏教の無常観を表す。平家一門の栄枯盛衰のテーマを示す。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

平家物語 冒頭文 無常観 諸行無常 盛者必衰 時代:鎌倉時代 種別:名文句

いづれの御時にか (いずれのおんときにか)

源氏物語の冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。」紫式部『源氏物語』の冒頭文。桐壺帝の時代を「いづれの御時にか」とぼかして始まる。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

源氏物語 紫式部 冒頭文 桐壺 更衣 時代:平安時代中期 種別:名文句

往ぬ (いぬ)

行ってしまう・死ぬ

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「往ぬ」は「行く」の強意形で「行ってしまう」「去る」の意。ナ行変格活用。完了・消滅のニュアンスを含む。「鳥も往ぬべし」などの形。「死ぬ」の意味もある。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

行く　去る　死ぬ　ナ変　完了　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

率る (ゐる)

連れて行く・引き連れる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「率る」は「連れて行く」「引き連れる」の意。上一段活用。「具す」と同義。人を伴う動作を表す。「子を率て行く」などの形。現代語「引率」の語源。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

連れて行く　引き連れる　上一段　具す　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

据う（すう）

座らせる・置く

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「据う」は「座らせる」「置く」「安置する」の意。ワ行下二段活用。「据ゑる」とも書く。物や人を定位置に配置する。「御座に据う」などの形。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

座らせる　置く　下二段　据ゑる　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

具す（ぐす）

連れて行く・備える

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「具す」は「連れて行く」「備える」「揃える」の意。サ行変格活用。「率る」と同義だが硬い表現。「従者を具す」「武具を具す」などの形。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

連れて行く　備える　サ変　率る　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

消つ (けつ)

消える・消滅する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「消つ」は「消える」「消滅する」の意。タ行下二段活用。「消ゆ」とも書く。火や音、人の姿などが消え去る様子。「煙消つ」「音消つ」などの形。

例文1

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

例文2

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

消える　消滅　下二段　消ゆ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

寝 (ぬ)

寝る・お休みになる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「寝」は「寝る」「臥す」の意。ナ行下二段活用。「寝る」の古形。尊敬語として使うこともある。「御寝」で貴人の就寝。「寝ね給ふ」などの形。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

寝る　臥す　下二段　尊敬可　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

御す (おす)

召し上がる・お乗りになる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「御す」は「召し上がる」「お乗りになる」「召す」の意。サ行変格活用。「めす」とも読む。尊敬語。食事や乗り物に関する動作の尊敬表現。「物を御す」などの形。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

召し上がる　お乗りになる　サ変　尊敬語　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あり (あり)

頻出

ある・いる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あり」は存在を表す基本動詞。「ある」「いる」「生きている」の意。ラ行変格活用。「侍り」「候ふ」の基となる語。「世にあり」「ありける」など頻出。多義的で文脈判断が重要。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

ある　いる　存在　ラ変　基本　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

をり (おり)

いる・座る

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「をり」は「いる」「座る」の意。ラ行変格活用。「居り」と書く。「あり」より具体的な場所での存在を表す。「座す」の意味も。「そこをり」などの形。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

いる　座る　ラ変　居り　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

あらはす (あらわす)

現す・明らかにする

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「あらはす」は「現す」「明らかにする」「顕す」の意。サ行四段活用。隠れていたものを見えるようにする。「理をあらはす」「姿をあらはす」などの形。真実を示す。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

現す　明らかにする　四段　顕す　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

思ほす (おもおす)

頻出

お思いになる・思召す

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「思ほす」は「思ふ」の尊敬語で「お思いになる」「思召す」の意。サ行四段活用。貴人の思考を表す尊敬表現。「かく思ほす」「思ほし召す」などの形で頻出。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

お思いになる　思召す　尊敬　四段　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

忍ぶ (しのぶ)

耐える・隠れる・人目を避ける

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「忍ぶ」は「耐える」「隠れる」「我慢する」の意。バ行四段活用。秘密を守る、苦難に耐える、密かに行動する。「恋を忍ぶ」「忍びて行く」など。多義語。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

耐える　隠れる　我慢　四段　多義　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

やる (やる)

送る・やる・追いやる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「やる」は「送る」「やる」「追いやる」の意。ラ行四段活用。「遣る」と書く。手紙や使者を送る。気持ちを晴らす。「文をやる」「心をやる」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

送る　やる　追いやる　四段　遣る　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

経 (へ)

過ぎる・経る・時が経つ

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「経」は「過ぎる」「経る」の意。ハ行下二段活用。時間が経過する。場所を通り過ぎる。「年を経」「月日経ぬ」などの形。時の経過を表す重要語。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

過ぎる　経る　時間　下二段　経過　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

果つ (はつ)

終わる・死ぬ・やり遂げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「果つ」は「終わる」「死ぬ」「やり遂げる」の意。タ行下二段活用。完結・完了を表す。命が尽きる意味も。「語り果つ」「果てぬ」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

終わる　死ぬ　完了　下二段　完結　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

飽く (あく)

満足する・飽きる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「飽く」は「満足する」「飽きる」「十分になる」の意。カ行四段活用。欲求が満たされる。「見飽く」「聞き飽く」などの形。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

満足 | 飽きる | 四段 | 充足 | 時代:平安時代 | 種別:古文重要動詞

堪ふ (たう)

頻出

耐える・我慢する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「堪ふ」は「耐える」「我慢する」「こらえる」の意。ハ行下二段活用。苦痛や感情を抑える。否定形「堪へず」で「耐えられない」。「堪へかねて」などの形で頻出。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

耐える　我慢　下二段　こらえる　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

むつぶ (むつぶ)

親しくする・仲良くする

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「むつぶ」は「親しくする」「仲良くする」の意。バ行四段活用。「睦ぶ」と書く。人と親密な関係を持つ。「むつびかはす」「むつましく」などの形。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

親しくする　仲良く　四段　睦ぶ　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

おこなふ (おこなう)

修行する・仏道修行

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「おこなふ」は「行う」「修行する」の意。ハ行四段活用。特に仏教の修行を指すことが多い。「法をおこなふ」「おこなひ澄ます」などの形。宗教的実践。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

行う　修行　仏道　四段　宗教　時代:平安時代　種別:古文重要動詞

謙譲語II（丁重語） (謙譲語II)

丁重語の概念

平安時代 / 古文敬語

解説

謙譲語II（丁重語）は、動作の向かう先ではなく、話し手が聞き手に対して丁重に述べる表現。「参る」「申す」「存ず」など。動作の対象に敬意を表すのではなく、話し手の謙虚な態度を示す。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

謙譲語II　丁重語　話し手　聞き手　態度　時代:平安時代　種別:古文敬語

複合敬語 (複合敬語)

敬語の重ね方

平安時代 / 古文敬語

解説

複合敬語は二つ以上の敬語表現を組み合わせたもの。「申し給ふ」（謙譲+尊敬）、「おはします」（尊敬+尊敬）など。より高い敬意を表す。「のたまはせ給ふ」のような三重敬語もある。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

複合敬語 | 二重敬語 | 組み合わせ | 高敬意 | 時代:平安時代 | 種別:古文敬語

敬意の方向 (敬意の方向)

敬語の向き

平安時代 / 古文敬語

解説

敬語には「誰から誰への敬意か」という方向性がある。尊敬語は動作の主体に敬意、謙譲語は動作の対象に敬意。複数の人物が登場する文では、敬語の方向を正しく把握することが読解の鍵。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

敬意 方向 主体 対象 読解 時代:平安時代 種別:古文敬語

敬語の省略 (敬語の省略)

敬語表現の簡略化

平安時代 / 古文敬語

解説

会話文や親しい間柄では敬語が省略されることがある。「給ふ」が省かれたり、簡略な形になったりする。文脈から補って理解する必要がある。「のたまふ」→「言ふ」など。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

省略 簡略化 会話 文脈 理解 時代:平安時代 種別:古文敬語

お・ご（接頭語） (お・ご)

美化語の接頭語

平安時代 / 古文敬語

解説

「お」「ご」は名詞に付いて丁寧さや美しさを添える接頭語。「お手紙」「ご返事」など。古文では「御」と書く。「御文」「御返り」などの形。美化語として機能。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

接頭語 美化語 御 丁寧 名詞 時代:平安時代 種別:古文敬語

身分による敬語の違い (身分と敬語)

社会階層と敬語

平安時代 / 古文敬語

解説

古文の敬語は話し手と相手の身分関係で使い分けられる。天皇・皇族には最高敬語、貴族間では通常敬語、庶民には敬語を使わないなど。身分社会を反映した言語表現。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

身分 階層 社会 使い分け 天皇 時代:平安時代 種別:古文敬語

うつくしきもの (うつくしきもの)

枕草子の名段

平安時代中期 / 名文句

解説

「うつくしきもの。瓜にかきたるちごの顔。すずめの子の、ねず鳴きするに躍り来る。」『枕草子』の有名な段。「うつくし」はかわいいものの意。小さくてかわいいものを列挙。清少納言の鋭い観察眼。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

枕草子 清少納言 かわいい 観察 小さい 時代:平安時代中期 種別:名文句

木は桜 (きはさくら)

枕草子・植物論

平安時代中期 / 名文句

解説

「木は、桜。花は濃くて葉は薄きが、いと面白し。」『枕草子』の植物論の一節。桜を最高の木として賛美。をかしの美意識。簡潔な表現で美を語る清少納言の文体。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

枕草子 | 清少納言 | 桜 | 植物 | をかし | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

雪のいと高う降りたるを (ゆきのいとたこうふりたるを)

枕草子の名場面

平安時代中期 / 名文句

解説

「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに」『枕草子』の冬の情景。雪の日の宮中の優雅な様子を描く。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

枕草子 清少納言 雪 宮中 優雅 時代:平安時代中期 種別:名文句

中納言参り給ひて (ちゅうなごんまいりたまいて)

枕草子の名場面

平安時代中期 / 名文句

解説

「中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに」から始まる有名な場面。中納言定子が清少納言に扇を贈る場面。「香炉峰の雪」の故事を引いた知的な遊び。才女同士の交流。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

枕草子 | 清少納言 | 中納言 | 扇 | 香炉峰 | 時代:平安時代中期 | 種別:名文句

仁和寺にある法師 (にんなじにあるほうし)

徒然草の名段

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ」で始まる話。目的地の本社まで行かず麓で帰った失敗談。「少しのことにも先達はあらまほしきことなり」の教訓。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 失敗 教訓 先達 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

高名の木登り (こうみょうのきのぼり)

徒然草の名段

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに」で始まる話。危険は油断した時に起こるという教訓。「あやふき時は言はで、やすき時に教へけり」の名言。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 教訓 油断 安全 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

奥山に猫またといふもの (おくやまにねこまたというもの)

徒然草の逸話

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる」という怪異譚。山中で恐怖に怯えていたら、実は飼っていた犬だったという話。恐怖心理を描く。思い込みの危険性。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

徒然草 兼好法師 怪異 恐怖 心理 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

花は盛りに (はなはさかりに)

徒然草の美意識

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは」で始まる有名な段。完璧なものだけを美とするのではなく、衰えや不完全さにも美を見出す。無常観に基づく美意識。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

徒然草 兼好法師 美意識 無常 不完全 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

つれづれなるままに日暮らし (つれづれなるままにひぐらし)

徒然草の心境

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

徒然草冒頭の一節。「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて」と続く。退屈な日々を硯に向かって過ごす兼好法師の姿。随筆執筆の動機を率直に述べる。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

徒然草 兼好法師 退屈 執筆 動機 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

世にしたがへば (よにしたがえば)

徒然草の処世訓

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「世にしたがへば、身苦し。したがはねば、狂へるに似たり」という処世訓。世間に従えば窮屈、従わねば変人扱い。どちらを選ぶかの苦悩。兼好の人生観を示す。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 処世 人生観 苦悩 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

一事を必ず成さんと思はば (いちじをかならずなさんとおもわば)

徒然草の教訓

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず」という教訓。一つのことを成し遂げようと思うなら、他のことが損なわれても気にするな。専念の重要性。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 教訓 専念 集中 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

友とするにわろき者 (ともとするにわろきもの)

徒然草の人物論

鎌倉時代末期 / 名文句

解説

「友とするにわろき者、七つあり」で始まる段。悪い友人の特徴を列挙。「一つには、高く、やんごとなき人」など七項目。友人選びの基準を示す。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

徒然草 兼好法師 友人 人物論 基準 時代:鎌倉時代末期 種別:名文句

ゆく河の流れは絶えずして (ゆくかわのながれはたえずして)

方丈記の冒頭

鎌倉時代 / 名文句

解説

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」で始まる『方丈記』の有名な冒頭文。諸行無常を水の流れに喩える。鴨長明の無常観を象徴的に表現。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

方丈記 鴨長明 無常 水 流れ 時代:鎌倉時代 種別:名文句

男もすなる日記 (おとこもすなるにっき)

土佐日記の冒頭

平安時代中期 / 名文句

解説

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」という『土佐日記』の冒頭。男が書く日記を女性も書いてみようという趣向。紀貫之が女性の視点で書く仮名日記。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

土佐日記 紀貫之 冒頭 女性視点 仮名 時代:平安時代中期 種別:名文句

今は昔 (いまはむかし)

今昔物語集の決まり文句

平安時代末期 / 名文句

解説

「今は昔」は『今昔物語集』の各話の冒頭に現れる決まり文句。「今となっては昔のことだが」の意。説話を語り始める定型表現。約千話すべてがこの言葉で始まる。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

今昔物語集 冒頭 決まり文句 説話 定型 時代:平安時代末期 種別:名文句

月やあらぬ (つきやあらぬ)

伊勢物語・東下り

平安時代初期 / 名文句

解説

「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして」という和歌。『伊勢物語』東下りの段。月も春も変わらないが、自分だけが変わってしまった嘆き。在原業平の心情。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

伊勢物語 | 在原業平 | 和歌 | 東下り | 嘆き | 時代:平安時代初期 | 種別:名文句

世の中にたえて桜のなかりせば (よのなかにたえてさくらのなかりせば)

古今和歌集の名歌

平安時代初期 / 名文句

解説

「世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし」という在原業平の和歌。桜がなければ春は穏やかなのにという逆説。桜への複雑な思い。『古今和歌集』収録。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

古今和歌集 在原業平 和歌 桜 春 時代:平安時代初期 種別:名文句

いと (いと)

最頻出

非常に・とても

古文単語

解説

程度が著しいことを表す副詞。現代語の「とても」「非常に」に相当。「いと美し」「いとをかし」のように形容詞を修飾する最頻出副詞。『源氏物語』などで多用される。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞 程度 美しい をかし 頻出 種別:古文単語

いみじ (いみじ)

非常に・ひどく

平安時代 / 古文単語

解説

程度が甚だしいことを表す形容詞。連用形「いみじう」「いみじく」が副詞的に使われる。良い意味にも悪い意味にも用いる。「いみじう泣く」「いみじき美人」。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

形容詞 程度 甚だしい 連用形 副詞 時代:平安時代 種別:古文単語

いとど (いとど)

いっそう・ますます

古文単語

解説

程度が増すことを表す副詞。「さらにいとど」のように他の副詞と呼応することも。既にある状態がさらに増す意。「いとど心細し」。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

副詞 程度 増加 心細し 呼応 種別:古文単語

さらに (さらに)

全く〜ない（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して「全く〜ない」「決して〜ない」の意を表す副詞。「さらに知らず」「さらになし」。打消と呼応しない場合は「改めて」「さっぱり」の意。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

副詞　打消呼応　全く　決して　知らず　種別:古文単語

つゆ (つゆ)

少しも〜ない（打消と呼応）

平安時代 / 古文単語

解説

打消の語と呼応して「少しも〜ない」「全く〜ない」の意。露のように僅かなことさえない意。「つゆ知らず」「つゆ思はず」。元は名詞「露」から。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

副詞 | 打消呼応 | 少しも | 露 | 僅か | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

え（え）

〜できない（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して不可能を表す副詞。「え行かず」「え言はず」。能力的・状況的に不可能な意。「得」の副詞化とされる。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞　打消呼応　不可能　できない　状況　種別:古文単語

よも（よも）

まさか〜ないだろう（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して否定的推量を表す副詞。「よもあらじ」「よも知らじ」。話し手の否定的な推測・期待。反語的に用いることも。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

副詞　打消呼応　推量　否定　まさか　種別:古文単語

まさに (まさに)

ちょうど・今にも

古文単語

解説

時間的な適切性や切迫を表す副詞。「まさに言はむとす」「まさに死なむとす」。「正に」の字義から。現代語の「まさに」とほぼ同義。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

副詞 時間 切迫 ちょうど 適切 種別:古文単語

やがて (やがて)

そのまま・すぐに

平安時代 / 古文単語

解説

時間的・状態的な連続を表す副詞。現代語の「やがて」とは異なり「すぐに」「そのまま」の意。「やがて帰る」「やがて寝入る」。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

副詞 時間 連続 すぐに そのまま 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆめ (ゆめ)

決して〜するな（打消と呼応）

古文単語

解説

禁止を表す副詞。打消の語と呼応して「決して〜するな」の意。「ゆめ語るな」「ゆめ忘るな」。夢のように儚い意から。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

副詞　打消呼応　禁止　決して　命令　種別:古文単語

よに (よに)

世間で・非常に

平安時代 / 古文単語

解説

「世に」と書く。「世間では」の意と、「非常に」の意の二義。「よに聞こゆ」「よに珍しき」。文脈で判断。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

副詞 世間 程度 非常に 二義 時代:平安時代 種別:古文単語

いたう (いたう)

ひどく・非常に

平安時代 / 古文単語

解説

程度が激しいことを表す副詞。形容詞「いたし」の連用形から。「いたう泣く」「いたう寒し」。現代語の「いたく」。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

副詞 程度 激しい 連用形 いたし 時代:平安時代 種別:古文単語

なほ (なほ)

やはり・それでも

古文単語

解説

前の状態が変わらない意や、逆接の意を表す副詞。「なほ行く」「なほ美し」。現代語の「なお」に相当。期待に反する継続。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

副詞　継続　逆接　やはり　それでも　種別:古文単語

ひたすら (ひたすら)

ひたすら・一途に

平安時代 / 古文単語

解説

他のことを考えず一つのことに集中する意の副詞。「ひたすら思ふ」「ひたすら祈る」。現代語とほぼ同義。「ひた」は接頭語。

例文1

月日は百代の過客にして（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

副詞 専心 一途 集中 ひた 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆゆし (ゆゆし)

不吉だ・立派だ

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で、不吉・恐ろしい意と、立派・素晴らしい意の両義。文脈で判断。「ゆゆしき夢」「ゆゆしき人」。連用形「ゆゆしく」が副詞的に使われる。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

形容詞 不吉 立派 両義 恐ろしい 時代:平安時代 種別:古文単語

あへて (あへて)

決して〜ない（打消と呼応）

古文単語

解説

打消の語と呼応して強い否定を表す副詞。「あへて言はず」「あへて知らず」。現代語の「敢えて」とは意味が異なる。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

副詞 打消呼応 強否定 決して 敢えて 種別:古文単語

かく (かく)

このように・こう

古文単語

解説

近称の指示副詞。話し手に近い事柄を指す。「かく申す」「かくて過ぐす」。現代語の「こう」「このように」。「然く」と書く。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

副詞 指示 近称 このように こう 種別:古文単語

かかる (かかる)

このような・こんな

古文単語

解説

近称の連体詞。「かく」の連体形。「かかる事」「かかる時」。現代語の「こんな」「このような」に相当。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

連体詞 指示 近称 このような こんな 種別:古文単語

さ (さ)

そう・そのように

古文単語

解説

中称の指示副詞。「そう」「そのように」の意。「さ思ふ」「さあらば」。現代語の「そう」に相当。「然」と書く。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

副詞 指示 中称 そう そのように 種別:古文単語

などか (などか)

どうして〜ないのか（反語）

平安時代 / 古文単語

解説

疑問の副詞「など」に係助詞「か」が付いた形。打消と呼応して反語を表す。「などか知らざらむ」（どうして知らないことがあろうか、知っているはずだ）。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

副詞 疑問 反語 打消呼応 どうして 時代:平安時代 種別:古文単語

さて (さて)

そうして・ところで

古文単語

解説

接続詞。前の事柄を受けて次に移る。「そうして」「それで」の意と、話題転換の「ところで」の意。「さてその後」。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

接続詞 順接 話題転換 そうして ところで 種別:古文単語

さるは (さるは)

そうは言うものの

平安時代 / 古文単語

解説

接続詞。逆接を表す。「さ（そう）ある（言う）は」の意。「さるはかく思ふ」（そうは言うものの、こう思う）。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

接続詞 逆接 そうは言うものの しかし けれども 時代:平安時代 種別:古文単語

されば (されば)

だから・それゆえに

古文単語

解説

接続詞。原因・理由を受けて結果を導く。「さあれば」が縮まった形。「されば申す」（だから申し上げる）。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

関連

接続詞　順接　原因　結果　だから　種別:古文単語

しかれども (しかれども)

しかしながら

平安時代 / 古文単語

解説

接続詞。逆接を表す。「しか（そう）あれども」の意。「しかれども行かず」（しかしながら行かない）。現代語の「しかれども」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

接続詞 逆接 しかしながら けれども 然れども 時代:平安時代 種別:古文単語

ここに (ここに)

ここで・この時

古文単語

解説

接続詞的に使われ、話の展開を示す。「ここで」「この時」「すると」の意。「ここに一人の僧あり」（ここに一人の僧がいた）。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

接続詞　展開　ここで　この時　すると　種別:古文単語

御前 (おまえ・ごぜん)

貴人の前・貴人の居場所

平安時代 / 古文単語

解説

貴人のいる場所や、貴人の前を指す尊敬語。「御前に参る」（貴人の前に参上する）。現代語の「おまえ」とは全く異なる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

名詞 尊敬語 貴人 宮中 居場所 時代:平安時代 種別:古文単語

女房 (にょうぼう)

宮中・貴族の家に仕える女性

平安時代 / 古文単語

解説

宮中や貴族の邸宅で仕える女性。侍女。身分の高い女性も含む。「女房たち集まりて」。現代語の「妻」の意味ではない。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

名詞 女性 宮中 侍女 貴族 時代:平安時代 種別:古文単語

局 (つぼね)

女房の部屋

平安時代 / 古文単語

解説

宮中や貴族邸で、女房が使う個室。「局に籠る」。転じて、その部屋の主である女房を指すこともある。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

名詞 部屋 女房 宮中 個室 時代:平安時代 種別:古文単語

君達 (きんだち)

貴族の子弟

平安時代 / 古文単語

解説

貴族の息子や娘を指す敬称。「きんだち」と読む。「若君達」などの形で使われる。身分の高い若者への呼称。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

名詞 敬称 貴族 子弟 若者 時代:平安時代 種別:古文単語

御曹司 (おんぞうし)

貴族の子息

平安時代 / 古文単語

解説

貴族の息子、特に嫡子を指す敬称。「ぞうし」は「蔵人」の転。現代語では総理大臣の息子などに使われる。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

名詞 敬称 貴族 子息 嫡子 時代:平安時代 種別:古文単語

上 (うえ)

身分の高い人

平安時代 / 古文単語

解説

高貴な人、主人、天皇などを指す敬称。「上に申す」「上の御前」。文脈により意味が変わる多義語。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

名詞 敬称 身分 主人 天皇 時代:平安時代 種別:古文単語

宮仕え (みやづかえ)

宮中に仕えること

平安時代 / 古文単語

解説

宮中や貴族の邸宅で働くこと。特に女性が宮中で女房として仕えること。「宮仕えに出づ」。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

名詞 動詞 宮中 仕える 女房 時代:平安時代 種別:古文単語

対 (たい)

貴族邸の建物

平安時代 / 古文単語

解説

寝殿造りの主要建物の一つ。寝殿の東西に配置される建物。「東の対」「西の対」。住居や控え室として使われる。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

名詞 建築 寝殿造り 貴族 邸宅 時代:平安時代 種別:古文単語

几帳 (きちょう)

間仕切りの調度

平安時代 / 古文単語

解説

布を張った可動式の間仕切り。貴族の住居で目隠しやプライバシー保護に使用。「几帳の陰」などの表現。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

名詞 調度 間仕切り 貴族 プライバシー 時代:平安時代 種別:古文単語

御簾 (みす)

簾のカーテン

平安時代 / 古文単語

解説

竹などで編んだすだれ。貴族の住居で部屋を仕切る。「御簾を巻き上げる」。中の様子を隠す役割。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

名詞 調度 すだれ 貴族 目隠し 時代:平安時代 種別:古文単語

係り結び (かかりむすび)

最重要

古文の構文法則

古文表現

解説

係助詞（ぞ・なむ・や・か・こそ）が文中にあると、文末が連体形または已然形で結ばれる法則。「ぞ・なむ・や・か」は連体形、「こそ」は已然形で結ぶ。古文の最重要文法事項。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

文法　係助詞　連体形　已然形　構文　種別:古文表現

ぞ〜連体形 (ぞ〜れんたいけい)

係り結び（強調）

古文表現

解説

係助詞「ぞ」が文中にある時、文末が連体形で結ばれる。強調を表す。「花ぞ咲ける」（花が咲いている）。「ぞ」の後の語を強調。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

係り結び　強調　連体形　係助詞　ぞ　種別:古文表現

なむ〜連体形 (なむ〜れんたいけい)

係り結び（強調）

古文表現

解説

係助詞「なむ」が文中にある時、文末が連体形で結ばれる。強調を表す。「人なむ来たる」（人が来た）。「なむ」の後の語を強調。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

係り結び　強調　連体形　係助詞　なむ　種別:古文表現

や・か〜連体形 (や・か〜れんたいけい)

係り結び（疑問・反語）

古文表現

解説

係助詞「や」「か」が文中にある時、文末が連体形で結ばれる。疑問・反語を表す。「誰か知る」（誰が知ろうか）。疑問や反語的強調。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

係り結び　疑問　反語　連体形　係助詞　種別:古文表現

こそ〜已然形 (こそ〜いぜんけい)

係り結び（強意）

古文表現

解説

係助詞「こそ」が文中にある時、文末が已然形で結ばれる。強意を表す。「これこそ花なれ」（これこそが花だ）。最も強い強調。已然形結びのみ「こそ」。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

係り結び　強意　已然形　係助詞　こそ　種別:古文表現

べし (べし)

推量・当然・可能など

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「べし」は推量・当然・意志・可能・命令など多義。「行くべし」（行くだろう・行くべきだ）。文脈で意味を判断。終止形接続。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

助動詞 推量 当然 意志 多義 時代:平安時代 種別:古文表現

まじ (まじ)

打消推量・打消当然

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「まじ」は「べし」の打消。「行くまじ」（行かないだろう・行くべきでない）。打消推量・打消意志・打消可能など。終止形接続。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

助動詞 打消推量 打消当然 打消意志 べし 時代:平安時代 種別:古文表現

らむ (らむ)

現在推量・原因推量

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「らむ」は現在の推量を表す。「今頃何をするらむ」（今頃何をしているだろう）。目に見えない現在の事柄の推量。終止形接続。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助動詞 | 現在推量 | 原因推量 | 目に見えない | 現在 | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

けむ (けむ)

過去推量・原因推量

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「けむ」は過去の推量を表す。「昨日何をしけむ」（昨日何をしただろう）。過去の事柄の推量。連用形接続。「けん」とも。

例文1

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

例文2

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

関連

助動詞 過去推量 原因推量 過去 けん 時代:平安時代 種別:古文表現

まほし (まほし)

希望

平安時代 / 古文表現

解説

助動詞「まほし」は希望を表す。「行かまほし」「見まほしき」（行きたい・見たい）。形容詞型活用。連用形「まほしく」もよく使われる。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

助動詞 希望 〜たい 形容詞型 願望 時代:平安時代 種別:古文表現

平家物語 (へいけものがたり)

鎌倉時代の軍記物語

鎌倉時代 / 古典作品

解説

平家一門の栄華と滅亡を描いた軍記物語。「祇園精舎の鐘の声」の冒頭で有名。琵琶法師により語られた。諸行無常がテーマ。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

軍記物語 平家 源平 無常 琵琶法師 時代:鎌倉時代 種別:古典作品

太平記 (たいへいき)

南北朝時代の軍記物語

南北朝時代 / 古典作品

解説

後醍醐天皇の時代から南北朝の争乱を描いた軍記物語。全40巻。足利尊氏、楠木正成などが登場。歴史的価値も高い。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

軍記物語 南北朝 後醍醐天皇 足利尊氏 楠木正成 時代:南北朝時代 種別:古典作品

保元物語 (ほうげんものがたり)

保元の乱を描く軍記物語

平安時代末期 / 古典作品

解説

保元の乱（1156年）を題材とした軍記物語。崇徳上皇と後白河天皇の対立。源為朝の活躍。武士の台頭を描く。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

軍記物語 保元の乱 崇徳上皇 後白河天皇 源為朝 時代:平安時代末期 種別:古典作品

平治物語 (へいじものがたり)

平治の乱を描く軍記物語

平安時代末期 / 古典作品

解説

平治の乱（1159年）を題材とした軍記物語。源義朝と平清盛の対立。平家の隆盛のきっかけ。源頼朝の少年時代も描かれる。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

軍記物語　平治の乱　源義朝　平清盛　源頼朝　時代:平安時代末期　種別:古典作品

宇治拾遺物語 (うじしゅういものがたり)

説話集

鎌倉時代初期 / 古典作品

解説

鎌倉時代初期の説話集。全15巻。「今は昔」で始まる短編説話を多数収録。笑い話や教訓話など多様。『今昔物語集』と類似点多い。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

説話集 鎌倉 今は昔 短編 笑い話 時代:鎌倉時代初期 種別:古典作品

古今著聞集 (ここんちょもんじゅう)

説話集

鎌倉時代 / 古典作品

解説

鎌倉時代の説話集。橘成季編。全30巻。和歌・音楽・舞踊など文化的話題が豊富。貴族社会の逸話を多数収録。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

説話集 鎌倉 橘成季 和歌 文化 時代:鎌倉時代 種別:古典作品

沙石集（しゃせきしゅう）

仏教説話集

鎌倉時代 / 古典作品

解説

鎌倉時代の仏教説話集。無住道暁著。全10巻。仏教的教訓を含む説話。民衆の生活も描かれる。説話文学の代表作。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

説話集　仏教　無住道暁　教訓　鎌倉　時代:鎌倉時代　種別:古典作品

蜻蛉日記 (かげろうにっき)

平安時代の日記文学

平安時代 / 古典作品

解説

藤原道綱母が夫・藤原兼家との結婚生活を綴った日記。女性の心情を率直に描く。日本最初の女流日記文学。約20年間の記録。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

日記文学 女流 藤原道綱母 藤原兼家 結婚生活 時代:平安時代 種別:古典作品

和泉式部日記 (いずみしきぶにっき)

和泉式部の日記

平安時代 / 古典作品

解説

和泉式部と敦道親王との恋愛を描いた日記風物語。和歌を多く含む。情熱的な恋愛描写。虚構性も指摘される。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

日記文学 女流 和泉式部 敦道親王 恋愛 時代:平安時代 種別:古典作品

紫式部日記 (むらさきしきぶにっき)

紫式部の宮仕え日記

平安時代 / 古典作品

解説

紫式部が宮中での生活や藤原道長らとの交流を記した日記。『源氏物語』の作者による貴重な記録。鋭い人物観察。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

日記文学 女流 紫式部 宮中 藤原道長 時代:平安時代 種別:古典作品

更級日記 (さらしなにっき)

菅原孝標女の日記

平安時代 / 古典作品

解説

菅原孝標女が『源氏物語』への憧れや人生を綴った日記。少女期から晩年まで。物語への情熱と現実の落差を描く。回想的作品。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

日記文学 女流 菅原孝標女 源氏物語 回想 時代:平安時代 種別:古典作品

讃岐典侍日記 (さぬきのすけにっき)

平安時代の日記文学

平安時代 / 古典作品

解説

讃岐典侍（藤原長子）が堀河天皇への思慕を綴った日記。宮仕えの女性の立場から見た宮中。和歌を多く含む短編日記。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

日記文学 女流 讃岐典侍 堀河天皇 宮中 時代:平安時代 種別:古典作品

大鏡 (おおかがみ)

歴史物語

平安時代末期 / 古典作品

解説

藤原氏の栄華を描いた歴史物語。全3巻。藤原道長の時代を中心に、摂関政治の全盛期を描く。老人の回想形式。四鏡の一つ。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

歴史物語 藤原氏 藤原道長 摂関政治 四鏡 時代:平安時代末期 種別:古典作品

増鏡 (ますかがみ)

歴史物語

南北朝時代 / 古典作品

解説

後鳥羽院から後醍醐天皇までを描いた歴史物語。全17巻。鎌倉時代の政治を貴族の視点で記録。四鏡の最後。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

歴史物語 後鳥羽院 後醍醐天皇 鎌倉時代 四鏡 時代:南北朝時代 種別:古典作品

発心集 (ほっしんしゅう)

仏教説話集

鎌倉時代 / 古典作品

解説

鴨長明著の仏教説話集。全8巻。発心（出家・入道）の話を集める。『方丈記』の作者による説話文学。仏教的世界観。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

説話集 仏教 鴨長明 発心 出家 時代:鎌倉時代 種別:古典作品

十訓抄 (じっきんしょう)

説話集

鎌倉時代中期 / 古典作品

解説

鎌倉時代中期の説話集。全10巻。10の教訓（十訓）を主題とする。和漢の故事を収録。『今昔物語集』の影響が見られる。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

説話集 教訓 十訓 故事 和漢 時代:鎌倉時代中期 種別:古典作品

栄花物語 (えいがものがたり)

歴史物語

平安時代中期 / 古典作品

解説

藤原氏の栄華を描いた歴史物語。全40巻。藤原道長の時代を中心に、摂関家の繁栄を描く。物語風の歴史叙述。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

歴史物語 藤原氏 藤原道長 摂関家 繁栄 時代:平安時代中期 種別:古典作品

む〜打消 (む〜うちけし)

助動詞「む」の打消

平安時代 / 古文表現

解説

「む」は打消推量・打消意志を表す助動詞。「行かむ」は「行かないだろう」。未然形接続。「ず」と混同しないよう注意。現代語「まい」の語源。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

助動詞 | 打消推量 | 打消意志 | 未然形 | まい | 時代:平安時代 | 種別:古文表現

給ふ・賜ふ (たまう)

尊敬・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「給ふ」「賜ふ」は尊敬・謙譲両方で使われる補助動詞。「言ひ給ふ」（おっしゃる）「申し給ふ」（申し上げなさる）。動作の主が誰かで判断。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

補助動詞 尊敬 謙譲 給ふ 賜ふ 時代:平安時代 種別:古文表現

侍り (はべり)

丁寧・謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「侍り」は丁寧語・謙譲語の補助動詞。「あり」の丁寧語。「侍り」で文を結ぶと丁寧な表現に。宮中言葉の特徴。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

補助動詞 丁寧 謙譲 侍り あり 時代:平安時代 種別:古文表現

候ふ（そうろう）

頻出

丁寧・謙譲の補助動詞

鎌倉時代以降 / 古文表現

解説

「候ふ」は丁寧語・謙譲語の補助動詞。「あり」の丁寧語。武家の書状で頻出。「〜で候」の形。中世以降に一般化。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

補助動詞 丁寧 謙譲 候ふ 武家 時代:鎌倉時代以降 種別:古文表現

奉る (たてまつる)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「奉る」は謙譲語の補助動詞。「〜申し上げる」の意。「書き奉る」「申し奉る」。動作を貴人に向けて行う時に使用。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

補助動詞　謙譲　奉る　申し上げる　貴人　時代:平安時代　種別:古文表現

聞こゆ・聞こえさす (きこゆ・きこえさす)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「聞こゆ」「聞こえさす」は謙譲語の補助動詞。「〜申し上げる」の意。「聞こえさす」は「聞こゆ」より丁重。「申し聞こゆ」など。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

補助動詞 謙譲 聞こゆ 聞こえさす 申し上げる 時代:平安時代 種別:古文表現

参る (まいる)

謙譲の補助動詞

平安時代 / 古文表現

解説

「参る」は謙譲語の補助動詞。「〜申し上げる」の意。「申し参らす」「書き参らす」。貴人への動作を表す。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

補助動詞 謙譲 参る 申し上げる 貴人 時代:平安時代 種別:古文表現

やる (やる)

贈る・送る・行かせる

平安時代 / 古文単語

解説

「やる」は「贈る」「送る」「行かせる」の意。他動詞。「文をやる」（手紙を送る）「人をやる」（人を行かせる）。現代語より広い意味。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

動詞 贈る 送る 行かせる 他動詞 時代:平安時代 種別:古文単語

わぶ (わぶ)

頻出

嘆く・困る

平安時代 / 古文単語

解説

「わぶ」は「嘆く」「困る」「侘びる」の意。バ行上二段活用。「わびて」「わびぬ」の形で頻出。つらい状況で使われる。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

動詞 嘆く 困る 侘びる 上二段 時代:平安時代 種別:古文単語

わびし (わびし)

つらい・みすぼらしい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「つらい」「困った」「みすぼらしい」の意。「わびしき身」「わびしく思ふ」。「わぶ」の形容詞形。侘しい状況を表す。

例文1

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

関連

形容詞 つらい 困った みすぼらしい 侘びる 時代:平安時代 種別:古文単語

らうたし (らうたし)

かわいらしい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「かわいらしい」「いとおしい」の意。幼い者や小さいものへの愛情を表す。「らうたき子」「らうたくて」。平安時代特有の美意識。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

形容詞 かわいらしい いとおしい 愛情 美意識 時代:平安時代 種別:古文単語

うつくし (うつくし)

かわいらしい・美しい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「かわいらしい」「美しい」の意。現代語の「美しい」より「かわいい」に近い。小さいもの、愛らしいものへの感情。枕草子「うつくしきもの」。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

形容詞 かわいらしい 美しい 愛らしい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

めでたし (めでたし)

素晴らしい・立派だ

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「素晴らしい」「立派だ」「すぐれている」の意。賞賛を表す。「めでたき人」。現代語の「めでたい」とニュアンスが異なる。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

形容詞 | 素晴らしい | 立派 | すぐれている | 賞賛 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

あはれなり (あわれなり)

しみじみとした

平安時代 / 古文単語

解説

形容動詞で「しみじみとした」「趣深い」の意。「もののあはれ」の「あはれ」。感動・共感を表す。平安文学の美意識の中心概念。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

形容動詞 | しみじみ | 趣深い | 感動 | もののあはれ | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

をかし (をかし)

趣がある・興味深い

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「趣がある」「興味深い」「美しい」の意。知的・感覚的な美を表す。「あはれ」より客観的。枕草子の美意識。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

形容詞 趣がある 興味深い 美しい 枕草子 時代:平安時代 種別:古文単語

つきづきし (つきづきし)

ふさわしい・似合う

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「ふさわしい」「似合っている」「調和している」の意。「つきづきしき人」。場面や状況に適している様子を表す。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

形容詞 ふさわしい 似合う 調和 適切 時代:平安時代 種別:古文単語

を (を)

格助詞（対象・経由）

助詞

解説

格助詞「を」は動作の対象を示す。「花を見る」「道を行く」。現代語とほぼ同じ用法。移動の経由地も表す。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

助詞　格助詞　対象　経由　を　種別:助詞

に（に）

最頻出

格助詞（場所・時・対象）

助詞

解説

格助詞「に」は場所・時・動作の対象などを示す。「京に住む」「春に咲く」「人に会ふ」。多様な意味を持つ最頻出助詞。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞　格助詞　場所　時　対象　種別:助詞

にて（にて）

格助詞（場所・手段）

助詞

解説

格助詞「にて」は動作が行われる場所や手段を示す。「京にて聞く」（京都で聞く）「筆にて書く」（筆で書く）。「に」＋「て」。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

助詞　格助詞　場所　手段　にて　種別:助詞

より (より)

格助詞（起点・比較・手段）

助詞

解説

格助詞「より」は起点・比較の基準・手段などを示す。「京より来たる」「花より美し」。現代語の「から」「よりも」に相当。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

関連

助詞　格助詞　起点　比較　より　種別:助詞

して (して)

格助詞（手段・様態）

助詞

解説

格助詞「して」は手段・方法・様態を示す。「力して動かす」（力で動かす）。動詞「す」の連用形から。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

助詞　格助詞　手段　様態　して　種別:助詞

ば (ば)

接続助詞（順接確定条件）

助詞

解説

接続助詞「ば」は已然形に付いて確定条件を表す。「春来れば」（春が来たので）。原因・理由を表す。未然形+ばは仮定条件。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

助詞　接続助詞　順接　確定条件　已然形　種別:助詞

ど・ども（ど・ども）

接続助詞（逆接）

助詞

解説

接続助詞「ど」「ども」は逆接を表す。已然形に付く。「行けど見えず」（行ったが見えない）。「ども」は「ど」より強い逆接。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

助詞　接続助詞　逆接　已然形　けれども　種別:助詞

て（て）

接続助詞（継起・並列）

助詞

解説

接続助詞「て」は継起・並列を表す。連用形に付く。「見て帰る」（見て帰る）「美しくて優し」（美しくて優しい）。現代語とほぼ同じ。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

助詞　接続助詞　継起　並列　連用形　種別:助詞

で（で）

接続助詞（打消継起）

助詞

解説

接続助詞「で」は打消の継起を表す。未然形+「ず」の連用形。「言はで帰る」（言わないで帰る）。「〜ないで」の意。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

助詞　接続助詞　打消継起　未然形　ずて　種別:助詞

とも (とも)

接続助詞（逆接仮定）

助詞

解説

接続助詞「とも」は逆接の仮定条件を表す。「雨降るとも行かむ」（雨が降っても行こう）。「〜ても」の意。終止形に付く。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

助詞　接続助詞　逆接仮定　終止形　〜ても　種別:助詞

已然形+ば (いぜんけい+ば)

順接確定条件

助詞

解説

已然形に「ば」が付くと順接確定条件を表す。「春来れば花咲く」（春が来たので花が咲く）。既に起こった事柄の原因・理由。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

文法 確定条件 順接 已然形 原因 種別:助詞

未然形+ば (みぜんけい+ば)

順接仮定条件

助詞

解説

未然形に「ば」が付くと順接仮定条件を表す。「行かば見えむ」（行けば見えるだろう）。まだ起こっていない事柄の仮定。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

文法 仮定条件 順接 未然形 もし 種別:助詞

連用形中止法 (れんようけいちゅうしほう)

文を中断して続ける

助詞

解説

連用形で文を中断し、次の文に続ける表現法。「花咲き鳥鳴く」（花が咲き、鳥が鳴く）。「て」を使わない並列表現。簡潔な文体。

例文1

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

例文2

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

関連

文法 中止法 連用形 並列 簡潔 種別:助詞

打消の「ず」 (うちけしの「ず」)

打消の助動詞

助詞

解説

「ず」は打消を表す助動詞。未然形に付く。「行かず」「知らず」。「〜ない」の意。連用形は「ず」、連体形は「ぬ」、已然形は「ね」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

助動詞 打消 未然形 ず 〜ない 種別:助詞

完了の「つ」「ぬ」 (かんりょうの「つ」「ぬ」)

完了の助動詞

助詞

解説

「つ」「ぬ」は完了を表す助動詞。「書きつ」「行きぬ」（書いてしまった・行ってしまった）。「つ」は強意的完了、「ぬ」は自然的完了。連用形接続。

例文1

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

関連

助動詞 完了 つ ぬ 〜てしまった 種別:助詞

が (が)

格助詞（主語）

助詞

解説

格助詞「が」は主語を示す。「我が家」「花が咲く」。所有を表す場合もある。現代語の「の」に近い用法も。連体修飾格としても使用。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞 格助詞 主語 所有 連体修飾 種別:助詞

の（の）

格助詞（連体修飾）

助詞

解説

格助詞「の」は連体修飾・所有・同格などを表す。「京の花」「これの本」。主語を示すこともある。「鳥の鳴く」（鳥が鳴く）。現代語とほぼ同じ。

例文1

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

関連

助詞　格助詞　連体修飾　所有　主語　種別:助詞

と（と）

格助詞（引用・並列）

助詞

解説

格助詞「と」は引用・並列・比較などを表す。「『行く』と言ふ」（「行く」と言う）「花と鳥」（花と鳥）。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

例文2

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

関連

助詞　格助詞　引用　並列　比較　種別:助詞

へ (へ)

格助詞（方向）

助詞

解説

格助詞「へ」は移動の方向を示す。「京へ行く」「山へ登る」。現代語とほぼ同じ。「え」とも表記される。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

助詞 格助詞 方向 移動 へ 種別:助詞

や (や)

係助詞（疑問・反語）

助詞

解説

係助詞「や」は疑問・反語を表し、文末を連体形で結ぶ（係り結び）。「誰や来たる」（誰が来たのか）。疑問の意を強める。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助詞　係助詞　疑問　反語　係り結び　種別:助詞

過去の「き」「けり」 (かこの「き」「けり」)

過去の助動詞

助動詞

解説

「き」「けり」は過去を表す助動詞。「き」は直接経験した過去、「けり」は伝聞・回想の過去。「行きき」「行きけり」。「き」は連用形接続、「けり」は連用形接続。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

助動詞 過去 き けり 経験 伝聞 種別:助動詞

推量の「む」「らむ」 (すいりょうの「む」「らむ」)

推量の助動詞

助動詞

解説

「む」「らむ」は推量を表す助動詞。「む」は未来推量・意志、「らむ」は現在推量。「行かむ」（行くだろう・行こう）「今頃するらむ」（今頃しているだろう）。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

助動詞 推量 む らむ 未来 現在 種別:助動詞

受身・可能・自発・尊敬の「る」「らる」

(うけみ・かのう・じはつ・そんけいの「る」「らる」)

多義の助動詞

助動詞

解説

「る」「らる」は受身・可能・自発・尊敬の4つの意味を持つ助動詞。文脈で判断。「見らる」（見られる・見ることができる・自然と見える・ご覧になる）。未然形接続。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

助動詞　受身　可能　自発　尊敬　る　らる　種別:助動詞

使役・尊敬の「す」「さす」 (しえき・そんけいの「す」「さす」)

二義の助動詞

助動詞

解説

「す」「さす」は使役・尊敬の2つの意味を持つ助動詞。「行かす」（行かせる・お行きになる）。文脈で判断。未然形接続。四段・ナ変には「す」、その他には「さす」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

関連

助動詞　使役　尊敬　す　さす　未然形　種別:助動詞

断定の「なり」「たり」 (だんていの「なり」「たり」)

断定の助動詞

助動詞

解説

「なり」「たり」は断定を表す助動詞。「花なり」「学者たり」（花だ・学者だ）。「なり」は体言・連体形接続、「たり」は体言接続。現代語の「だ」に相当。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

助動詞　断定　なり　たり　だ　である　種別:助動詞

伝聞・推定の「なり」 (でんぶん・すいていの「なり」)

様態の助動詞

助動詞

解説

断定の「なり」とは別の助動詞。伝聞「〜そうだ」、推定「〜ようだ」を表す。「雨降るなり」（雨が降るそうだ・降るようだ）。終止形・ラ変連体形接続。音で判断。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

助動詞 伝聞 推定 様態 なり そうだ - 時代:助動詞

様態の「ごとし」 (ようたいの「ごとし」)

比況の助動詞

助動詞

解説

「ごとし」は比況（〜のようだ）を表す助動詞。「花のごとし」「咲くがごとし」（花のようだ・咲くかのようだ）。体言・連体形・「が」「の」に接続。形容詞型活用。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

助動詞 比況 ごとし ようだ 如し 形容詞型 種別:助動詞

願望の「たし」 (がんぼうの「たし」)

希望の助動詞

助動詞

解説

「たし」は願望・希望を表す助動詞。「見たし」「聞きたし」（見たい・聞きたい）。形容詞型活用。連用形接続。「まほし」より直接的な願望。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

助動詞 願望 希望 たし 〜たい 形容詞型 種別:助動詞

打消推量の「じ」 (うちけしすいりょうの「じ」)

打消推量の助動詞

助動詞

解説

「じ」は打消推量・打消意志を表す助動詞。「行かじ」（行くまい・行かないだろう）。未然形接続（一部終止形）。現代語の「まい」に相当。

例文1

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

助動詞 打消推量 打消意志 じ まい 未然形 種別:助動詞

四段活用 (よだんかつよう)

動詞の活用形

助動詞

解説

四段活用は動詞の基本活用の一つ。未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の6つの活用形を持つ。語幹+「ア・イ・ウ・ウ・エ・エ」の音便。「書く」など多数。

例文1

秋は夕暮れ。（秋は夕暮れがよい。）【枕草子】

例文2

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

関連

文法 活用 四段 動詞 6形 - 時代:助動詞

上二段活用 (かみにだんかつよう)

動詞の活用形

助動詞

解説

上二段活用は動詞の活用の一つ。「イ・イ・ウ・ウル・ウレ・イヨ」の形。「起く」「落つ」など。中古では上一段化が進行。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

文法 活用 上二段 動詞 起く 落つ 種別:助動詞

下二段活用 (しもにだんかつよう)

動詞の活用形

助動詞

解説

下二段活用は動詞の活用の一つ。「エ・エ・ウ・ウル・ウレ・エヨ」の形。「受く」「得」など。中古では下一段化が進行。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

文法 活用 下二段 動詞 受く 得 - 時代:助動詞

ナ変・ラ変活用 (なへん・らへんかつよう)

特殊な活用

助動詞

解説

ナ変は「死ぬ」「往ぬ」のみ。ラ変は「あり」「をり」「侍り」「候ふ」の4語のみ。不規則な活用形を持つ。「ナ・ニ・ヌ・ヌル・ヌれ・ネ」、「ラ・リ・リ・ル・レ・レ」。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

文法 活用 ナ変 ラ変 死ぬ あり - 時代:助動詞

形容詞の活用 (けいようしのかつよう)

形容詞の変化

助動詞

解説

形容詞はク活用とシク活用の2種類。ク活用は「高し」など、シク活用は「美し」など。語幹+「ク・ク・シ・キ・ケレ・×」。連用形が2つあるのが特徴（く・しく）。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

文法 活用 形容詞 ク活用 シク活用 美し - 時代:助動詞

形容動詞の活用 (けいようどうしのかつよう)

形容動詞の変化

助動詞

解説

形容動詞はナリ活用とタリ活用の2種類。ナリ活用は「静かなり」など、タリ活用は「堂々たり」など。「ナラ・ナリ（ニ）・ナリ・ナル・ナレ・ナレ」の形。

例文1

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

例文2

春はあけぼの。（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

文法 活用 形容動詞 ナリ活用 タリ活用 静かなり - 時代:助動詞

おぼゆ (おぼゆ)

思われる・思い出される

平安時代 / 古文単語

解説

「おぼゆ」は「思われる」「思い出される」「似ている」の意。ヤ行下二段活用。自発的な思いや記憶を表す。「美しくおぼゆ」「昔おぼえて」。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

動詞 | 思われる | 自発 | 記憶 | 下二段 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

おどろく (おどろく)

目が覚める・驚く

平安時代 / 古文単語

解説

「おどろく」は「目が覚める」「気づく」「驚く」の意。カ行四段活用。現代語の「驚く」より広い意味。「夢よりおどろく」（夢から覚める）。

例文1

一つには、高く、やんごとなき人（一つ目は、身分が高く、たいへん高貴な人。）【徒然草】

例文2

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

関連

動詞 | 目が覚める | 気づく | 驚く | 四段 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

おこたる (おこたる)

病気が治る・怠る

平安時代 / 古文単語

解説

「おこたる」は「病気が治る」「怠ける」の意。ラ行四段活用。「病おこたる」（病気が治る）。現代語と意味が異なる場合がある。

例文1

一事を必ず成さんと思はば、他の事の破るるをも傷むべからず（一つの事を必ずやり遂げようと思うなら、他の事がだめになるのも惜しんではならない。）【徒然草】

例文2

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

関連

動詞 病気が治る 怠る 四段 治癒 時代:平安時代 種別:古文単語

あく (あく)

開く

平安時代 / 古文単語

解説

「あく」は「開く」の意。カ行四段活用。「戸あく」「目あく」。自動詞。他動詞は「開く」（あく）。現代語とほぼ同じ。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

動詞 開く 自動詞 四段 戸 時代:平安時代 種別:古文単語

あやし (あやし)

不思議だ・身分が低い

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「不思議だ」「怪しい」「身分が低い」「粗末だ」の意。多義語。「あやしき者」（身分の低い者）「あやしと思ふ」（不思議だと思う）。

例文1

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

例文2

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

関連

形容詞 | 不思議 | 身分低い | 怪しい | 粗末 | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

ありがたし (ありがたし)

めったにない・すばらしい

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「めったにない」「珍しい」「すばらしい」の意。「有り難し」の原義は「存在し難い」。現代語の「ありがたい」より広い意味。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

形容詞 めったにない 珍しい すばらしい 稀少 時代:平安時代 種別:古文単語

いかで (いかで)

どうして・なんとかして

平安時代 / 古文単語

解説

副詞で疑問「どうして」と願望「なんとかして」の二義。「いかでか知らむ」（どうして知ろうか）「いかで会はむ」（なんとかして会いたい）。

例文1

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり（男が書くという日記というものを、女も書いてみようと思って書くのである。）【土佐日記】

例文2

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

副詞 疑問 願望 どうして なんとかして 時代:平安時代 種別:古文単語

いかに (いかに)

どのように・どんなに

平安時代 / 古文単語

解説

副詞で疑問「どのように」と程度「どんなに」の意。「いかに思ふ」（どう思うか）「いかに悲しき」（どんなに悲しいことか）。

例文1

高名の木登りといひし男、人を掟てて、高き木に登せて、梢を切らせしに（危険は油断した時に起こる。）【徒然草】

例文2

春はあけぼの（春は夜明けがよい。）【枕草子】

関連

副詞 疑問 程度 どのように どんなに 時代:平安時代 種別:古文単語

いづくに (いづくに)

どこに

平安時代 / 古文単語

解説

疑問の副詞。場所を尋ねる。「いづくに住む」（どこに住むか）。「いづこに」とも。現代語の「どこに」。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

関連

副詞 疑問 場所 どこに いづこ 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆくりなし (ゆくりなし)

思いがけない・突然の

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「思いがけない」「突然の」「不意の」の意。「ゆくりなき事」（思いがけないこと）。予期しない出来事を表す。

例文1

友とするにわろき者、七つあり（友にしてはいけない人が七種類いる。）【徒然草】

例文2

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

関連

形容詞 | 思いがけない | 突然 | 不意 | 予期しない | 時代:平安時代 | 種別:古文単語

ねんごろなり (ねんごろなり)

丁寧だ・熱心だ

平安時代 / 古文単語

解説

形容動詞で「丁寧だ」「親切だ」「熱心だ」の意。「ねんごろに言ふ」（丁寧に言う）。心を込めた様子を表す。

例文1

奥山に、猫またといふものありて、人を食ふなる（奥深い山には猫またというものがいて、人を食うという。）【徒然草】

例文2

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

関連

形容動詞 丁寧 親切 熱心 懇ろ 時代:平安時代 種別:古文単語

はかなし (はかなし)

頼りない・儚い

平安時代 / 古文単語

解説

形容詞で「頼りない」「儚い」「取るに足りない」の意。「はかなき命」（儚い命）。無常観を表す重要語。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

形容詞 頼りない 儚い 無常 取るに足りない 時代:平安時代 種別:古文単語

ゆゆしげなり (ゆゆしげなり)

恐ろしげだ・立派そうだ

平安時代 / 古文単語

解説

形容動詞で「恐ろしげだ」「不吉そうだ」「立派そうだ」の意。「ゆゆし」の様態形。「ゆゆしげなる夢」（不吉そうな夢）。

例文1

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

少しのことにも先達はあらまほしきことなり（些細なことでも、先に知っている人がいてほしいものだ。）【徒然草】

関連

形容動詞 恐ろしげ 不吉そう 立派そう 様態 時代:平安時代 種別:古文単語

参上す (参上す)

参上する

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「参上す」は「参上する」「伺う」の意。サ行変格活用。謙譲語。「御前に参上す」。現代語とほぼ同じ用法。

例文1

やうやう白くなりゆく山ぎは（だんだんと白くなっていく山際、夜明けの山の端。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

動詞 謙譲語 参上 伺う サ変 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

申し上ぐ (申し上ぐ)

申し上げる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「申し上ぐ」は「申し上げる」の意。ガ行下二段活用。謙譲語。「事を申し上ぐ」。「申す」+「上ぐ」の複合動詞。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

動詞 謙譲語 申し上げる 下二段 複合 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

賜る (たまわる)

いただく・くださる

平安時代 / 古文重要動詞

解説

「賜る」は謙譲語で「いただく」、尊敬語で「くださる」の意。ラ行四段活用。二義あり文脈で判断。「御文を賜る」（お手紙をいただく）。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

動詞 謙譲語 尊敬語 いただく 四段 時代:平安時代 種別:古文重要動詞

春はあけぼの (はるはあけぼの)

枕草子の冒頭

平安時代 / 名文句

解説

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて」という『枕草子』の有名な冒頭。四季の美を詠む。清少納言の美意識の象徴。

例文1

中納言参り給ひて、御扇奉らせ給ふに（中納言が参上なさって、御扇を差し上げなさるときに。）【枕草子】

例文2

いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

関連

枕草子 | 清少納言 | 春 | あけぼの | 冒頭 | 時代:平安時代 | 種別:名文句

本意 (ほい)

本来の願い・念願

平安時代 / 古文表現

解説

「本意」は本来の願い、念願、かねてからの望みの意。「本意を遂ぐ」（念願を遂げる）。重要な目標や願望を表す。

例文1

世の中にたえて桜のなかりせば、春の心はのどけからまし（もし世の中に桜がまったくなかったなら、春の心はどれほどのどかだっただろう。）【古今和歌集】

例文2

あやふき時は言はで、やすき時に教へけり（危ない時には言わず、安心な時にこそ教えたのだ。）【徒然草】

関連

名詞 願い 念願 望み 目標 時代:平安時代 種別:古文表現

いみじう心憂し (いみじううれうし)

頻出

非常につらい

平安時代 / 古文表現

解説

「いみじう心憂し」は「非常につらい」「ひどく悲しい」の意。強い悲嘆を表す慣用表現。『源氏物語』などで頻出。

例文1

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

慣用句 つらい 悲しい 悲嘆 心憂し 時代:平安時代 種別:古文表現

世の常ならず (よのつねならず)

普通でない・格別だ

平安時代 / 古文表現

解説

「世の常ならず」は「普通でない」「格別だ」「並外れている」の意。特別な状態を表す慣用表現。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

慣用句 普通でない 格別 並外れている 特別 時代:平安時代 種別:古文表現

思ひやり (おもいやり)

想像・推察・思いやり

平安時代 / 古文表現

解説

「思ひやり」は「想像」「推察」「思いやり」の意。他者の状況や心情を推し量ること。現代語より広い意味。

例文1

世にしたがへば、身苦し。（世間に合わせて生きると、身が苦しくなる。）【徒然草】

例文2

ゆく河の流れは絶えずして（物事は常に移り変わる。）【方丈記】

関連

名詞 想像 推察 思いやり 心情 時代:平安時代 種別:古文表現

あてなり (あてなり)

上品だ・高貴だ

平安時代 / 古文表現

解説

形容動詞で「上品だ」「高貴だ」「優雅だ」の意。貴族的な美を表す重要語。「あてなる人」（上品な人）。

例文1

つれづれなるままに（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

例文2

仁和寺にある法師、年寄るまで、石清水を拝まざりければ（行き先を勘違いして失敗する話。）【徒然草】

関連

形容動詞 上品 高貴 優雅 貴族的 時代:平安時代 種別:古文表現

たより (たより)

便り・機会・縁

平安時代 / 古文表現

解説

「たより」は「便り」「機会」「手段」「縁故」の意。多義語。「人のたより」（人づて）「たよりあらば」（機会があれば）。

例文1

祇園精舎の鐘の声（この世は無常である。）【平家物語】

例文2

つれづれなるままに、日暮らし硯に向かひて（退屈なので、硯に向かって書きつける。）【徒然草】

関連

名詞 便り 機会 手段 縁故 時代:平安時代 種別:古文表現

源氏物語 (げんじものがたり)

平安時代の長編小説

平安時代中期 / 古典作品

解説

紫式部作の長編物語。全54巻。光源氏の生涯と恋愛を描く。日本文学最高峰。世界最古の長編小説とも言われる。平安貴族社会を精緻に描写。

例文1

月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我が身ひとつはもとの身にして（月は同じでも春は昔の春ではない。私だけが昔のままの私でいる。）【伊勢物語】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。（この世は無常である。）【平家物語】

関連

物語 紫式部 光源氏 恋愛 長編 時代:平安時代中期 種別:古典作品

竹取物語 (たけとりものがたり)

日本最古の物語

平安時代初期 / 古典作品

解説

かぐや姫の物語。『竹取翁物語』とも。竹から生まれた姫が月に帰る。日本最古の物語文学。「今は昔」で始まる。求婚譚と昇天譚の融合。

例文1

うつくしきもの。（かわいいものを列挙する。）【枕草子】

例文2

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集まりさぶらふに（雪がたいそう降ったので、いつもと違って御格子を上げ、炭びつに火をおこし、物語などしながら集まってお仕えしているときに。）【枕草子】

関連

物語 かぐや姫 竹 月 最古 時代:平安時代初期 種別:古典作品

堤中納言物語 (つつみちゅうなごんものがたり)

短編物語集

平安時代末期 / 古典作品

解説

平安時代末期の短編物語集。全10編。ユーモラスで機知に富んだ作品が多い。「虫めづる姫君」など。作者不詳。

例文1

花は盛りに、月は隈なきをのみ、見るものかは（花は満開の時だけ、月は雲のない時だけを見るものだろうか。いや、そうではない。）【徒然草】

例文2

冬はつとめて。（冬は早朝がよい。）【枕草子】

関連

物語 短編集 ユーモア 虫めづる姫君 作者不詳 時代:平安時代末期 種別:古典作品

落窪物語 (おちくぼものがたり)

継子いじめの物語

平安時代中期 / 古典作品

解説

継子いじめと恋愛を描いた物語。全4巻。シンデレラ型の物語。平安中期の作品。庶民的で写実的な描写が特徴。

例文1

今となっては昔のことだが（今となってはもう昔の話だが。）【今昔物語集】

例文2

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり（この世は無常である。）【平家物語】

関連

物語 継子いじめ 恋愛 シンデレラ 写実的 時代:平安時代中期 種別:古典作品

うつほ物語 (うつほものがたり)

音楽と恋愛の物語

平安時代中期 / 古典作品

解説

音楽（琴）を主題とした長編物語。全20巻。『源氏物語』以前の作品。俊蔭の琴の秘曲伝承と数世代の恋愛を描く。

例文1

いづれの御時にか（いつの帝の御代であったか。）【源氏物語】

例文2

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也（月日も年も旅人のように過ぎていく。）【奥の細道】

関連

物語 音楽 琴 恋愛 長編 時代:平安時代中期 種別:古典作品

漢文：句形・演習

全53件 / 重要候補11件 kanbun-practice.csv

重要ポイント（大きく）

未読書 (いまだしょをよまず)

まだ本を読んでいない

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字「未」の例。「未二読一レ書」→「いまだ書を読まず」。一度目「いまだ」、二度目「ず」と読む。例：「我未レ見」→「我いまだ見ず」。

関連

再読文字

将帰故郷 (まさにこきょうにかえらんとす)

今にも故郷に帰ろうとする

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字「将」の例。「将二帰一レ故郷」→「まさに故郷に帰らんとす」。一度目「まさに」、二度目「〜んとす」。近い未来を表す。

関連

再読文字

当学 (まさにまなぶべし)

当然学ぶべきだ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字「当」の例。「当レ学」→「まさに学ぶべし」。義務や当然性。「須」より一般的な義務表現。

関連

再読文字

須努力 (すべからくどりょくすべし)

ぜひとも努力すべきだ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字「須」の例。「須レ努力」→「すべからく努力すべし」。強い義務。「当」より強制力が強い表現。

関連

再読文字

宜早 (よろしくはやくすべし)

早くするのがよい

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字「宜」の例。「宜レ早」→「よろしく早くすべし」。適切さの表現。助言や推奨のニュアンス。

関連

再読文字

何為 (なにをかなさん)

何をしようか

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問詞「何」の例。「何為」→「何をか為さん」。反語的に使われることも多い。「何ぞ〜せん」で「どうして〜しようか（いや、しない）」。

関連

疑問

安得 (いずくんぞえん)

どうして得られようか

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問詞「安」の例。「安得」→「いずくんぞ得ん」。反語表現が多い。「どうして〜できようか（いや、できない）」という意味。

関連

疑問

胡不帰 (なんぞかえらざる)

どうして帰らないのか

kanbun / 難易度: advanced

解説

疑問詞「胡」の例。「胡不レ帰」→「なんぞ帰らざる」。反語で勧誘を表す。「帰るべきだ」という意味を含む。

関連

疑問

不二見一レ月 (つきをみず)

月を見ない

kanbun / 難易度: beginner

解説

否定＋返り点の例。「不二見一レ月」→「月を見ず」。「不」（否定）＋「見」（動詞）＋「月」（目的語）。

関連

否定

無二読一レ書之人 (しょをよむのひとなし)

本を読む人がいない

kanbun / 難易度: intermediate

解説

存在否定の例。「無二読一レ書之人」→「書を読むの人なし」。「之」で連体修飾。「読書する人」が存在しないという意味。

関連

否定

知之 (これをしる)

最頻出

これを知る

kanbun / 難易度: beginner

解説

「知レ之」→「これを知る」。「之」は目的語の代名詞「これ・それ」。最頻出の構文。

関連

代名詞

付録：全データ（削らない）

不知 (しらず)

知らない

kanbun / 難易度: beginner

解説

「不」は否定、「知」は知る。「不レ知」と書き「知らず」と読む。最も基本的な否定表現。例文：「吾不レ知」→「吾知らず」（私は知らない）。

関連

基本構文

無人 (ひとなし)

人がいない

kanbun / 難易度: beginner

解説

「無」は「ない」の意味。「無レ人」と書き「人なし」と読む。存在の否定。例文：「室中無レ人」→「室中に人なし」（部屋の中に人がいない）。

関連

基本構文

非我 (われにあらず)

私ではない

kanbun / 難易度: beginner

解説

「非」は名詞の否定。「非レ我」で「我にあらず」と読む。例文：「此非レ我之過」→「これは我が過ちに非ず」（これは私の過ちではない）。

関連

基本構文

莫笑 (わらうなかれ)

笑うな

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「莫」は禁止。「莫レ笑」で「笑うなかれ」。例文：「莫レ笑人」→「人を笑うなかれ」（人を笑ってはいけない）。

関連

基本構文

如山 (やまのごとし)

山のようだ

kanbun / 難易度: beginner

解説

「如」は比喩。「如レ山」で「山のごとし」。例文：「其志如レ山」→「その志、山の如し」（その意志は山のように堅固だ）。

関連

基本構文

生於貧 (まずしきにうまる)

貧しい家に生まれる

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「於」は場所を表す前置詞。「生於レ貧」→「貧しきに生まる」。順序：生（生まる）＋於レ（〜に）＋貧（貧しき）。

関連

基本構文

未読書 (いまだしょをよまず)

まだ本を読んでいない

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字「未」の例。「未二読一レ書」→「いまだ書を読まず」。一度目「いまだ」、二度目「ず」と読む。例：「我未レ見」→「我いまだ見ず」。

関連

再読文字

将帰故郷 (まさにこきょうにかえらんとす)

今にも故郷に帰ろうとする

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字「将」の例。「将二帰一レ故郷」→「まさに故郷に帰らんとす」。一度目「まさに」、二度目「〜んとす」。近い未来を表す。

関連

再読文字

当学 (まさにまなぶべし)

当然学ぶべきだ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字「当」の例。「当レ学」→「まさに学ぶべし」。義務や当然性。「須」より一般的な義務表現。

関連

再読文字

須努力 (すべからくどりょくすべし)

ぜひとも努力すべきだ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字「須」の例。「須レ努力」→「すべからく努力すべし」。強い義務。「当」より強制力が強い表現。

関連

再読文字

宜早 (よろしくはやくすべし)

早くするのがよい

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字「宜」の例。「宜レ早」→「よろしく早くすべし」。適切さの表現。助言や推奨のニュアンス。

関連

再読文字

何為 (なにをかなさん)

何をしようか

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問詞「何」の例。「何為」→「何をか為さん」。反語的に使われることも多い。「何ぞ〜せん」で「どうして〜しようか（いや、しない）」。

関連

疑問

安得 (いずくんぞえん)

どうして得られようか

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問詞「安」の例。「安得」→「いずくんぞ得ん」。反語表現が多い。「どうして〜できようか（いや、できない）」という意味。

関連

疑問

胡不帰 (なんぞかえらざる)

どうして帰らないのか

kanbun / 難易度: advanced

解説

疑問詞「胡」の例。「胡不レ帰」→「なんぞ帰らざる」。反語で勧誘を表す。「帰るべきだ」という意味を含む。

関連

疑問

読書 (しょをよむ)

本を読む

kanbun / 難易度: beginner

解説

「読二書一」または「読レ書」。返り点の基本。「読」（動詞）＋「書」（目的語）の語順を返して日本語順に。

関連

語順

読二中国之書一 (ちゅうごくのしょをよむ)

中国の本を読む

kanbun / 難易度: intermediate

解説

長い修飾語の例。「読二中国之書一」→「中国の書を読む」。「之」は「の」と読む連体修飾語の助詞。

関連

語順

不二見一レ月 (つきをみず)

月を見ない

kanbun / 難易度: beginner

解説

否定＋返り点の例。「不二見一レ月」→「月を見ず」。「不」（否定）＋「見」（動詞）＋「月」（目的語）。

関連

否定

無二読一レ書之人 (しょをよむのひとなし)

本を読む人がいない

kanbun / 難易度: intermediate

解説

存在否定の例。「無二読一レ書之人」→「書を読むの人なし」。「之」で連体修飾。「読書する人」が存在しないという意味。

関連

否定

生於二中国一 (ちゅうごくにうまる)

中国に生まれる

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「生於二中国一」→「中国に生まる」。「於」の後に場所を示す語が来る。前置詞の基本的な使い方。

関連

前置詞

居於二京都一 (きょうとにおる)

京都にいる

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「居於二京都一」→「京都に居る」。「居」は住む、いるの意味。「於」＋場所で「〜に」。

関連

前置詞

如二夢一 (ゆめのごとし)

夢のようだ

kanbun / 難易度: beginner

解説

「如二夢一」→「夢のごとし」。比喩表現。人生のはかなさを表現する際によく使われる。例：「人生如レ夢」。

関連

比喩

若二春風一 (しゅんぷうのごとし)

春風のようだ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「若二春風一」→「春風の如し」。「若」も「如」と同じく比喩を表す。優しく暖かいものの例えとして使われる。

関連

比喩

知之 (これをしる)

最頻出

これを知る

kanbun / 難易度: beginner

解説

「知レ之」→「これを知る」。「之」は目的語の代名詞「これ・それ」。最頻出の構文。

関連

代名詞

読其書 (そのしょをよむ)

その本を読む

kanbun / 難易度: beginner

解説

「読二其書一」→「その書を読む」。「其」は指示代名詞「その」。三人称所有を表すことが多い。

関連

代名詞

此我之友 (これわがともなり)

これは私の友人だ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「此我之友」→「これ我が友なり」。「此」は指示代名詞「この・これ」。「之」は所有・連体修飾の助詞。

関連

代名詞

美哉 (うつくしきかな)

美しいことだ

kanbun / 難易度: beginner

解説

「美哉」→「美しきかな」。詠嘆の助詞「哉」。深い感動を表す。漢詩の結句によく現れる。

関連

助詞

足矣 (たれり)

十分だ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「足矣」→「足れり」。断定の助詞「矣」。「十分である、満足だ」の意味。完了や確定を表す。

関連

助詞

学者也 (がくしゃなり)

学者である

kanbun / 難易度: beginner

解説

「学者也」→「学者なり」。断定の助詞「也」。「A＋也」で「Aである」。判断を表す。

関連

助詞

然乎 (しかるか)

そうだろうか

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「然乎」→「然るか」。疑問の助詞「乎」。文末に置いて疑問文を作る。「〜か」「〜や」と読む。

関連

助詞

孔子曰 (こうしいわく)

孔子が言うには

kanbun / 難易度: beginner

解説

「孔子曰」→「孔子曰く」。「曰」は「いわく」と読む言う動詞。引用文の前に使う。漢文の常套句。

関連

常套句

書曰 (しょにいわく)

書物に言うには

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「書曰」→「書に曰く」。古典を引用する際の決まり文句。「古典にはこう書かれている」という意味。

関連

常套句

古人云 (こじんいわく)

昔の人が言うには

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「古人云」→「古人云く」。「云」も「いわく」と読む。先人の言葉を引用する表現。

関連

常套句

老子曰 (ろうしいわく)

老子が言うには

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「老子曰」→「老子曰く」。道家の思想家老子の言葉を引用。「道徳経」からの引用が多い。

関連

常套句

論語曰 (ろんごにいわく)

論語に言うには

kanbun / 難易度: intermediate

解説

「論語曰」→「論語に曰く」。孔子の言行録「論語」からの引用を示す表現。

関連

常套句

春夜喜雨 (しゅんやきう)

春の夜の恵みの雨

kanbun / 難易度: advanced

解説

杜甫の五言律詩の題名。春の夜に降る待望の雨を喜ぶ詩。「好雨知時節」（好雨は時節を知る）で始まる名作。

関連

漢詩

春望 (しゅんぼう)

春の眺め

kanbun / 難易度: intermediate

解説

杜甫の五言律詩。安史の乱で荒廃した長安を嘆く詩。「国破山河在」（国破れて山河在り）で有名。憂国の情を詠う。

関連

漢詩

静夜思 (せいやし)

静かな夜の思い

kanbun / 難易度: beginner

解説

李白の五言絶句。故郷を思う詩。「挙頭望山月　低頭思故郷」（頭を挙げて山月を望み　頭を低れて故郷を思う）。

関連

漢詩

登鸛雀楼 (かんじゃくろうにのぼる)

鸛雀楼に登る

kanbun / 難易度: intermediate

解説

王之渙の五言絶句。楼閣から遠くを望む詩。「欲窮千里目　更上一層楼」（千里の目を窮めんと欲して　更に上る一層の楼）。

関連

漢詩

山行 (さんこう)

山を行く

kanbun / 難易度: intermediate

解説

杜牧の七言絶句。秋の山道の風景を詠む詩。「停車坐愛楓林晩」（車を停めて坐ながら楓林の晩を愛す）が有名。

関連

漢詩

春暁 (しゅんぎょう)

春の朝

kanbun / 難易度: beginner

解説

孟浩然の五言絶句。春の朝の情景。「春眠不覚暁」（春眠暁を覚えず）で始まる。春の心地よい朝を詠う。

関連

漢詩

白帝城 (はくていじょう)

白帝城

kanbun / 難易度: advanced

解説

李白「早発白帝城」の題材。長江沿いの城。「朝辞白帝彩雲間」（朝に辞す白帝彩雲の間）。

関連

地名

洛陽 (らくよう)

洛陽

kanbun / 難易度: intermediate

解説

中国の古都。多くの漢詩に登場。東の都として栄えた。牡丹の名所としても知られる。

関連

地名

長安 (ちょうあん)

長安

kanbun / 難易度: intermediate

解説

唐の都。現在の西安。多くの詩人が集まった文化の中心地。「春望」の舞台。

関連

地名

江南 (こうなん)

江南

kanbun / 難易度: intermediate

解説

長江の南の地域。温暖で風景が美しい。「江南春」など多くの詩の題材。

関連

地名

三月 (さんがつ)

陰暦3月

kanbun / 難易度: beginner

解説

春を代表する月。桃の花が咲く季節。「上巳の節句」がある。春の盛りを表す。

関連

季節

九月 (くがつ)

陰暦9月

kanbun / 難易度: beginner

解説

秋を代表する月。菊の花が咲く。「重陽の節句」がある。収穫の季節。

関連

季節

梅花 (ばいか)

梅の花

kanbun / 難易度: beginner

解説

早春の花。厳しい寒さに耐えて咲く。高潔さや不屈の精神の象徴。漢詩で好まれる題材。

関連

季節

菊花 (きくか)

菊の花

kanbun / 難易度: intermediate

解説

秋の代表的な花。気高さや長寿の象徴。「重陽の節句」に鑑賞する。陶淵明が愛した花として有名。

関連

季節

月 (つき)

月

kanbun / 難易度: beginner

解説

漢詩の最も重要なモチーフの一つ。故郷への思い、時の流れ、美の象徴。李白は特に月を愛した。

関連

自然

風 (かぜ)

風

kanbun / 難易度: beginner

解説

季節や心情を表す重要な要素。「春風」は優しさ、「秋風」は寂しさを象徴することが多い。

関連

自然

雲 (くも)

雲

kanbun / 難易度: intermediate

解説

変化や無常を象徴。「浮雲」は定まらないものの例え。自由や漂泊を表すこともある。

関連

自然

山 (やま)

山

kanbun / 難易度: beginner

解説

不変性や堅固さの象徴。「山河」で国土を表す。「泰山」は特に重要な山として尊ばれる。

関連

自然

川 (かわ)

川

kanbun / 難易度: intermediate

解説

時の流れや変化を象徴。「逝者如斯夫」（逝く者は斯くの如きか）という孔子の言葉が有名。

関連

自然

漢文：重要語・句形（総覧）

全50件　/ 重要候補20件　kanbun-words.csv

重要ポイント（大きく）

一二点 (いちにてん)

漢文の返り点の一つ。「一」を先に「二」を後に読む

kanbun / 難易度: beginner

解説

返り点は漢文を日本語の語順で読むための記号。一二点は近い距離の返り読みに使用する。例：「読書一」→「書を読む」。レ点よりも離れた文字を返す際に用いる。

関連

返り点

上下点 (じょうげてん)

漢文の返り点の一つ。「上」を先に「下」を後に読む

kanbun / 難易度: beginner

解説

一二点よりも広い範囲の返り読みに使用する返り点。「上」→「下」の順に読む。さらに広範囲の場合は甲乙点（甲→乙）を使用する。三つ以上の返り読みがある場合に階層的に使い分ける。

関連

返り点

甲乙点 (こうおつてん)

漢文の返り点の一つ。「甲」を先に「乙」を後に読む

kanbun / 難易度: intermediate

解説

上下点よりもさらに広い範囲の返り読みに使用する返り点。「甲」→「乙」→「丙」→「丁」の順。最も外側の大きな括りとして使用される。複雑な文構造で複数の返り読みを整理するために必要。

関連

返り点

レ点 (れてん)

すぐ下の字を先に読んで返る記号

kanbun / 難易度: beginner

解説

最も基本的な返り点。すぐ下の一字だけを返して読む。例：「見レ月」→「月を見る」。レは「返」の草書体に由来。隣接した二字の語順を入れ替える最小単位の返り点。

関連

返り点

未 (いまダ〜ず)

まだ〜しない（未然の否定）

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字の一つ。一度目は「いまだ」、二度目は「ず」と読む。例：「未レ知」→「いまだ知らず」。まだその行為や状態に至っていないことを表す。否定の副詞「未だ」と否定の助動詞「ず」の組み合わせ。

関連

再読文字

将 (まさニ〜んとス)

今にも〜しようとする

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字の一つ。一度目は「まさに」、二度目は「〜んとす」と読む。例：「将レ帰」→「まさに帰らんとす」。これから行おうとする意志や、そうなりそうな状態を表す。推量の意味を含む。

関連

再読文字

当 (まさニ〜ベシ)

当然〜すべきである

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字の一つ。一度目は「まさに」、二度目は「べし」と読む。例：「当レ行」→「まさに行くべし」。義務や当然性を表す。道理として行うべきことを示す。

関連

再読文字

須 (すべから〜ベシ)

ぜひとも〜すべきである

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字の一つ。一度目は「すべからく」、二度目は「べし」と読む。例：「須レ学」→「すべからく学ぶべし」。強い義務や必要性を表す。「当」よりも強い意味合い。

関連

再読文字

宜 (よろシ〜べシ)

〜するのがよい

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字の一つ。一度目は「よろしく」、二度目は「べし」と読む。例：「宜レ早」→「よろしく早くすべし」。適切さや妥当性を表す。「〜するのが適当だ」という意味。

関連

再読文字

猶 (なホ〜ごとシ)

なお〜のようだ

kanbun / 難易度: advanced

解説

再読文字の一つ。一度目は「なお」、二度目は「ごとし」と読む。例：「猶レ昔」→「なお昔のごとし」。依然として前の状態が続いていることを表す。比喩や例えを伴うことが多い。

関連

再読文字

盍 (なんゾ〜ざル)

どうして〜しないのか

kanbun / 難易度: advanced

解説

反語を表す再読文字。一度目は「なんぞ」、二度目は「ざる」と読む。例：「盍レ帰」→「なんぞ帰らざる」。「〜しないのはおかしい」という意味で、実質的には勧誘を表す。

関連

再読文字

不 (〜ず)

〜ない（打消）

kanbun / 難易度: beginner

解説

否定を表す基本的な文字。「ず」と読む。例：「不レ知」→「知らず」。最も一般的な否定表現。英語のnotに相当。動詞や形容詞を否定する。

関連

否定

非 (〜にあらず)

〜ではない

kanbun / 難易度: beginner

解説

名詞や代名詞を否定する文字。「あらず」と読む。例：「非レ人」→「人にあらず」。「不」は動詞否定、「非」は名詞否定と使い分ける。英語のis notに相当。

関連

否定

無 (〜なシ)

〜がない、〜しない

kanbun / 難易度: beginner

解説

存在の否定や動作の否定を表す。「なし」と読む。例：「無レ友」→「友なし」。持っていない、存在しないという意味。「不」より存在自体の否定が強い。

関連

否定

莫 (〜なかレ)

〜するな（禁止）

kanbun / 難易度: intermediate

解説

禁止を表す文字。「なかれ」と読む。例：「莫レ笑」→「笑うなかれ」。相手に対して行為を禁止する命令文。「勿」も同様の用法。

関連

禁止

勿 (〜なかレ)

〜するな（禁止）

kanbun / 難易度: intermediate

解説

禁止を表す文字。「なかれ」と読む。例：「勿レ言」→「言うなかれ」。「莫」とほぼ同じ意味。やや柔らかい禁止表現として使われることもある。

関連

禁止

之 (これ、の)

頻出

これ、〜の

kanbun / 難易度: beginner

解説

代名詞「これ」または助詞「の」。例：「読二之一」→「これを読む」、「天之道」→「天の道」。漢文で最も頻出する文字の一つ。

関連

代名詞・助詞

安 (いづくんゾ)

どうして、どこに

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問詞。「いずくんぞ」「いずくにか」と読む。例：「安得」→「いずくんぞ得ん」。場所や方法を問う。反語を表すことも多い。

関連

疑問詞

何 (なニ、なんゾ)

何、なぜ

kanbun / 難易度: beginner

解説

疑問詞。「なに」「なんぞ」と読む。例：「何為」→「何をか為さん」。事物や理由を問う。英語のwhatやwhyに相当。

関連

疑問詞

胡 (なんゾ)

どうして

kanbun / 難易度: advanced

解説

疑問詞。「なんぞ」と読む。例：「胡不レ帰」→「なんぞ帰らざる」。理由を問う。反語を表すことが多い。

関連

疑問詞

付録：全データ（削らない）

一二点 (いちにてん)

漢文の返り点の一つ。「一」を先に「二」を後に読む

kanbun / 難易度: beginner

解説

返り点は漢文を日本語の語順で読むための記号。一二点は近い距離の返り読みに使用する。例：「読書一」→「書を読む」。レ点よりも離れた文字を返す際に用いる。

関連

返り点

上下点 (じょうげてん)

漢文の返り点の一つ。「上」を先に「下」を後に読む

kanbun / 難易度: beginner

解説

一二点よりも広い範囲の返り読みに使用する返り点。「上」→「下」の順に読む。さらに広範囲の場合は甲乙点（甲→乙）を使用する。三つ以上の返り読みがある場合に階層的に使い分ける。

関連

返り点

甲乙点 (こうおつてん)

漢文の返り点の一つ。「甲」を先に「乙」を後に読む

kanbun / 難易度: intermediate

解説

上下点よりもさらに広い範囲の返り読みに使用する返り点。「甲」→「乙」→「丙」→「丁」の順。最も外側の大きな括りとして使用される。複雑な文構造で複数の返り読みを整理するために必要。

関連

返り点

レ点 (れてん)

すぐ下の字を先に読んで返る記号

kanbun / 難易度: beginner

解説

最も基本的な返り点。すぐ下の一字だけを返して読む。例：「見レ月」→「月を見る」。レは「返」の草書体に由来。隣接した二字の語順を入れ替える最小単位の返り点。

関連

返り点

未 (いまダ〜ず)

まだ〜しない（未然の否定）

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字の一つ。一度目は「いまだ」、二度目は「ず」と読む。例：「未レ知」→「いまだ知らず」。まだその行為や状態に至っていないことを表す。否定の副詞「未だ」と否定の助動詞「ず」の組み合わせ。

関連

再読文字

将 (まさニ〜んとス)

今にも〜しようとする

kanbun / 難易度: beginner

解説

再読文字の一つ。一度目は「まさに」、二度目は「〜んとす」と読む。例：「将レ帰」→「まさに帰らんとす」。これから行おうとする意志や、そうなりそうな状態を表す。推量の意味を含む。

関連

再読文字

当 (まさニ〜ベシ)

当然〜すべきである

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字の一つ。一度目は「まさに」、二度目は「べし」と読む。例：「当レ行」→「まさに行くべし」。義務や当然性を表す。道理として行うべきことを示す。

関連

再読文字

須 (すべから〜ベシ)

ぜひとも〜すべきである

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字の一つ。一度目は「すべからく」、二度目は「べし」と読む。例：「須レ学」→「すべからく学ぶべし」。強い義務や必要性を表す。「当」よりも強い意味合い。

関連

再読文字

宜 (よろシ〜ベシ)

〜するのがよい

kanbun / 難易度: intermediate

解説

再読文字の一つ。一度目は「よろしく」、二度目は「べし」と読む。例：「宜レ早」→「よろしく早くすべし」。適切さや妥当性を表す。「〜するのが適当だ」という意味。

関連

再読文字

猶 (なホ〜ごとシ)

なお〜のようだ

kanbun / 難易度: advanced

解説

再読文字の一つ。一度目は「なお」、二度目は「ごとし」と読む。例：「猶レ昔」→「なお昔のごとし」。依然として前の状態が続いていることを表す。比喩や例えを伴うことが多い。

関連

再読文字

盍 (なんゾ〜ざル)

どうして〜しないのか

kanbun / 難易度: advanced

解説

反語を表す再読文字。一度目は「なんぞ」、二度目は「ざる」と読む。例：「盍レ帰」→「なんぞ帰らざる」。「〜しないのはおかしい」という意味で、実質的には勧誘を表す。

関連

再読文字

不 (〜ず)

〜ない（打消）

kanbun / 難易度: beginner

解説

否定を表す基本的な文字。「ず」と読む。例：「不レ知」→「知らず」。最も一般的な否定表現。英語のnotに相当。動詞や形容詞を否定する。

関連

否定

非 (〜にあらず)

〜ではない

kanbun / 難易度: beginner

解説

名詞や代名詞を否定する文字。「あらず」と読む。例：「非レ人」→「人にあらず」。「不」は動詞否定、「非」は名詞否定と使い分ける。英語のis notに相当。

関連

否定

無 (〜なシ)

〜がない、〜しない

kanbun / 難易度: beginner

解説

存在の否定や動作の否定を表す。「なし」と読む。例：「無レ友」→「友なし」。持っていない、存在しないという意味。「不」より存在自体の否定が強い。

関連

否定

莫 (〜なかレ)

〜するな（禁止）

kanbun / 難易度: intermediate

解説

禁止を表す文字。「なかれ」と読む。例：「莫レ笑」→「笑うなかれ」。相手に対して行為を禁止する命令文。「勿」も同様の用法。

関連

禁止

勿 (〜なかレ)

〜するな（禁止）

kanbun / 難易度: intermediate

解説

禁止を表す文字。「なかれ」と読む。例：「勿レ言」→「言うなかれ」。「莫」とほぼ同じ意味。やや柔らかい禁止表現として使われることもある。

関連

禁止

如 (〜ごとシ)

〜のようだ

kanbun / 難易度: beginner

解説

比喩・比況を表す文字。「ごとし」と読む。例：「如レ雲」→「雲のごとし」。「AがBのようだ」という直喩表現。類似性を示す。

関連

比喩

若 (〜ごとシ)

〜のようだ

kanbun / 難易度: intermediate

解説

比喩を表す文字。「ごとし」と読む。例：「若レ夢」→「夢のごとし」。「如」とほぼ同義。やや文語的で格調高い表現。

関連

比喩

於 (〜ニ)

〜に、〜において

kanbun / 難易度: beginner

解説

場所や時を表す前置詞。「に」「において」と読む。例：「生於レ貧」→「貧しきに生まる」。動作の場所や時点を示す。英語のin, at, onに相当。

関連

前置詞

乎 (〜か)

〜だろうか（疑問・反語）

kanbun / 難易度: beginner

解説

文末の疑問を表す助詞。「か」と読む。例：「知乎」→「知るか」。疑問文や反語文を作る。感嘆を表すこともある。

関連

助詞

哉 (〜かな)

〜だなあ（詠嘆）

kanbun / 難易度: beginner

解説

感動や詠嘆を表す助詞。「かな」と読む。例：「美哉」→「美しきかな」。深い感動や感慨を表現する。漢詩の結句によく使われる。

関連

助詞

矣 (〜のみ)

〜だけだ、〜である

kanbun / 難易度: intermediate

解説

断定や限定を表す助詞。「のみ」「り」と読む。例：「足矣」→「足れり」。強い断定や完了を表す。文末に置かれることが多い。

関連

助詞

也 (〜なり)

〜である

kanbun / 難易度: beginner

解説

断定を表す助詞。「なり」と読む。例：「学者也」→「学者なり」。主語と述語を結ぶ判断の助詞。英語のisに相当。

関連

助詞

耶 (〜や)

〜か（疑問）

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問を表す助詞。「や」と読む。例：「然耶」→「然るや」。「乎」と同様に疑問文を作る。やや口語的な印象。

関連

助詞

焉 (これ、いづくんゾ)

これ、どうして

kanbun / 難易度: advanced

解説

指示代名詞または疑問詞。文脈により読み分ける。例：「何為焉」→「何をかこれ為さん」。多義的で文脈判断が重要。

関連

代名詞

焉 (〜たり)

〜である（断定）

kanbun / 難易度: advanced

解説

文末で断定を表す場合もある。「たり」と読む。多機能な文字で、文脈により意味が変わる。助詞としても代名詞としても使われる。

関連

助詞

之 (これ、の)

頻出

これ、〜の

kanbun / 難易度: beginner

解説

代名詞「これ」または助詞「の」。例：「読二之一」→「これを読む」、「天之道」→「天の道」。漢文で最も頻出する文字の一つ。

関連

代名詞・助詞

其 (その)

その

kanbun / 難易度: beginner

解説

指示代名詞。「その」と読む。例：「其人」→「その人」。三人称の所有を表すことが多い。英語のhis, her, itsに相当。

関連

代名詞

安 (いづくんゾ)

どうして、どこに

kanbun / 難易度: intermediate

解説

疑問詞。「いずくんぞ」「いずくにか」と読む。例：「安得」→「いずくんぞ得ん」。場所や方法を問う。反語を表すことも多い。

関連

疑問詞

何 (なニ、なんゾ)

何、なぜ

kanbun / 難易度: beginner

解説

疑問詞。「なに」「なんぞ」と読む。例：「何為」→「何をか為さん」。事物や理由を問う。英語のwhatやwhyに相当。

関連

疑問詞

胡 (なんゾ)

どうして

kanbun / 難易度: advanced

解説

疑問詞。「なんぞ」と読む。例：「胡不レ帰」→「なんぞ帰らざる」。理由を問う。反語を表すことが多い。

関連

疑問詞

矛盾 (むじゅん)

つじつまが合わないこと

kanbun / 難易度: beginner

解説

「矛」は攻撃の武器、「盾」は防御の武器。「どんな盾も突き通す矛」と「どんな矛も防ぐ盾」を同時に売ろうとした商人の話に由来。韓非子の説話。論理的な矛盾を指す。

関連

故事成語

推敲 (すいこう)

文章を練り直すこと

kanbun / 難易度: beginner

解説

唐の詩人賈島が「僧推月下門」か「僧敲月下門」か迷い、韓愈に相談した故事に由来。「推す」か「敲く（たたく）」かで悩んだことから、詩文を何度も練り直すことを意味する。

関連

故事成語

蛇足 (だそく)

余計なもの、無用の長物

kanbun / 難易度: beginner

解説

「蛇を描くのに足を加える」という故事に由来。酒を早く飲める者に与えるという競争で、先に描き終えた者が「足も描こう」と余計なことをした話（戦国策）。必要のない付け足しを指す。

関連

故事成語

漁夫之利 (ぎょふのり)

第三者が争いの利益を得ること

kanbun / 難易度: intermediate

解説

シギと二枚貝が争っている間に漁師が両方とも捕まえた故事（戦国策）。二者が争っている隙に第三者が利益を得ることを意味する。類義語：両者争えば両者失う。

関連

故事成語

五言絶句 (ごごんぜっく)

五字四句の漢詩形式

kanbun / 難易度: beginner

解説

一句が五字、全体で四句（二十字）の漢詩。起句・承句・転句・結句の構成。押韻は通常第二句と第四句。最も基本的な近体詩の形式。

関連

漢詩

七言絶句 (しちごんぜっく)

七字四句の漢詩形式

kanbun / 難易度: beginner

解説

一句が七字、全体で四句（二十八字）の漢詩。五言絶句より表現が豊かになる。杜甫「春望」など名作多数。押韻規則は五言絶句と同じ。

関連

漢詩

五言律詩 (ごごんりっし)

五字八句の漢詩形式

kanbun / 難易度: intermediate

解説

一句が五字、全体で八句（四十字）の漢詩。絶句より長く、複雑な内容を表現できる。中四句で対句を用いる規則がある。格調高い作品が多い。

関連

漢詩

七言律詩 (しちごんりっし)

七字八句の漢詩形式

kanbun / 難易度: intermediate

解説

一句が七字、全体で八句（五十六字）の漢詩。律詩の中で最も長大な形式。対句や押韻の規則が厳格。杜甫が名手として知られる。

関連

漢詩

起句 (きく)

漢詩の第一句

kanbun / 難易度: beginner

解説

詩の導入部分。情景や主題を提示する。読者を詩の世界に誘い込む役割。場面設定や時間・場所の提示が多い。

関連

漢詩

承句 (しょうく)

漢詩の第二句

kanbun / 難易度: intermediate

解説

起句を受けて展開する句。主題をさらに深める。起句の内容を承けて具体化したり、説明を加えたりする。

関連

漢詩

転句 (てんく)

漢詩の第三句

kanbun / 難易度: intermediate

解説

詩の視点や内容を転換する句。新しい視点や対比を提示。詩に変化と深みを与える最も重要な句。意外性や発見がある。

関連

漢詩

結句 (けっく)

漢詩の第四句（最終句）

kanbun / 難易度: beginner

解説

詩を締めくくる句。主題を総括し、余韻を残す。感慨や教訓を述べることが多い。読者の心に残る印象的な表現が求められる。

関連

漢詩

対句 (ついく)

対になる二つの句

kanbun / 難易度: intermediate

解説

意味や文法構造が対応する二句の組。例：「天高く地低し」。律詩では中四句（第三・四句と第五・六句）で対句を用いる規則。美的効果を高める修辞技法。

関連

漢詩

押韻 (おういん)

句末の音を揃えること

kanbun / 難易度: intermediate

解説

詩の各句の最後の字の音（韻）を揃える技法。リズムと音楽性を生む。近体詩では偶数句（第二・四句など）の末尾で韻を踏む規則がある。

関連

漢詩

平仄 (ひょうそく)

漢字の音調

kanbun / 難易度: advanced

解説

漢字の声調を「平声」と「仄声」に分類したもの。近体詩では平仄の配置に厳格な規則がある。音楽的なリズムを作る基礎。日本人には習得が難しい。

関連

漢詩

近体詩 (きんたいし)

唐代に完成した定型詩

kanbun / 難易度: intermediate

解説

絶句と律詩の総称。平仄・押韻・対句などの厳格な規則がある。唐代に完成された洗練された詩形。格調高い作品が多い。

関連

漢詩

古体詩 (こたいし)

形式が自由な漢詩

kanbun / 難易度: advanced

解説

近体詩以前の自由な形式の詩。句数や字数に制限が少ない。平仄の規則も緩やか。率直で力強い表現が特徴。

関連

漢詩

絶句 (ぜっく)

四句からなる短詩

kanbun / 難易度: beginner

解説

近体詩の一形式。五言絶句と七言絶句がある。短い中に深い情趣を込める。最も親しまれている漢詩の形式。

関連

漢詩

律詩 (りっし)

八句からなる定型詩

kanbun / 難易度: intermediate

解説

近体詩の一形式。五言律詩と七言律詩がある。対句や押韻の規則が厳格。格調高く複雑な内容を表現できる。

関連

漢詩